

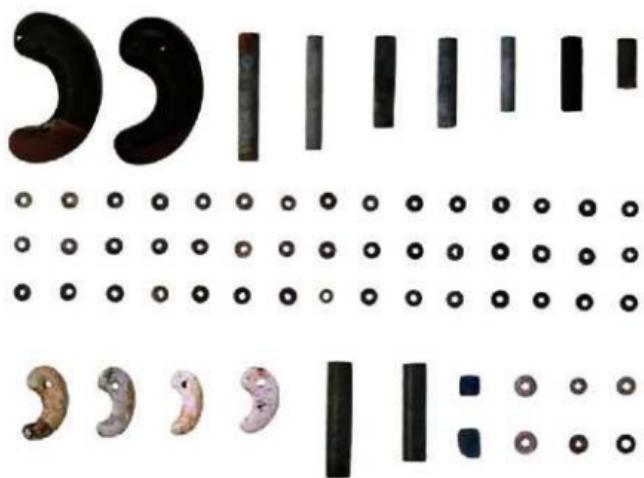
半坂峠古墳群
辻遺跡

1983. 3

兵庫県教育委員会

半坂峠古墳群
辻 遺 跡 正 誤 表

(真)	(行)	(誤)	(正)	(真)	(行)	(誤)	(正)
図版目次	図版 4	7墓壇内	7墓壇内	30	13	堅穴式石室	堅穴式石室
3	21	宮川史	宮川涉	32	15	堅穴式石室	堅穴式石室
5	左13	号1主体	第1主体	33	16	築造詳程	築造過程
7	左 7	含覆	含覆	34	13	立体部	主体部
7	左16	半載	半載	34	20	堅穴式石室	堅穴式石室
7	左32	祭りの作	祭りのため作	37	7	や縫同	や大縫同
8	左 1	管・	管玉・	74	17	東長側石	南長側石
11	8	頃出	頃出	74	20	西長側石	北長側石
17	15	墓壇	墓壇	99	6	半載	半載
17	21	墓壇	墓壇	99	31	1.65m	17°40'
17	24	墓壇	墓壇	99	31	1.71m	19°00'
25	15	蓋廣	墓壇	100	15	伝って	伝わって
29	5	埋葬主体	埋葬主体	101	18	考古学	考古学
30	5	立体部	主体部	奥付		第18集	第18回



カチヤ古墳の玉類

半坂峠古墳群
辻遺跡

1983. 3

兵庫県教育委員会

半坂峠古墳群

例　　言

1. 本書は豊岡市三宅字カチヤ・同字半坂に所在する半坂峠古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土品の整理・印刷等の経費は、兵庫県豊岡土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。調査は昭和56年8月17日から12月8日までの計76日を費やした。
3. 分布調査においては、各尾根ごとを単位として南尾根支群・東尾根支群と呼称していた。しかし、調査の進展によって、各支群ごとにその内容が明らかになり、呼称名を一部変更した。変更したものは、東尾根支群で、当初、東尾根1号墳と呼称していたものをカチヤ古墳と改めた。すでに、東尾根1号墳と呼ばれて、写真等を掲載された書籍があるので、あえてこのことを記した次第である。
4. 遺構の写真撮影は主として山本三郎・渡辺昇が行った。ただし、航空写真は日本産業航空（株）に依頼したものである。
5. 遺物の写真は主に森昭氏に依頼し、撮影して戴いた。なお、カチヤ古墳の鏡の写真は井守徳男氏によるもので、同・鉄器は山本が撮影した。
6. 整理はカチヤ古墳を山本、その他を渡辺が担当した。遺構・遺物の実測・整図の担当は次の通りである。

遺構実測：調査員、補助員

遺構整図：山本、渡辺

遺物実測：山本、渡辺、西口圭介、岸本一宏

遺物整図：山本、渡辺、岸本

7. 特殊遺物については諸先生方の玉藻を戴いた。厚くお礼を申し上げます。
8. 執筆者名は本文目次に示した通りである。なお、編集は山本・渡辺が担当した。
9. 玉類の色調名は、財団法人日本色彩研究所監修『色名小辞典』日本色研事業株式会社発行によった。
10. 本報告にかかる遺物は現在、兵庫県教育委員会魚住分館に保管している。
11. 現地調査および整理調査に際し、多くの方々に指導および有益な助言を戴いた。御方名を記して、謝意を表する次第である。
小西知己、古瀬清秀、岡田博、清水真一、平良泰久、柳原昭彦、渡部明夫、平井勝、松本岩雄、桑原隆博、佐藤晃一

本文目次

例　言

Iはじめに	（渡辺）	1
第1章　調査に至る経過		1
第2章　調査の経緯		2
第3章　調査日誌抄		4
I位置と環境	（渡辺）	11
II南尾根支群の調査		15
第1章　1号墳		15
1. 1号棺	（渡辺）	17
2. 2号棺	（西口）	17
3. 3号棺	（西口）	19
4. 4号棺	（西口）	21
5. 出土遺物	（渡辺）	22
6. 小結	（渡辺）	25
第2章　2号墳	（西口）	26
第3章　南・北尾根支群確認調査結果	（渡辺）	29
第4章　まとめ	（渡辺）	30
IVカチヤ古墳の調査		37
第1章　古墳の位置	（山本）	37
第2章　墳形と規模	（山本）	40
第3章　埋葬施設	（山本）	42
1. 墓　　壙		42
2. 石　　棺		43
3. 遺物の出土状態		49
4. 烹造過程		51
第4章　遺　　物		54
1. 鏡	（山本）	54
2. 鉄　　器	（山本）	55
3. 玉　　類	（岸本）	56
第5章　特殊遺物の觀察		72
1. カチヤ古墳出土の人骨について	（池田）	72

2.	カチヤ古墳出土の歯牙について	(宮川)	73
3.	カチヤ古墳の埋葬主体部にみとめられた 赤色顔料物質の化学分析	(安田・奥野)	74
4.	カチヤ古墳出土の珠文鏡面食食片の 原子吸光分析法による化学分析	(奥野・安田)	76
5.	カチヤ古墳出土網席	(角山)	79
6.	カチヤ古墳使用石材及び出土玉類の石材	(奥田)	82
第 6 章 ま と め		(山本)	90
V	おわりに	(渡辺)	97
付載 三宅オヤシキ 1号墳の石室実測調査		(西口)	98

挿 図 目 次

第 1 図	鏡保管箱	2
第 2 図	測量調査風景	4
第 3 図	調査に参加した人達	4
第 4 図	発掘調査風景	5
第 5 図	タ	6
第 6 図	タ	6
第 7 図	現地説明会風景	8
第 8 図	タ	8
第 9 図	着石を被せるところ	9
第 10 図	発掘調査風景	9
第 11 図	半坂峠遠景	10
第 12 図	半坂峠古墳群と周辺の遺跡	13
第 13 図	半坂峠古墳群古墳分布図	15
第 14 図	タ 南尾根支群地形測量図	16
第 15 図	タ 1号墳 1号棺検出状況	17
第 16 図	南尾根支群 ハ ハ 実測図	18
第 17 図	ハ ハ 2号棺検出状況	19
第 18 図	ハ ハ ハ 実測図	20
第 19 図	ハ ハ 3号棺実測図	折り込み
第 20 図	ハ ハ 4号棺 ハ	21

第 21 図	北浦古墳群から見た半坂峠全景	22
第 22 図	南尾根支群 1 号墳 2・4 号棺土器実測図	23
第 23 図	〃 1・3 号棺 〃	24
第 24 図	〃 2 号墳実測図	27
第 25 図	〃 木口穴検出状況	28
第 26 図	但馬における土器館	31
第 27 図	南尾根支群 1 号墳 3 号棺土器破砕度	32
第 28 図	カチヤ古墳周辺の地籍図	37
第 29 図	カチヤ古墳周辺の地形図	38
第 30 図	〃 南トレンチの状況	39
第 31 図	〃 外形実測図	41
第 32 図	〃 埋葬施設実測図 (1)	折り込み
第 33 図	〃 (2)	44
第 34 図	蓋石裏面実測図	45
第 35 図	〃 埋葬施設実測図 (3)	46
第 36 図	〃 (4)	47
第 37 図	石棺拓影	47
第 38 図	遺物の出土状態実測図	50
第 39 図	棺内東半部遺物の出土状態実測図	51
第 40 図	西側棺外玉類出土状態実測図	51
第 41 図	埋葬施設の築造過程	52
第 42 図	鏡実測図	54
第 43 図	鉄劍実測図	55
第 44 図	鉄刀子実測図	55
第 45 図	針状鉄製品実測図	55
第 46 図	棺内出土玉類実測図 (1)	57
第 47 図	〃 (2)	58
第 48 図	〃 (3)	59
第 49 図	〃 (4)	60
第 50 図	棺外玉類実測図	69
第 51 図	劍付着布	81
第 52 図	三宅オヤシキ 1 号墳開口部	99
第 53 図	〃 石室実測図	折り込み

表 目 次

第 1 表	但馬地域古墳地名表	32
第 2 表	カチヤ古墳棺内管玉径別個数分布表	56
第 3 表	カチヤ古墳棺内管玉長さ別個数分布表	61
第 4 表	カチヤ古墳棺内臼玉厚さ別個数分布表	61
第 5 表	カチヤ古墳棺内臼玉分布表	62
第 6 表	カチヤ古墳棺内管玉計測表	63
第 7 表	カチヤ古墳棺内臼玉計測表	63
第 8 表	ジフェニカルパジドによるスポットの星色とRf値	75
第 9 表	ジソシによるスポットの星色とRf値	75
第 10 表	原子吸光光度計の測定条件	77
第 11 表	豊岡市カチヤ古墳出土の萬葉珠文鏡片の分析値	77
第 12 表	城の山古墳出土鏡の分析値	77
第 13 表	カチヤ古墳棺内織床の種	85
第 14 表	中嶋神社東側の河床壁	86
第 15 表	オヤシキ古墳群西方の河の中洲壁	87
第 16 表	シスト系の組合式石棺一覧表	92
第 17 表	シスト系の組合式石棺をもつ古墳の内容	95

図 版 目 次

巻頭図版	カチヤ古墳の玉類
図版 1	半坂峠古墳群 （上）北西上空から見た半坂峠古墳群 （下）上空から見た半坂峠古墳群
図版 2	半坂峠古墳群南尾根支群 1号墳 （上）全 景 （中）1号棺 （下）3号棺
図版 3	カチヤ古墳埋葬施設 (1)

(上) 石棺身全景

(下) 棺内遺物出土状態

図版 4 カチヤ古墳埋葬施設 (2)

1. 棺外鏡
2. 棺外玉類
3. 長側石上端部
4. 西長側石と西短側石の旋入部
5. 北長側石の内面
6. 北長側石の両部材の合わせ目
7. 墓壇内埋土のⅢ層とⅣ層の関係
8. 北・長側石外表面破れ口接合面の粘土の目張

図版 5 半坂峠古墳群

航空写真 写真上空から見た古墳群

図版 6 半坂峠古墳群

(上) 航空写真

(下) 航空写真 北尾根支群

図版 7 半坂峠古墳群

(上) 遠 景

(下) 遠 景

図版 8 半坂峠古墳群南尾根支群

(上) 調査前

(下) 調査終了後

図版 9 半坂峠古墳群南尾根支群 1号墳

(上) 全 景

(下) 1号棺全景

図版 10 半坂峠古墳群南尾根支群 1号墳

(上) 1号棺侧面写真

(下) " 棺蓋除去後

図版 11 半坂峠古墳群南尾根支群 1号墳

(上) 2号棺全景

(下) " 侧面写真

図版 12 半坂峠古墳群南尾根支群 1号墳

(左上) 3号棺全景

(左下) " 上部蓋除去後

(右上) " 下部蓋除去後

(右下) " 墓壇

図版 13 半坂峠古墳群南尾根支群 1号墳

(上) 3号棺検出状況

- (下) ツ 側面写真
図版 14 半板峠古墳群南尾根支群 1号墳
(上) 4号棺蓋の落ち込み状況
(下) ツ 全景
- 図版 15 半板峠古墳群南尾根支群 1号墳
(上左) 1号棺棺身
(上右) ツ 棺蓋
(下左) 2号棺棺身
(下右) 2号棺棺蓋
- 図版 16 半板峠古墳群南尾根支群 1号墳
(上左) 3号棺
(上右) 4号棺
(下) 3号棺の成形技法
- 図版 17 半板峠古墳群南尾根支群 2号墳
(上) 第1主体
(下) 第2主体
- 図版 18 半板峠古墳群北尾根支群
(上) 10~13地点
(下) 1~9地点
- 図版 19 カチヤ古墳墳丘・埋葬施設(3)
(上) 西方からみた墳丘
(下) 墓堆の断面
- 図版 20 カチヤ古墳埋葬施設(4)
(上) 墓堆と石棺
(下) ツ (蓋石除去後)
- 図版 21 カチヤ古墳埋葬施設(5)
(上) 蓋 石
(中) 粘土の目蓋除去後
(下) 蓋石除去後
- 図版 22 カチヤ古墳埋葬施設(6)
(上) 北からみた石棺身
(下) 石棺身の構造
- 図版 23 カチヤ古墳埋葬施設(7)
(上) 南から見た石棺蓋石

- （下）東から見た石棺身（蓋石除去直後）
- 図版 24 カチヤ古墳埋葬施設 (8)
（上）長側石西端部の状況
（下）西短側石外側の礫と粘土の状態
- 図版 25 カチヤ古墳埋葬施設 (9)
（上）東短側石外側の礫の状態
（下）礫床の断面
- 図版 26 カチヤ古墳埋葬施設 (10)
（上）西短側石外側の礫の粘土の断面
（下）棺内の石枕と東半部の遺物出土状態
- 図版 27 カチヤ古墳埋葬施設 (11)
（上）頭骨と玉類・刀子の出土状態（棺内）
（下）鐵劍の出土状態（棺内）
- 図版 28 カチヤ古墳埋葬施設 (12)
（上）鏡の出土状態（棺外）
（下）勾玉・管玉と針状鉄製品の出土状態（棺外）
- 図版 29 カチヤ古墳石棺細部
1. 蓋石裏面 2. 東蓋石裏面の細部 3. 西長側石と西短側石
及び嵌入部 4. 西短側石外面の整形痕 5. 長側石上端部の整形痕
- 図版 30 カチヤ古墳遺物 (1)
棺内出土玉類（勾玉・管玉・臼玉）
- 図版 31 カチヤ古墳遺物 (2)
（上）鏡と鉄製品（鐵劍・鐵刀子・針状鉄製品）
（下）棺外出土玉類（勾玉・管玉・ガラス小玉・白玉）
- 図版 32 カチヤ古墳遺物 (3)
玉類拡大写真（勾玉3倍、他は6倍）
- 図版 33 カチヤ古墳遺物 (4)
棺内頸飾の想定着装状態
- 図版 34 三宅オヤシキ1号墳
（上）外 形
（下）石 室

I はじめに

第1章 調査に至る経過

豊岡市三宅と大籠岡を結ぶ通称半坂峠は、峠付近を中心に急峻で、道幅の狭さとともに、大型車の運行の妨げとなっていた。特に、積雪時は、困難をきわめ通行の障害となっていた。豊岡市街から神美地区へ行くのに、三開山を回るように駄坂を越えて、南から入らなければならぬ。しかし、半坂峠を越えると、その半分近くの距離を通るに過ぎない。穴見川上流の奥野・市場などは、より半坂峠を越えることによって便利となる。

森尾・立石を中心に計画されている豊岡中核工業団地が完成すると、今までの数倍交通量が増すのは必至である。これら諸条件を満たす交通を至便にし、交通量を緩和する施策の一つとして、豊岡土木事務所によって県道氷留・豊岡線の改良が計画されることになった。計画では、道幅を9.0mに広げるとともに、縱断勾配を緩やかにするもので、峠の最も高い位置から、約8m下へ下げるもので縱断勾配を現在の11.0%から8.0%にする工事である。そのため峠の南北の尾根を最大幅110m削るために、両尾根上に存在する古墳が用地内に入ることになった。そのため、工事に先立って、用地内の古墳の数を確認するとともに、確認された古墳の発掘調査を実施することになった。

調査に入るに際して、昭和55年度から現地などで豊岡土木事務所と兵庫県教育委員会が度々かにわたって協議を重ねた。設計上のルート変更は不可能なので工法の変更を求めたが古墳の是否や位置が正確でないので確認調査は必要不可欠なものとなった。南・北尾根は尾根上に立地し、峠頂上なので工法的に回避することは不可能であるとの回答から南尾根支群については調査を実施することになった。カチヤ古墳に関して峠の裾近くであり縱断勾配も変化がなく、切盛せずに側溝などを付設する道路整備の状況から古墳の保存は協議時点から決定していた。

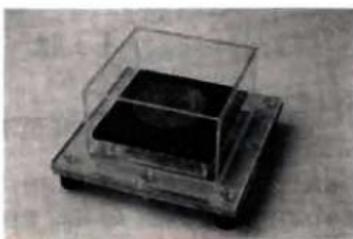
昭和56年度に入ってからも両者による協議は継続してきた。工法などの決定により具体的な細部の打ち合わせを行ない、調査の日程などの検討に入った。カチヤ古墳については以前に墳丘の一部を削平しているが、どの程度の削平を行なっていたものか現況では不明なので古墳の保存を図るために資料を得るために調査を実施した。

調査は、昭和56年8月18日南尾根から手掛けた。フェーン現象の起こる猛暑の中から、積雪にみまわれ始める12月8日、カチヤ古墳の埋め戻しを最後に現地における調査を終了した。

調査期間中に土器洗浄作業を終え、雨天時などを利用して出土遺物の整理作業を開始した。特に鉄器・鏡は保存処理が必要なため、整理を優先させ、12月末に元興寺文化財研究所に保存処理を委託した。鏡は出土時こそ形を保っていたが、粘土に被覆されていたために空気に触れると亀裂を生じ始めた。保存状態が悪く腐化が進行している程度の状況であった。そのため樹

塵による強化、復原を施したが、処理後も脆弱なので保存が完全とは思われないことから鏡に合わせて保存防湿箱を注文した。

昭和57年度は、遺物整理作業を実施した。兵庫県教育委員会魚住分館で主として実施した。後章の調査の組織体制でない、多數の方々の協力を得た。遺物の写真撮影は鉄器・鏡など一部を除いて森昭氏にお願いした。



第1図 鏡保管箱

第2章 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

1. 昭和56年度発掘調査の体制

調査事務 社会教育・文化財課

課長	藤和重喜
文化財担当参考	田中幹夫
副課長	道畠實
課長補佐兼埋蔵文化財係長	池田義雄
係長	堀洋
主任	大村敬通
主任	小川良太
技術職員	岡崎正雄
〃	深井明比古
事務職員	山崎桂子

調査担当 社会教育・文化財課

主任	山本三郎
技術職員	渡辺昇
調査補助員	西口圭介 山田清朝 〃 高坂英史 (立命館大学文学部) 〃 津田清秀 (明治大学文学部) 〃 谷口悦郎 (甲南大学工学部) 〃 谷田久美子 広辻明子 〃 永島真知子 (大手前女子大学文学部)

地元参加者 和田垣一直、栗原定一郎、伊地智英一、岡本 保雄、上田 彰
和田喜代藏、和田き美枝、関岡 雪枝、森 とし子、水島 邦美
調査協力者 濱戸谷 啓(豊岡市郷土資料館)、瀬崎 誠(豊岡市教育委員会)
山本 幸雄(豊岡土木事務所)、山崎 叶(松田 土木)
能登茂行(但馬教育事務所)、新田 小学校

2. 昭和57年度整理調査の体制

社会教育・文化財課	課長	藤本 繁
	文化財担当参事	吉村 芳郎
	副課長	道 烟 貞
	課長補佐	池田 義雄
	タ	堀 洋
	埋蔵文化財係長	大村 敬通
	主任	西口 和彦
	事務職員	杉本 恵子
調査員	主任	山本 三郎
	技術職員	渡辺 昇
特殊遺物の調査	京都大学教授	池田 次郎
	武庫川女子大学教授	安田 博幸
	タ 助手	奥野 礼子
	関西大学教授	角山 幸洋
	樋原考古学研究所	宮川 徒
	タ	奥田 尚
整理参加者	岸本 一宏、西口 主介(社会教育・文化財課 技術職員)	
整理協力者	濱戸谷 啓、瀬崎 誠、井守 徳男、市橋 重喜、別府 洋二 西尾知恵子、山田 隆一、山本 雅和、川上 緑、赤松千恵子 出田 敬子、井上 和代、利根由恵子、矢野 文朗、西上知子 二階堂椎香子	

第3章 調査日誌抄

6月9日(木) 晴れ時々曇り	で随時電話で連絡し検討、調整を行なう。
現地会合。伐採や作業員の件などで話す。	8月17日(月) 晴れ時々曇り
8月8日(土) 晴れ	9:40王子分館から器材搬出。午後1:30から
プレハブ建設。電気・水道など工事。この日ま	荷物を下ろし、室内整備。現地周辺の環境整備。



第2図 測量調査風景

8月18日（火） 晴れたり曇ったり
4号地点上にポイントを置き、第1号地点の中心を見て尾根筋を主軸として杭打ち。5m方眼を組む。

8月19日（水） 曇り時々晴れ
杭打ち継続。南北をアルファベットに東西を数字にして杭番号を付ける。绝对高を引っぱり地形測量開始。土捨て場設定。機を作り土留めとする。

8月20日（木） 曇り時々晴れ
機作り。環境整備。地形測量継続。

8月21日（金） 晴れ時々曇り
フェーン現象の猛暑の一日。伐採木かたづけ。杭打ち。南尾根の調査前全景写真を北尾根から撮影。遠景写真も撮る。

8月24日（月） 晴れたり曇ったり
伐採木かたづけ。午後から発掘開始。Bライン・11ライン・13ラインに畦畔を設定する。第4地点から掘り始める。4号地点頂面の杭を基準としてB13とし西南の隅の杭をグリッド名とする。主軸をBラインとし、調査地西端を10ラインとし、将来古墳が新たに確認された時の番号の余裕を与えた。

8月25日（火） 曇り
地形測量継続。第5地点北側斜面掘り終える。赤褐色土を地山としている。埴輪など確認出来ず。4号地点も掘り始める。

8月26日（水） 晴れ

第4地点平坦面西半（A12・B12）調査。東半表土除去開始。

8月27日（木） 雨
降雨のため発掘作業は中止。伐採木のかたづけと土留め用の柵新たに追加。

8月28日（金） 曇り
地形測量継続。第1地点平坦面まで終了。第4地点東斜面表土除去。B13の平坦面端で土の変化のある個所検出。

8月31日（月） 晴れ
伐採木かたづけ。土の変化部分や小規模だが主体部状になる。が埋土は黄色味をおび有機質含まない。

9月1日（火） 晴れ
A11・A12北壁土層断面実測・写真撮影。土層見分けにくい。地山まで下げるないと主体部確認出来ない。暗黄色の土が局部的にあるが不定形になる。A12・B12から浅い溝状遺構が確認された。埴輪であろうか。

9月2日（水） 晴れ
A12・B12の溝は第5地点の埴輪であろう。埴輪と考へる。B11・C11も地山まで下げる。第1・2地点に駐畔設定。写真撮影用のやぐら撤入。神戸・毎日の新聞記者取材に来訪。

9月3日（木） 曇り
第5地点の埴輪を土層から検討。11ラインの畦畔砂土。第4地点の平坦面清掃。裏塀の確認。



第3図 調査に参加した人達

9月4日(金) 雨

台風の影響による降雨のため作業中止。東尾根1号墳(カチャ古墳)の伐採範囲の掘削。農協から半数したドラム缶を購入。尾根上に運び乾燥時の水溜めとする。

9月7日(月) 晴れ

A11で不定形の土壠検出。写真撮影後掘り下げる。第4地点主体部発掘。A13の最初に確認した主体部は断面が片葉形になり主体部とは考えられなくなった。中央には2基主体部が切り合っている。東尾根1号墳伐採。

9月8日(火) 曇りのち雨

第4地点号1主体中央柱跡を残して掘り終える。写真撮影。南側に木口穴検出。調査前の写真撮影後掘り下げ。中央柱跡実測後除去。第2地点発掘開始。盛土厚い。

9月9日(水) 曇り時々晴れ一時小雨

第1地点東側へ続打ち。第1・2地点両側地形測量。第1地点は尾根上をカットしている。第2・3地点断続。第2地点の西側で八鹿系層と山陰型花崗岩の地層の変化あり。第4地点第1主体写真撮影後実測。第2主体の棺検出に努めるが判然としないため、第1主体の墓壙まで掘り下げる。第1主体で切られた断面から棺検出。

9月10日(木) 曇り時々晴れ

地形測量。第2・3地点掘り下げ断続。第4地点第2主体棺検出。



第4回 発掘調査風景

9月11日(金) 曇り

第2・3地点断続。ほぼ掘り終える。第2地点は平坦面あるが第3地点はほとんどない。

9月16日(水) 晴れ

第2・3地点柱跡清掃・写真撮影。東尾根1号墳伐採及び伐採木のかたづけ。

9月17日(木) 晴れ

第1地点下方に土留めの構造。第2・3地点土留め作成。第2地点平坦面は複雑に土が変化している。木の根などの擾乱が主体部か判断に困る。第1地点表土除去。

9月18日(金) 晴れのち曇り

第2地点主体部の確認。平坦面内で地山が異なっている。平面で主体部と思われるラインを認めたが掘り下げるところが袋状になるなど主体部とは考え難い状況。第1地点断続。

9月21日(月) 晴れ

東尾根1号墳伐採木のかたづけ。周辺の下草刈りなど調査前の撮影準備。南尾根全体も南側の測量出来るように用地外へ放り込んだ伐採木のかたづけ。

9月22日(火) 晴れ

第1地点柱跡(18-Bライン)写真撮影・実測。柱跡除去後平坦面清掃。主体部の検出に努める。第1地点東側の地形測量。東尾根1号墳調査前の写真撮影。

9月24日(木) 晴れのち曇り

第1地点再度清掃。L字形に主体部が切り合っているように確認されたが、埋土單一でなく一部に有機質土が広がっている。土器小片出土。東尾根1号墳通路に南尾根同様の土留めの構造。

9月25日(金) 雨

作業中止。

9月28日(月) 雨のち曇り

第1地点主体部は北と南木口に有機質土の方形のラインが見え複数の墓壙が存在することを確



第5図 発掘調査風景

認。地山を削とする墓壙。北のものを下げるに大形の蓋を使用した土器棺であった。現状で見て鎌田東2号墳の蓋を思わせる形態で横向きで検出。土器は1個体で蓋になる土器は認められない。

9月29日(火) 晴れ時々曇り

第1地点平面図主体部確認。先日確認したL字形に切り合ったように見えた各々の木口部に3基主体部があるようである。地山土である軟質の赤褐色の土を含むことを特徴とする。主体部に番号を与える。西側から1号とし昨日検出したものを3号と命名。1・2号主体は共に蓋を立てた土器棺のようである。どちらも二段墓壙。第1主体は石を作っている。

9月30日(水) 晴れ時々曇り

第1地点南端境界まで広げる。第1主体の南で第4主体確認。小形の土器で墓壙は小さく埋土は見えない。蓋になっていた土器が落ち込んでいたのが中空になっていた。1~3主体中央駐畔を残して掘り下げ。棺の上部が出た時点で撮影。1・2主体は埋土1層。第3主体は埋土が3層から成る。第2地点から第1地点の主体部の位置関係のための全景写真を撮る。神戸・読売・サンケイ記者取材に。

10月1日(木) 雨降ったりやんだり

南尾根は荒仕事終え古墳の確認を終了。東から古墳名を与え、第1地点を1号墳、第4地点を2号墳とする。1号墳全景写真。土器棺側々にも掘

影。割り付け行ない第1・2主体実測。第4主体掘り始める。蓋文のある口縁部あり。B13を基準に杭打ち直す。

10月2日(金) 晴れたり曇ったり

第4主体写真撮影。第1主体平面図終了。北尾根伐採開始。昨日の新聞記事とロコ1から見学者多し。地元三宅・大源同の婦人会はじめ新田小学校5・6年生など多数見学。

10月5日(月) 雨

南尾根作業中止。北尾根伐採木かたづけ。階段を作るなどの環境整備。

10月6日(火) 晴れ

第2地点さらに下げるが主体部認められない。第1地点第1主体東半の石を除去して写真撮影。側面の写真。図が取れるように18ラインをセクションにして東半を掘り下げる。第2主体レベルを入れたのち東半を掘り下げる。竪洞部を二重にして蓋としている。写真撮影後蓋を回転しながら除く段階で崩壊してしまった。土器が倒くなっていたためだが残念。第3主体平面実測。

10月7日(水) 晴れ時々曇り

第2主体側面図を取り撮影してから土器取り上げ。第1主体底が出るまで掘り下げ側面から図・写真を撮る。蓋は部分的に三重になっており各段階で写真・図化。墓壙と蓋はほぼ接している。第3主体縦・横断面図作成。棺内遺物を調査しようと上から土器を取っていくと下から同じタイプの



第6図 発掘調査風景

土器があり、取り上げた土器は蓋となっていたことがわかった。側部の大破片を口縁部に蓋とし二重になっている。第4地点（2号墳）下層に主体部がないか断ち切る。主体部なし。

10月8日（木）雨

作業員休み。第2主体の土器からバインダー20光音波に含波さす。雨のあいまをねって第3主体内蓋の実測・写真撮影。

10月9日（金）雨のち曇り

第1主体昨日に続いて蓋を取り除きながら撮影・実測。棺は土が侵入しておらず底から1.5cm砂質土が溜まっていた。主軸（穿孔と口縫の中心）は12°傾いていた。腐葉なし。第3主体棺身の写真撮影。棺内遺物の有無を確かめるため掘り下げたところ、棺身ではなく土器は全て蓋もしくは棺になる性格のもの。墓室底に半壊した蓋を被せたものと判る。北尾根伐採木かたづけ。

10月12日（月）晴れ

北尾根伐採木のかたづけ。尾根筋を主軸として杭打ち。5m方眼を組む。

10月13日（火）曇り

北尾根伐採木のかたづけ。東尾根1号墳地形測量。橢円形の凹境で3方に直交させてトレンチ設定。

10月14日（水）曇り時々小雨

北尾根伐採木のかたづけ。調査前の写真を南尾根から撮る。東尾根1号墳発掘開始。上の主体部確認の4×4mのグリッドから始める。土取りされた崖面検査。南尾根1号墳第3主体断面図作成後土器取り上げ墓頂の撮影・実測。

10月15日（木）晴れ

豊岡一円祭りの作業員休み。南尾根1号墳第4主体平面図作成。エレベーションを入れて土器取り上げ。

10月16日（金）晴れ

東尾根1号墳グリッド掘り下げ組織。土の変化

大。墓頂まだ検出されない。さらに下げる。崖面では土は複雑。八重累層と花崗岩の断層地帯にあるためだろうか。原則的には東から西へ傾斜している。西トレンチ北表での觀察通り埴輪が認められた。

10月19日（月）曇り時々小雨

北トレンチ発掘。平坦面のグリッド溝で墓頂テイン検出。大きな墓域となるのでグリッド試験。

10月20日（火）晴れ

墓頂の全容検出。短辺で3.6mの大形墓域。南尾根1号墳第1主体西半の石一部二段に積んでいる。断面図・写真撮影。第4主体も墓域の写真。これで南尾根の調査を終えたので道具・器材撤収し清掃し全景写真を北尾根から撮影。

10月21日（水）曇り

東尾根1号墳墓壁埋土と肩の差を写真撮影。十字に鞋印を設けて掘り始める。北尾根地形測量。豊岡土木で打ち合わせをし、11月7日（土）現地説明会を実施することに決める。

10月22日（木）曇り

東尾根1号墳墓壁内掘り下げ。途中で土の変化があり清掃したところ二段墓頂と判明。地山土を肩部に置いている。さらに下げるごとに板石と目張りの黄色粘土が検出。北尾根も古墳と断定出来ないので下から1~11地点として確認調査実施。第11地点にトレンチ設定。

10月23日（金）曇り時々雨

東尾根1号墳跡群の撮影準備するが降雨のために中止。北尾根第11地点トレンチ新たに東西に設定する。先日のも含めて自然地形で古墳の可能性薄い。現地説明会資料を但馬教育事務所でタイプお願いする。

10月26日（月）晴れ

東尾根1号墳跡群撮影・実測後除去。鞋印の下に蓋の織目あり。1枚に見えたが2枚で黄色粘土で目張りしていた。側壁との織目も目張りし

ている。北側木口部棺外で勾玉・管・針状鉄製品出土。北尾根11地点西側にもトレンチ設定。

10月27日（火） 晴れ

今日から辻遺跡の発掘に入るため作業員は辻へ。東尾根だけ細かい仕事で繼續する。石棺調査して写真撮影。実測後粘土を取って再度撮影。

10月28日（水） 晴れ

棺蓋の絶対高を測って蓋を開ける。丁寧な作りの石棺。側壁がきっちり閉まるよう溝を蓋に埋めている。朱が塗布されている。蓋石の鍵頭部下だけ土が落ちていたが他の板だけ現状をよく残している。頭蓋骨だけ残存。枕から胸に相当する部分に落ちていた。調査有の期待を持って開けたが棺内は玉類・鉄器・棺外からの出土を期待しつつ棺側部の粘土精査。粘土に封じ込めるように怪の小さな鏡出土。調査員討議の結果、南尾根とは時期・性格が異なるので東尾根1号墳を小字名を取ってカチヤ古墳と改めることにする。三宅小学校生徒ら多數見学。各新聞社取材。

10月29日（木） 雨のち曇り

辻遺跡の調査午前中で荒仕事終えたので從から北尾根に戻る。トレンチ繼續。カチヤ古墳遺物出土状態写真撮影。鏡・頭骨回復し取り上げ。珠文鏡だった。上から見ると轡った状況のように汚れた個所あり。埋葬時の状況?

10月30日（金） 晴れ

カチヤ古墳の出土状態を固定しながら取り上



第7図 現地説明会風景



第8図 現地説明会風景

げ。北尾根杭打ち・地形測量。11地点から南に伸びる尾根にもトレンチ設定。

11月4日（水） 晴れ

北尾根杭打ち。10地点上方のトレンチで上層の変化があるので南に拡張する。小西知己氏にカチヤ古墳などの断面を見て戴き、地質について教示を得る。

11月5日（木） 曇り

北尾根調査。8～10地点に十字に貼合せ設定。瀬戸谷氏の紹介で新田小学校でファックス・輪転機借りて説明会資料印刷。

11月6日（金） 雨降ったりやんだり

北尾根8～10地点調査。9地点で土器・器片出土。最も平坦面積が隣接は明白。南尾根・カチヤ古墳現地説明会のための環境整備。

11月7日（土） 雨降ったりやんだり

朝から説明会準備。雨模様だが決行することにする。カチヤ古墳資料新田小学校で作成。あいにくの天候の中頃から合わせて150人余りの方々集まって戴く。市教委の北浦古墳群と合わせて説明会を実施。南尾根1号墳第3主体だけ一部現地で復原する。

11月9日（日） 曇り

北尾根8・9地点調査。

11月10日（火） 晴れ時々曇り

カチヤ古墳主体部削り付け実測開始。各トレンチ清掃し写真撮影。北・西トレンチ土層断面実



第9図 置石を被せるところ

測。北尾根8~10地点連続。

11月11日(木) 曇り時々雨

カチャ古墳主体部実測。北尾根9地点も古墳とは思えず10地点から土器が洗れたものと思われる。8地点からも土器出土。

11月12日(木) 晴れ

カチャ古墳平面図終了。朱分析用として採取。壁の間に落ちている玉取り上げ。北尾根8地点に連続。高杯出土。杭打ち。

11月13日(金) 晴れ時々雨

北尾根8地点平坦面清掃。不明石組検出。

11月16日(月) 晴れのち小雨

北尾根9~10地点清掃。1~4地点測量。

11月17日(火) 雨

カチャ古墳木口部下げる。頭部だけ棺内と同じレベルで離散している。目張りも見られる。断剤開始。北尾根8地点清掃。

11月18日(水) 晴れ

カチャ古墳断剤トレント継続。足部の木口にも確認される。全景写真。北尾根1~4地点掘り始める。

11月19日(木) 晴れ

カチャ古墳木口など部分写真後実測。北尾根1~4地点連続。地形測量補足。

11月20日(金) 曇り

北尾根1~4地点解続。8地点浅い落ち込み抜取出するが主体部にするには苦しい状況。

11月24日(火) 晴れ

カチャ古墳石棺細部の計測。北尾根1~4地点連続。4地点で集石確認。大波岡の確認調査するが包含層も認められず遺跡は統いていないよう。

11月25日(水) 曇り時々晴れ

カチャ古墳石棺の整形模(ノミ痕)拓本。棺蓋の実測。数値を一覧表に。北尾根連続。

11月26日(木) 曇り

カチャ古墳ノミ痕拓本。北尾根連続。4地点集石は地山に接しておらず規則性がない。

11月27日(金) 雨

北尾根連続。降雨のため午後作業中止。

11月30日(月) 曇り夕方小雨

航空写真の準備。天候不順のため延期。北尾根8地点石を伴う土壤一枚下げる。方舟にはなるが埋土悪く底不自然。

12月1日(火) 晴れ時々曇り

航空写真撮影。立野大橋・総合庁舎屋上から遠景写真撮る。カチャ古墳木口部断剤。排水溝なし。撮影後蓋石を元通り被せる。粘土で目張りをし墓壇内には出石土を入れる。北尾根連続。

12月2日(水) 雪

今冬最初の積雪。北尾根連続するが追われる気がする。工事の重機が今日搬入されたのでなおさら追われる気がする。

12月3日(木) 曇り時々雪

雪を擋いて北尾根連続。1~4地点駐車場撮影後



第10図 発掘調査風景

除去。南尾根の西斜面歩いてみると古墳は存在しない。

12月4日（金） 晴れ

北尾根駐畔除去。カチヤ古墳埋め戻し。南尾根の上方分布調査。遺跡地図に記載されているやな谷古墳などで見るが全く分布調査だけで決し難いように思われる。

12月7日（月） 曇り一時にわか雨

カチヤ古墳埋め戻し。土が足らないのでブルで3杯土を運ぶ。道具洗浄・かたづけ。

12月8日（火） 曇り時々雨

カチヤ古墳埋め戻し終了。表面平滑にならす。道具かたづけ。頸骨を池田教授に見て戴くため和田山町教委まで持っていく。和田山工業団地内の古墳の人骨の依頼に便乗する。夕方から打ち上げ。今日で作業無事終了。

12月9日（水） 曇り時々雨

撤退準備。石棺材を採取したと思われる陰石の

露頭（石切場）を見に行く。

12月10日（木） 晴れ

撤去準備。電話・電気阙切れる。

12月11日（金） 晴れ

ブレハブ内かたづけ。昼すぎ運動の4tトラック2台到着。九日市の職業訓練学校定地の発掘調査の器材・遺物を積んで魚住分館へ搬入する。1台は次の調査現場である三田市青野ダム調査事務所へ向い、全ての作業を一つがなく終えた。



第11図 半板峠遠景

I 位置と環境

半坂峠古墳群は、豊岡市三宅と大熊間に位置する古墳群である。半坂峠は今でこそ全て豊岡市域に属する小さな峠だが、地理的・歴史的に見て東西を区別する意義深い峠の一つである。

まず、地理的な面から概観してみると、山陰型花崗岩と中新世北但層群に含まれる八重累層の断層にあたっている。一般に久美浜断層と呼ばれるもので豊岡盆地周辺最大の地層の変化である。巨視的に見ると出石郡及び穴見川上流域が基盤層である白亜紀後期火成岩類に属する山陰型花崗岩類の上に西側から八重累層さらに豊岡累層が重っている。そして局部的に最新世の地層である玄武岩が噴出している。玄武岩は天然記念物玄武洞で広く知られている柱状節理や亀甲形の板状節理の自然の造形もさることながら石垣や庭石として必要な資源として豊岡北郊では重宝がされている。山陰型花崗岩も神美みかけとして石材として利用されている。さらに風化した土は出石土の真砂土として土取りが盛んである。神美や出石周辺ではそのための崖が頻繁に見ることができる。それに伴う埋蔵文化財とりわけ古墳の調査の契機となることが多い。

地形は西方水ノ山を最高として東に低くなり、円山川を最下点とし東に順次高くなり400m代の丘陵が但馬と丹後の境界となっている。その丘陵内に奈佐川、鎌谷川や穴見川によって形成された狭隘な谷が見られる。円山川は川幅が広く緩やかに流れているが、一度大雨に見舞われると氾濫しやすい河川であった。特に六方川・鎌谷川の合流する裾原から穴見川と小野川・立石川が合流して六方川と名を変える下駄山までのいわゆる六方田圃は洪水に遭遇することが多かったようである。水田の中に現在でも新田小学校しか建っていないのはその表われであろう。西方を六方川、そしてその氾濫原である六方田圃とし、東方を穴見川によって形成された谷地形に挟まれた中起伏丘陵に半坂峠古墳群は位置している。半坂峠の西側は氾濫原（本来は半淡半鹹湖）が深く入り込み縮れており、半坂峠によって三開山を区分している。

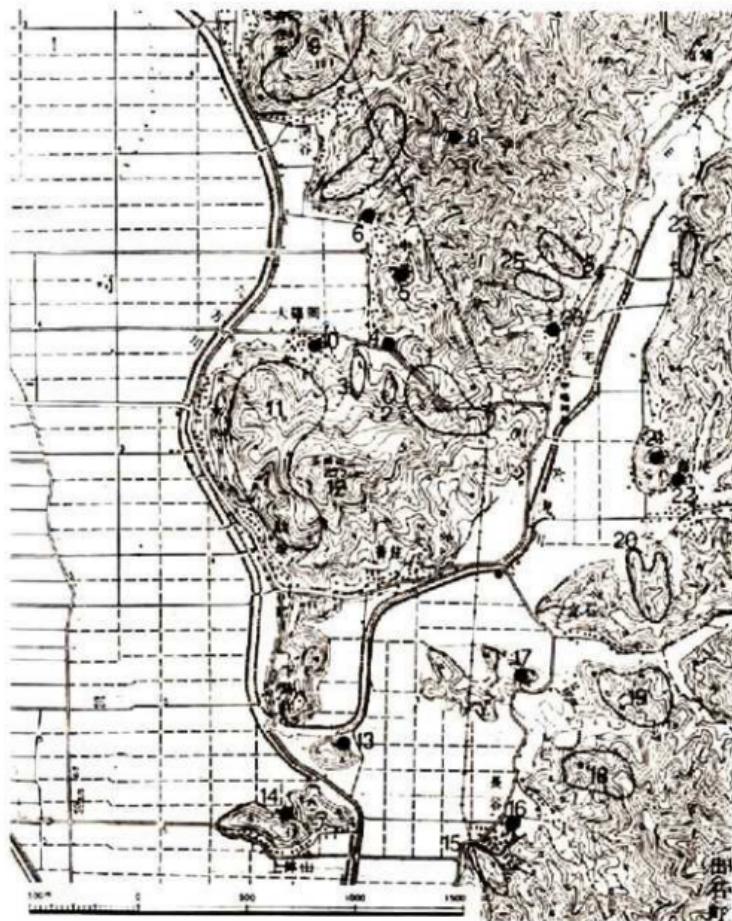
次に歴史的観点から見てみると、豊岡市における最古の遺物は本報告に掲載している辻遺跡の押型文である。縄文時代早期末の所産である。豊岡市の祖先の足跡は辻遺跡であるが、東方に直線距離で10.3kmの出石郡但東町木村西ヶ奥や南西22kmの養父郡養父町森石ヶ堂や養父郡閑宮町内の複数の遺跡から先土器時代終末から縄文期の初頭の遺物である尖頭器が出土している。さらに遡る遺物として閑宮町別宮家野遺跡などから先土器時代のナイフ形石器や翼状剣片が散見される。最近先土器時代の遺物が再確認されており、播磨南部の段丘上の遺跡数には及ばないが、漸次増加していくだろう。閑宮町・大屋町を中心に確認される期待が望まれる。

縄文時代になると前述した辻遺跡が早期から後期にかけて継続している。早・前期には但馬ではキャンプサイトとも解釈されている神鍋山や別宮家野、杉ヶ沢などの標高の高い地域に立地する遺跡が多く分布している。豊岡市域でこれに相当するのは辻遺跡だけである。他の遺跡

は全て後期の遺跡で低地に立地している。中谷（中谷字上山）、荒原（香住字荒原）、長谷（長谷字ヨウガイ）の貝塚と円山川河床（大磯・塩津）などの遺物採集地で、辻遺跡と遺跡の立地を異にしている。中谷貝塚は平坂峠の西側に下った地点にあり入り込んだ湖の北岸に位置する。貝層が現状でも観察でき、大規模な貝塚であることが窺われる。豊岡では湖岸に住み、貝を探り生活を営んでいたことが厚い広い貝塚が物語っている。

弥生時代の最も著名な遺跡は氣比龍崎の銅鐸出土地であろう。昭和49年茨木市東奈良遺跡で銅鐸鉤型が検出され、そのうち1個の銅鐸が氣比3号鐸の鉤型と判り注目されるようになった。但馬における弥生文化は前期後半に始まる。出石町宮内黒田、八鹿町小山東家ノ上、和田山町片引などで出土している。宮内黒田、片引では縄文晚期の黒土BⅡ併行の土器も出土しており農耕文化はほぼ同じくして但馬に広がったことがわかる。他にも和田山・養父・日高・浜坂の各地からも前期後半の土器が採集されている。中・後期は全域に見られるが、中期後半になると南但と北但の土器差が明らかに看取される。遺物を採集されるものの明確な遺構が検出されなかったが、最近の調査整備によって徐々に確認されつつある。八鹿町木里や但東町奥藤の円形周溝墓^(註1)はその端緒である。北但では奥藤例を除いて遺構が検出されなかつたが、1981年豊岡市五荘地区の亀ヶ崎遺跡で中期後半の竪穴住居址が調査された。その上、比高差50m以上を測る高地性集落であった。弥生時代の但馬を考える上に大きな波紋を投じた遺跡である。市内で他の弥生遺跡は大磯・塩津の円山川河床や宮井・九日市、女代神社なども知られている。この中で女代神社遺跡は土器量も多く規模も大きく最も遺構の検出される可能性が高い。中谷貝塚の南方600mの平坂峠の西裾の大森岡の現集落内からも後期の蓋形土器が出土している。縄文後期の湖岸に位置した集落は低地に、そして亀ヶ崎のような山頂にも広がるようになる。

次に古墳時代になると但馬では森尾市尾古墳が前期古墳として有名であるが、それに連なる墳墓群が多数知られている。山東町柿坪中山古墳群、豊岡市妙楽寺墳墓群、同北浦古墳群、同七ヶ塚古墳群など多数分布しているが、集団墓の状態で前代の葬制を踏襲している觀が強い。首長墓としてできる古墳はやはり森尾市尾古墳まで存在しないようである。この時期、北浦古墳群や鎌田古墳群などとともに平坂峠古墳群南尾根支群は形成されたものと思われる。同時期同種の古墳群は北但馬に多く集中するが、南但でも柿坪中山古墳群のように存在するし、丹後・伯耆の近隣諸國でも築かれている。土器棺を主体部とする点では鎌田東2号墳や納屋ホーキ古墳が類例である。市外では出石町小野小学校裏山古墳と日高町西気小学校裏山古墳がある。城崎町小見塚、森尾市尾古墳の首長墓や全長55m前後の前方後円墳である納屋ホーキ古墳の首長墓に準ずる古墳の系符は明確でない。納屋ホーキは同一尾根上で古墳を6世紀初頭まで200基近くを造営し続ける。集団墓的な古墳群の中には北浦18号墳、立石105・107-1号墳など際立った存在の古墳が含まれている。が、古墳群の一墳として存在する。単独墳としてより首長墓の系符を引くものは出石町に残されている長持形石棺を主体部とする所在地不明の古墳であろう。南但の池田・船之宮古墳のような古墳ではなく、出石町茶臼山古墳がそれに近い存在であろ



第12図 半坂峠古墳群周辺の遺跡

- | | | | |
|-------------|---------------|--------------|---------------|
| 1. 半坂峠古墳群 | 8. 河谷城址 | 15. 長谷ハナ古墳群 | 22. 土馬出土地 |
| 2. 越宮古墳群 | 9. 百合地古墳群 | 16. 長谷道跡(縄文) | 23. 三宅オヤシキ古墳群 |
| 3. <す谷古墳群 | 10. 大隅岡遺跡(弥生) | 17. 日雇寺古墳 | 24. 天王古墳群 |
| 4. 敷布地(中近世) | 11. 三間山古墳群 | 18. 万福山古墳群 | 25. 惠等寺裏山古墳群 |
| 5. 宮山古墳 | 12. 三開城址 | 19. 立石古墳群 | 26. 薬師寺址(白鳳) |
| 6. 中谷貝塚(縄文) | 13. 荒原遺跡(縄文) | 20. 北浦古墳群 | |
| 7. 河谷古墳群 | 14. 田和地墓穴 | 21. 鹿尾市尾古墳 | |

うか。旧出石郡内にはカチャ古墳を含めて5世紀前半の古墳が多く見られ、鏡の副葬も見られる。北浦18号墳、立石107-1号墳、下安良1号墳、田多地3号墳、箱根山口3号墳などが相当する。北浦・立石古墳群は継続され、5世紀後半になると下陰・七ツ塚などの古墳群が遅れて築造される始める。古墳群として築造されているなかでカチャ古墳は微視的に見ると単独墳として存在している。カチャ古墳と同種のいわゆる陰石と呼ばれる石材を使用した石棺は亀ヶ崎1・3号墳、納屋ホーヤ古墳、七ツ塚6・8号墳の円山川左岸や出石郡内の右岸にも古墳が見られる。この時期の主体部は石棺の他はほとんど木棺直葬である。6世紀前半までこの傾向は続いた。見手山1号墳、鷺塚古墳の初期横穴式石室の出現へとなる。その後、横穴式石室を主体部とする群集墳が築造されるが、市内では引野の大師山古墳群を代表とする程度で、概して群集墳は小数である。田結郷をはじめとする海岸部や奈佐谷の入口部、中筋、神美の各地に横穴式石室は散見される。付載した三宅オヤシキ古墳群のように少數で形成されている。横穴式石室に遅れて北浦や下鉢山などの横穴が築かれ、三宅では白鳳期の寺院である薬師寺が建立されている。律令期に入ると各地で条里制の痕跡が看取られる。発掘例も市内で幾つか実施されている。式内社も多く鎮座しており、特に半坂峠の東面に中嶋神社が、西面には穴目杵神社が位置する点は興味深い。三宅には三宅小学校裏山から藏骨器が出土しており、三宅そのものの名も屯倉に通じるものとして考慮すべき点であろう。

半坂峠は旧城崎郡と出石郡を隔てる郡界となった峠で地質的にも久美浜断層が走り地質構成を異にしている。峠の西には穴目杵神社が鎮座し、弥生後期の大椎岡遺跡や縄文後期の中谷貝塚が所在し、湖底には蟹を極めたが肥沃な六方田園が広がっている。東には中嶋神社があり、境内北側から柱頭が出土し、さらに北方丘陵東斜面には慈等寺裏山古墳群が5基から成り、その南東に白鳳時代の埴輪を出土した薬師寺が所在する。穴見川の対岸は三宅オヤシキ古墳群があり、その山塊南端に森尾市尾古墳が約1km離れて位置する。森尾市尾古墳から森尾川を隔てて北浦古墳群がさらに立石川を越えると立石古墳群が所在する。峠南側は新田氏が築城した三開山が優美な姿を遠くからでもながめることができ、その山麓に横穴式石室を内部主体とする古墳を築造している。このような環境の中で、峠の両端の尾根上に前代の葬制を残した階段状の古墳群と峠を下った小尾根突端に精緻な石棺を埋納したカチャ古墳から残る半坂峠古墳群は立地している。

(註)

- (註1) 高松龍輝・山口卓也「但馬地方における田石器について」『兵庫考古13号』 1981
- (註2) 松下勝・井守徳男他「但馬・米里遺跡」 1979 八鹿町教育委員会
- (註3) 1977年県教委調査。大村敬通氏教示
- (註4) 濑戸谷忠・瀬崎誠他「亀ヶ崎遺跡群」 1982 豊岡市教育委員会

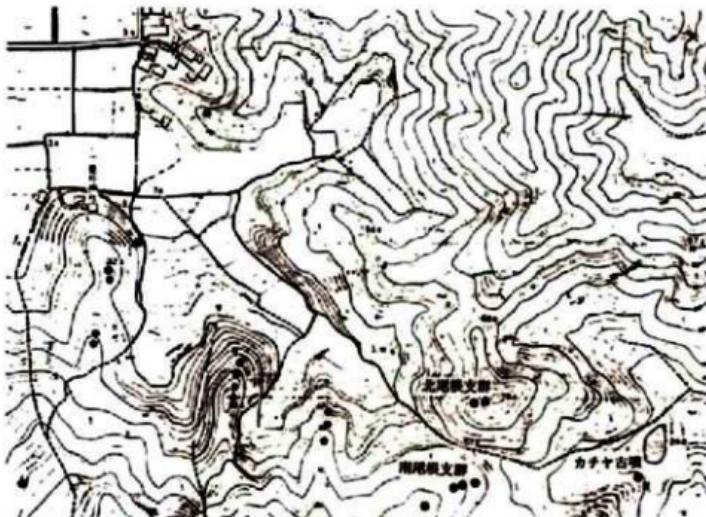
■ 南尾根支群の調査

横穴式石室を内部主体にしない豊岡市周辺の古墳は草木が繁茂している状況ではなかなか確認しにくく、半坂峠古墳群も例外ではなかった。カチャ古墳は墳丘が歷然としており一日瞭然であったが、南尾根・北尾根の古墳は起伏に乏しく、表面観察では古墳の是否の判断に苦しみ古墳であるとの断定はしかねた。そのため古墳と思われる平坦地に番号を与え、標高の低い方から第1地点と呼び調査を実施した。

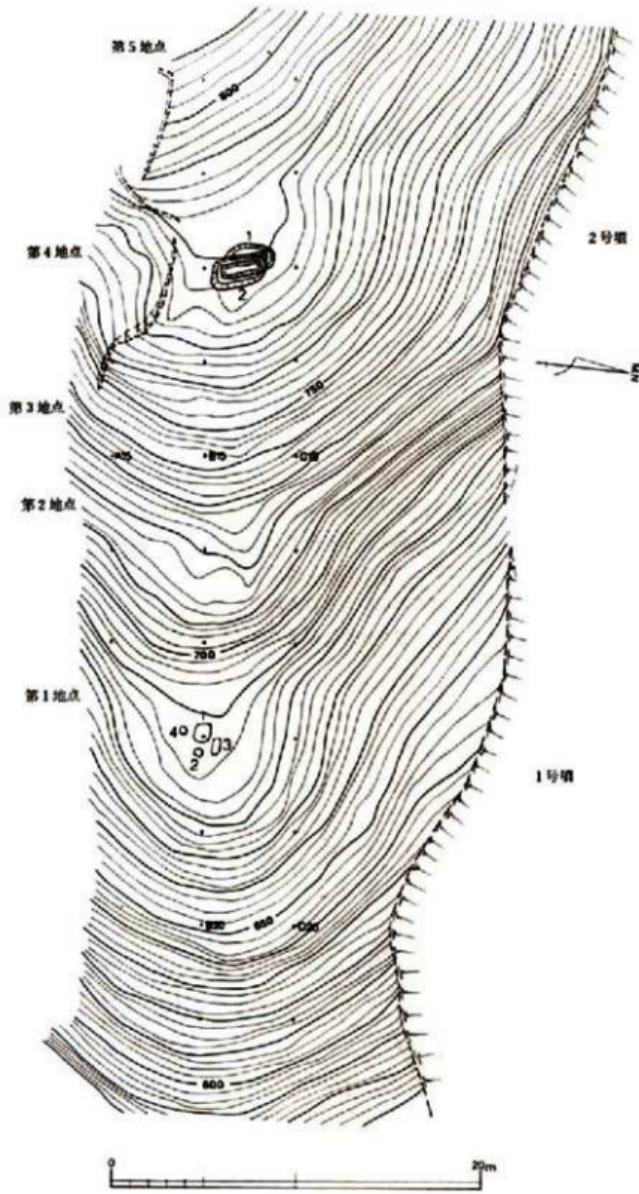
第1章 1号墳

南尾根支群の東端の標高の最も低い所に位置しており、当墳から下へは急斜面となる尾根上に立地する古墳である。上方に2号墳や古墳と推定される地点ややな谷古墳が存在している。

南尾根支群は豊岡市周辺の古墳と同じく明確な墳丘を規定することは困難である。尾根上を切斷して盛土を行なったもので標高の低い方は自然地形をそのまま利用しているのが通有である。階段状の斜面となっているため墳丘規模は数値では示す出来ない。調査によって明らかに



第13図 半坂峠古墳群古墳分布図



第 14 图 半板岭古村落群南尾梁支群地形测量图

出来るのは、平坦面を作り出していることと標高の高い方の切削の状態だけである。

1号墳も同じ状況で、高い方を僅かに掘り込んでいる。本来の斜面からは30cm以上手が加わっているものと思われる。機械による比高差は少數値となる。平坦面は尾根上に6m直交して4mの長方形に作り出している。この平坦面に4基の土器棺を埋葬していた。検出順に1～4号棺と名づけた。墓壙は個々に穿っているが、

1号棺と2号棺、2号棺と3号棺と主軸がほぼ通るので意図的に構築されたものと思われる。

1. 1号棺

1号墳平坦面の中央西寄りに位置する主体部で、1号墳主体部4基の中の中心的な位置を占めている。東に2号棺、南に4号棺が、北東に3号棺がある位置関係にある。1号棺は、1辺約150cmの隅円方形のプランで約15cm掘り下げ、さらに中央からやや北に寄ったところに棺に入るよう棺に合わせて深掘している。80×90cmの楕円形の擂鉢状の基壙を掘り込んだ二段墓壙となっている。この墓壙に口縁部を削去した焼成後に底部穿孔した大形の壺を傾けて据えている。口を北へ向けて12°傾けている。壺の底には顆粒状になった砂が3cm近く堆積していただけで密閉状態になっていた。蓋は3号棺に使われた土器と同種同形の壺を使用している。大形壺を破砕し、底部のある下半をまず内蓋とし、残りの破片をさらに重ねて外蓋としている。重なっているところでは4重になっている箇所もあった。外蓋の上に円形に礫を巡らせていている。石組の円周はほぼ基壙の肩に相当する。1ヶ所だけ石が3段積まれていた部分があった。この部分だけ広がっていたことから土器棺を据え置くためのスペースであったろうと思われる。

石の高さは下段の墓壙の面と同じである。埋土は上段の墓壙に存在したことになり、1号棺のような墓法の場合、二段基壙が適していたことが窺われる。深さ55cmの墓壙に器高50cmを越える壺を斜置で蓋をした場合、土器の埋置法も考慮すると最も掘削量の少ない方法と言えよう。

仕事量を少なくした合理的な墓法を探っているが、蓋を幾重にもし石列を伴った埋葬は非常に丁寧な作業であり厚葬の部類に入るであろう。

2. 2号棺

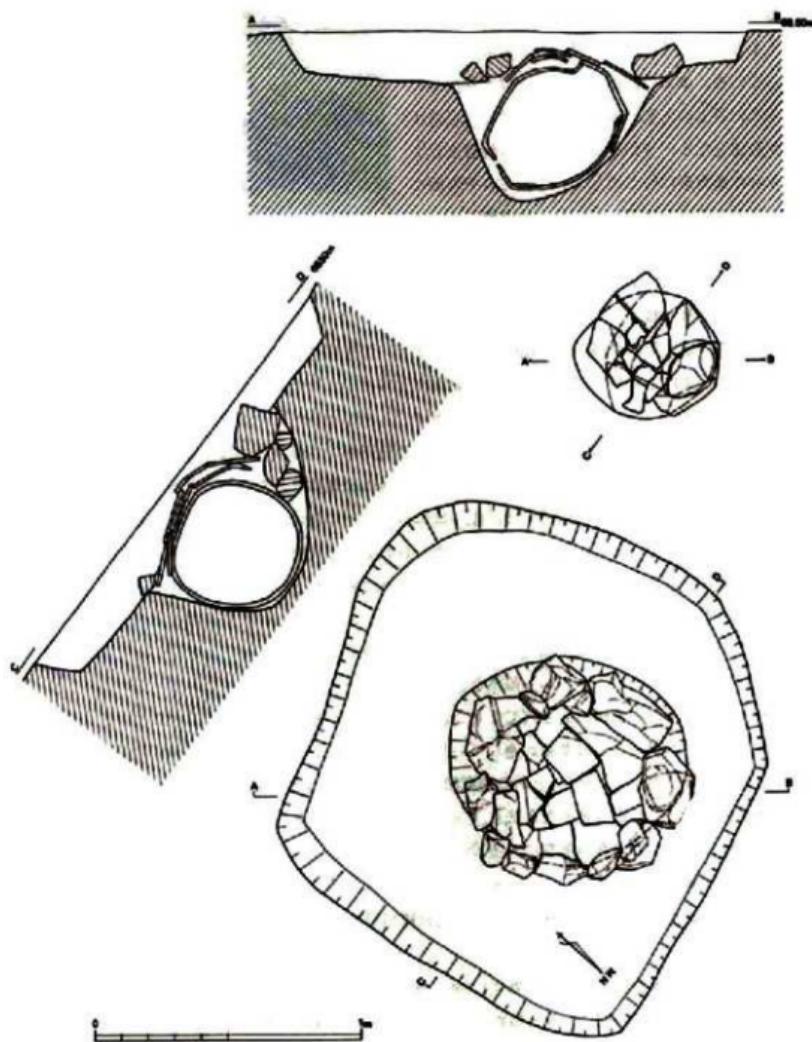
1号棺の東側に位置する。地山を掘り込んだ楕円形の墓壙内に壺型土器を棺として埋納している。

墓壙は二段墓壙を成しており、長径1.0m、短径0.675m、深さ0.15mの浅いスプーン状の墓壙を掘り、更に墓壙の南よりを土器棺のサイズにあわせて径0.50m、深さ0.35mの円形の墓壙を掘り込んでいる。墓壙埋土は、1・3号棺と同様暗黄褐色土である。

埋納された土器棺は2個体の破片をもって棺としている。このうち、遺体を納める棺身の壺



第15図 南尾根支群1号墳1号棺取出状況



第 16 図 南京板文葬 1 号墳 1 号棺壳測図

は1個体に復原出来るが、蓋にあたる蓋については口縁部から肩部を打ち欠いたものを使用している。この蓋は4号棺本体の蓋と胴部径・色調等が類似しており、同タイプの二重口縁蓋であろう。

土器棺の埋納状態は墓壙内に棺身となる蓋を直立よりもやや北側へ傾けて埋納し、上部を別個体の蓋の破片で覆っているが、この際1号棺が口縁部を打ち欠いた蓋を直接別個体の破片で覆っているのに対し、2号棺においては、打ち欠いた口縁部を逆にして傘状に棺身上部にかぶせており、棺身にあたる蓋の体部を一部打ち欠いて出来た破片を更に口縁部の上にかぶせることを行なっている。最終的な蓋—三重目となる一は、更にその上に、別個体の蓋の体部を縦に半裁し蓋としている。出土破片の磨滅状態から見て、この場合、半裁した断面を蓋の縁にあたる様な状態で蓋をしていると考えられる。

2号棺については、土器棺では多數例のみうけられる底部穿孔は行なわれていない。体部を打ち欠き蓋の一部としている点については、棺身の口縁部径が約12.0cmであることから見て、遺体もしくは再葬骨の収納の便をはかる為、体部を打ち欠いたとも考えられる。（この場合、遺体であるならば、棺身の容積から見て幼児に限定出来るであろう。）幼児遺体と再葬骨においてどちらにその必要性が高いかを考えた場合、幼児遺体かとも考えられるが、もちろん推測の域を出ないものである。

5. 5号棺

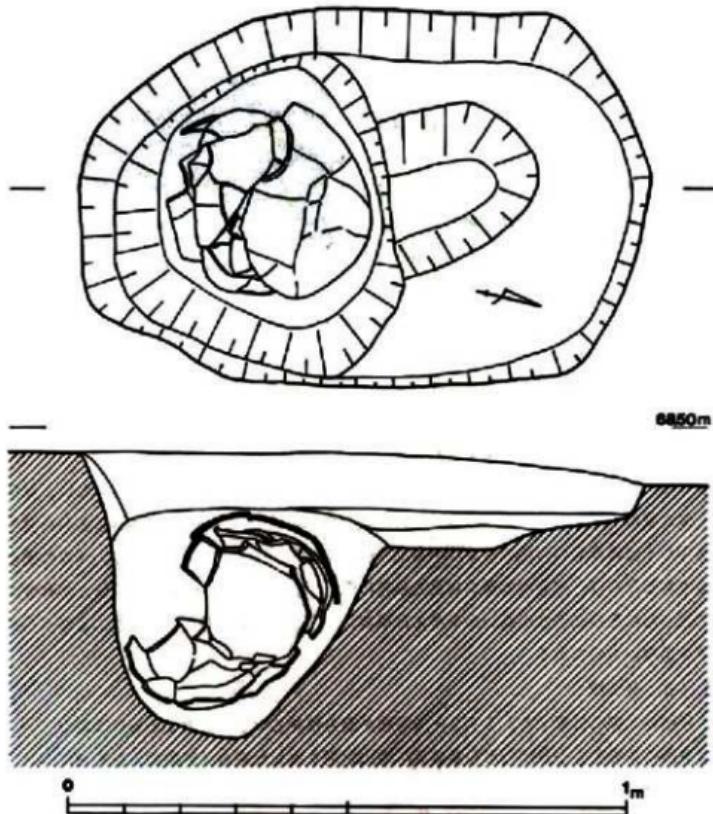
1号棺の北側に位置する。1・2・4号棺が蓋を棺身とする土器棺であるのに対して、3号棺は東西に長軸をもつ長楕円形の墓壙底に地山を削り出した基台（屍床部）をもっており、大型蓋を棺身とはせず、半裁して遺体に覆いかぶせることにのみ使用している。

埋葬方法を以下、埋納の順序に従って述べていくことにする。

- 1 東西に長軸をもつ長径約1.6m、短径1m、深さ0.6mの墓壙を地山に掘る。その際墓壙内に小判形の基台を削り出す。基台は高約10cm。蓋による蓋の形を考慮して、長径約0.7m、短径約0.55mの小判形に削り出している。
- 2 遺体を基台上に安置する。
- 3 口縁部径41cm、器高85cm、胴部最大径69cmの二重口縁蓋を半裁し、片方を遺体上に蓋としてかぶせる。
- 4 蓋とした蓋の口縁部をふさぐ為に、残りの破片のうち体部の破片をもちいて更に蓋をする。
- 5 残りの口縁部片を更に、蓋の上にかぶせる。



第17図 南尾根古墳群1号墳2号棺検出状況



第 18 図 南尾根支群 1 号墳 2 号墳実測図

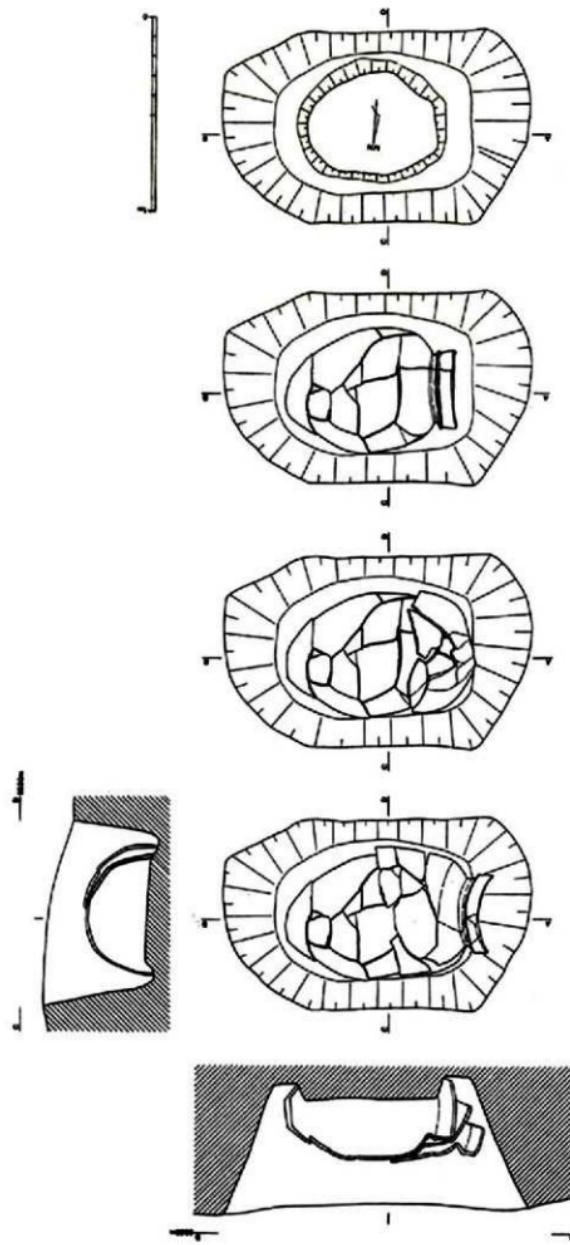
6 土によって埋め埋葬を終了する。

以上である。

本塚の場合は、1・2・4号塚と違い、埋葬方法から見て、再葬骨の埋納は考えられず、遺体の埋葬を推定出来る。その場合、基台の大きさより考えて、小人から屈肢葬による成人男子まで被葬者は想定できる。

墓壙埋土は、塚周辺では植物による影響をうけているが、2号墳と同様暗黄褐色土で、2号塚に比して礫を多く含んでいる。後に述べる4号塚を除いて1・2・3号塚の埋土が同一であることは、3塚の埋葬時期が接近しているからであろう。

图 17 ■ 鳞斑金龟子 1982 年羽化期



4. 4号棺

1号棺の南側に位置する。地山を掘り込んだ卵形の墓壙内に菱形土器を棺として埋納している。

墓壙は長径約0.60m、短径約0.50m、深さ約0.30m。

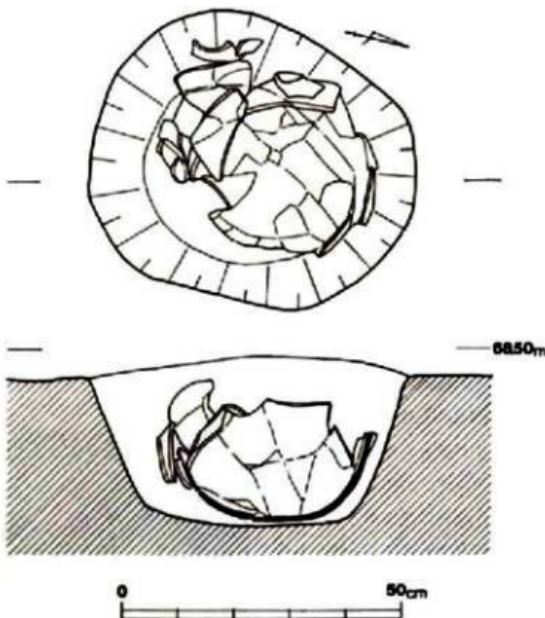
土器棺は上半部が棺内へ崩落している為に今一つ埋納方法を明確にし得ないが、二個体の菱形土器の破片をもって棺としており、2号棺と類似した埋葬方法をとっていたと考えられる。

出土した土器のうち、遺体（もしくは再葬骨）を納める棺身にあたる壺は、ほぼ1個体完形の二重口縁壺に復原出来る。器高40.5cm、口径25.6cm、胴部最大径32.0cmである。

棺蓋に使用したと考えられる破片もまた壺であり、肩部から体部にかけての破片を主に使用している。小破片が多く、復原に限度があり、詳しい形態・大きさは不明である。

土器棺の埋納状態は、墓壙内に棺身となる壺を西へかたむけて埋納し、上部を別個体の壺の破片で覆っている。この場合、2号棺同様口縁部を打ちかき蓋として使用している。

口縁部は棺身と墓壙壁の間にずり落ちた状態で検出されている。それをもとの状態に復原して考えた場合、2号棺同様に、棺身の口縁部をとばした頸部に逆にしてかぶせ、更にその上か



第20図 南尾根支群1号墳4号棺実測図

ら別個体による蓋をしていると考えられる。

口縁部は復原した場合、完存しておらず、4分の1程度が欠失している。これは埋納当初より口縁部がすべてそろって使用されていた訳ではないことを示しており、埋納時より数個の破片として使用されていたことを示している。2号棺が棺身の頭部に傘状にかぶせられたと推測されるのに対して、4号棺の場合には比較的乱雑にかぶせられていたのであろう。

墓壙埋土は、1・2・3号棺が、暗黄褐色土を埋土としているのに対し、暗茶褐色土が埋土として入っており、1・2・3号棺より遅れて、一おそらく、墳丘上にある程度流土・腐植土の堆積が加った後に一埋葬を行ったものと考えられる。

なお、4号棺においても底部穿孔は行なわれていない。

5. 出土遺物

4基の土器棺は全て調査品を有していなかった。棺に使った土器だけである。ただ、同化出来ない、胸部の破片を使った4号棺の蓋が他に1点ある。3号棺だけが1個体で、他は身と蓋の2個体から成っていたことになる。

6点の土器は全て器種は壺である。1号棺の土器（第23図1・2）が口縁を欠失したり下半である以外は全て完形品である。1・3号棺の土器が大形で2・4号棺が中形の壺である。6点とも二重口縁になるものと思われる。

第23図3は3号棺のもので、1個体を故意に2つに割って使っており、底部近くにその痕跡が看取される。（第27図）器高85cm、口径41cm、最大腹径69cmを測る大形の壺で、最大腹径は胸部の中央にある。ほぼ直立する二重口縁の口縁部を持ち、口唇部は角張っている。粘土紐の継ぎ目が明瞭で、特に最大腹径部は粘土にヘラで刺突文を施し、凹凸を付け粘土の固着を図っている。さらに内面に粘土を補填して強固にしている。ユビによる成形を行なったのち内外面とも4~5本の粗いハケで整形している。底部内面はナデで調整し、口縁部もヨコナデを施している。内外面ともユビで調整を加え仕上げている。底部は接線のゆるい径13.5cmの平底を持つ。肩部に黒斑が対称の位置に2ヶ所見られる。焼成は良好で色調は茶褐色、胎土に小石粒を含む。胸部中央より上位に最大腹径があり安定感のあるプロポーションの良い土器である。

1号棺身（第23図1）は肩の張った器形である。最大腹径49cmで胸部の上位の方にあり径26cmの頭部へと続く。内外面とも粗いハケで整形されており、頭部はヨコナデが施されている。頭部は直立しており、肩部に黒斑が1ヶ所見られる。底部は焼成後穿孔されている。内側から穿たれたもので、径3cm前後の円孔になっている。外面は磨滅しており、色調が3号棺と異なるように見えるが、近い色調をしていたようだ



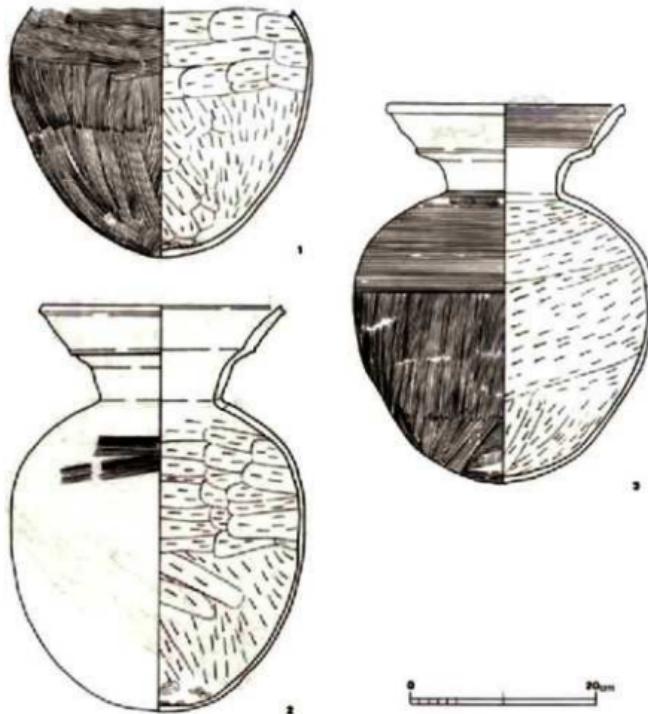
第21図 北浦古墳群から見た半坂峠遠景

ある。内面はやや黄色味をおび、小石粒を少量含む。残存高52cm。

1号棺蓋（第23図2）は大形壺の底部で底径16cm、残存高46cmを測る。3号棺に似たプロボーションの壺になると思われるが、少し下膨れ氣味である。多少大きくなるかもしれない。内外面ともハケで整形し、ナデで消している。色調・胎土・焼成とも3号棺と同じである。

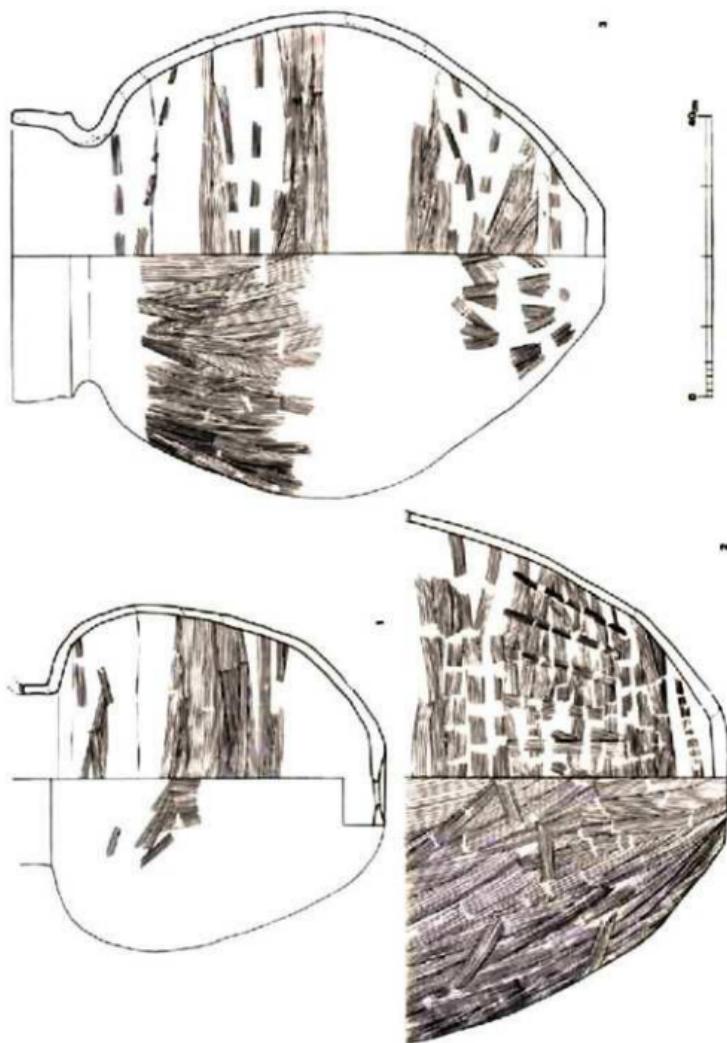
2号棺身（第22図2）は丸底の卵形をした中形壺で内面はヘラケズリのままである。器高43.3cm、口径26.4cm、最大腹径31.8cmで中位より上に最大径がある。外面は磨滅が著しいがハケ整形が看取され、肩部はハケ整形したのもカキメ状の強いヨコナデが見られる。底部内面は指圧痕が見られる。口唇部下端は突帯状に粘土帶を付加している。

2号棺蓋（第22図1）は肩部から上を割って肩部を蓋としている。球形に近い肩部で4号棺身に近い土器である。外面4～5本1cmのハケ、内面はヘラケズリ。残存高26.5cm、最大腹径32.4cmを測る。胎土は同じだが、色調は茶色っぽく全体に茶褐色である。



第22図 南尾根支群1号棺2・4号棺土器実測図

圖 23 圖 南尾根支群 1 号標 1 - 3 號地點剖面圖



4号棺身（第22図3）は3号棺身と同種の土器だが、プロポーションが球形に近い。内面はユビによる成形をしたのもヘラケズリを全面に施し、局部的にユビで仕上げている。外面は6本1cmのハケ整形のうち胴部上半に強いヨコナデを施している。口縁部もヨコナデをしているが、内面の上部だけ外面と同じ強いヨコナデが見られる。尖った口唇部に粘土帯を貼り付けて口唇面を作っている。口径25.6cm、最大腹径32.0cm、器高40.5cmを測る。色調は赤褐色、貼土は長石・石英の小石粒含む。

6. 小 緒

1号墳は、南尾根支群の最も下方（標高の低い）部分に位置する。 4×6 mの平坦面を作り出し、平坦面上に4基の土器棺を埋葬施設に持つ特異な葬法の古墳である。全て土器棺という古墳は類例を見ないと思われる。個々の主体部も各々特徴を持っている。全ての主体部が副葬品を持たない点も共通している。古墳より下方は急斜面となり、1号墳は地形変換線の上に位置しており自然の流失を強く受けている。そのため墳丘の流失がことさら大きく盛土はほとんど残存していないかった。しかし、盛土は確認しており、土層の觀察から平面はもちろんのこと垂直的な差も主体部間に見られなかった。4基の土器棺とも墳丘から掘り下げておらず、地山を切り込んで蓋壙を築いている。この点も4基は共通する。ただ、墓壙埋土は4号棺だけ異なる。さらに棺となっていた土器そのものから考えてみても大きな視点から見ると時期差は見出せない。4基は、大きな時の差を持たずに埋葬された同時期の主体部を見て大過ないものと考えている。後述するが、時期は土器から4世紀末から5世紀初頭の時期を考えている。墳形は、平坦面の形成と尾根の切断そして僅かな墳丘しか調査では知見を得ることが出来ず、明確には出来ない。

主体部の位置関係は中央に1号棺。その東70cmに2号棺が、2号棺の東上端と3号棺の南上端がほぼ直線になり85cm離れている。3号棺の西上端は、1号棺の東上端のラインと平行関係にある。4号棺は径が小さいこともあり整然とはしないが、1号棺の南1mの位置に所在する。この位置関係を見た場合、規格性を持って計画的に墓壙を穿ったのではないかと考えられる。

第2章 2号墳

1. 立地と外形

2号墳は、今回発掘調査を行った南尾根支群中第5地点に次ぐ高所に位置している。第5地点が東と北へ尾根が分岐する点に位置するのに対して、2号墳は分岐した南尾根中最高所を占めている。

墳形は円墳と推定される。墳丘の南側では崩れているが、北東斜面では地山を円形に成形している。西側については第5地点との間に浅い溝を調査時に検査しており、墳丘築造時に地山を削り出した際に墳丘の西側にあたる部分において若干地山を掘り凹め、墳丘裾としたものと考えられる。

墳丘規模は、径約10mで、墳丘高は尾根上にある為計測出来ないが、墳頂部と墳丘西側の墳丘裾部の比高差は約0.3m、墳丘東側の裾部との比高差は約1.3mである。

現状では、表土より墳丘（地山）までの層位は、第1層表土・第2層黄褐色土・第3層黄赤色土（墳丘盛土）・第4層地山—赤色土の順であり、墳丘盛土の残存状況は、極めて悪く、平均10cm程度である。しかし、後述する主体部、特に第1主体部の地山掘り込みの深さが約15cmであること、及び墓壙内の木棺痕跡の残存状態が、南半分を主として棺底部を残すのみであることから考えて見ると、墓壙は地山面より相当高位のレベルから掘り込まれたことが推測される。地山上に比較的高く一本棺の残存状態から考えて50cm以上一蓋土が行われていたのではないかだろうか。

2. 墓葬施設

南北に軸を持つ、尾根に直交する2基の切り合う木棺が主体部であると考えられる。⁽¹⁰⁾

第1主体部

墳丘中央やや東側に存在する。主体部のうち東半分が第2主体部の墓壙によって消失している。

第1主体部の墓壙は長軸（南北）約2.1m、短軸（東西）約1.1～1.2mと考えられる長楕円形をなしている。埋納される木棺の規模は、棺の北半分の墳丘の土が棺底部まで流れて消失しており、明確ではないが、推定長1.5mで、幅は0.4m以上である。

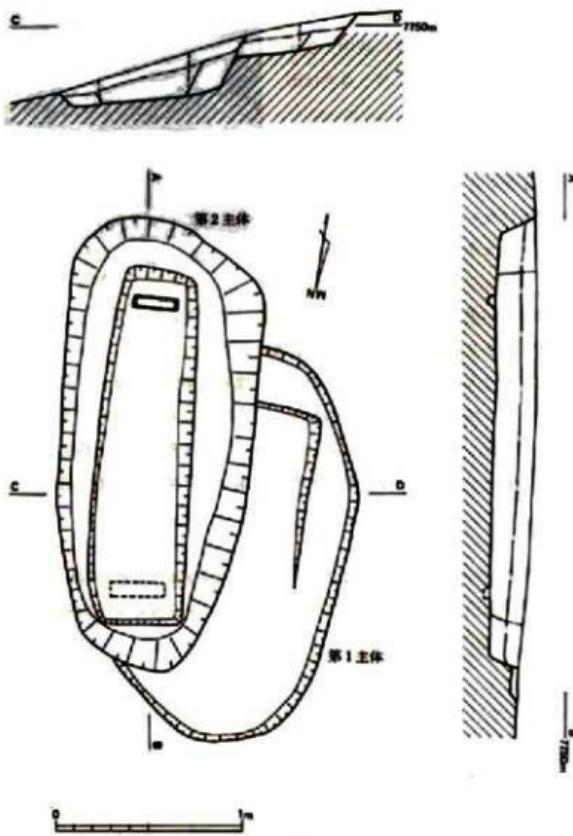
なお、棺内に木口穴等の痕跡、遺物の出土は無かった。

第2主体部

第1主体部の東半部を覆してつくられている。第1主体部より新しいと考えられる。

第1主体部が、墳丘のほぼ平坦面に位置するのに対し、第2主体部は墳丘の平坦面より傾斜面へ移行する変換点に位置する。

墓壙は長軸（南北）約2.4m、短軸（東西）約1.0m、深さ約0.25mの隅円方形墓壙を穿ち、



第24図 南尾根古墳群2号墳実測図

全長約1.9m、北木口部で上面で幅0.50m、下面で0.43m、南木口部で上面で幅0.41m、下面で0.32mである。

木棺の南端には長辺約22cm、短辺6.0cm、深さ5cmの長方形の落ち込みがあり、木口板の痕跡と考えられる。北側の木口板の痕跡は木の根の擾乱によって検出されなかった。

木口板は、長側板よりも内側に位置していたと考えられ、長側板は、木口板を外側より挿んで約10cm突出していたものと考えられる。

木口部の幅が南側に対して北側が広いことから北を頭部として埋葬したと考えられる。

遺物 両主体部の墓壙埋土に土師器の細片をいくつか含む以外には、墳丘西側の溝内より出土した土師器片1片以外、古墳に伴う遺物は出土しなかった。

この土師器片は、壺等の体部と思われる淡赤灰色の3cm角の小破片で、磨滅が激しく時期を決定できるものではない。また、第5地点よりの流れ込みの可能性もある。

<小結>

2号墳は、調査の結果、地山を成形して築かれた径10mの円墳と考えられる。主体部は南北に長軸をもつ切り合う2基の木棺を直葬している。

第1主体部は、その大半を封土の流失、第2主体部の墓壙掘削によって失っていたが、第2主体部は比較的良好に残っており、棺内南側においては木口穴痕を検出した。

築造時期については、遺物をほとんど出土しなかった為不明である。但し比較的厚く墳丘盛土を行っていた可能性があることは、時期を考える場合、考慮にいれるべきことであろう。

(註)

ここに報告した2基の主体部については、調査者の間においてそれを主体部と認識するか否かについて意見が分かれている。特に後述している第2主体部の木口穴の痕跡については、その大きさ、形状から疑問視する意見が出ていることを記しておく。



第25図 半坂峠古墳群2号墳
木口穴検出状況

第3章 南・北尾根支群確認調査結果

南尾根・北尾根支群については前述したように発掘調査に入るに際して、全て古墳であると断言出来ず、また古墳の数も曖昧だったので確認調査を実施した。トレンチ調査を主に採用したが、決定資料に欠けたため南尾根と北尾根の一部については全面調査を実施した。南尾根1号墳・2号墳については、埋葬立体を検出し性格を明らかに出来た。それ以外の地点について本項では述べることにする。

南尾根支群では、5地点を対象とした。第1地点、第4地点は明らかに古墳と断定出来、各々1・2号墳とした。第2地点は、1号墳同様平坦面を検索出来た。 $5 \times 6 m$ と1号墳に比べてやや広い平坦面が確認されたが、主体部は存在しなかった。尾根上を切断しており手が加えられているのは明らかだが、埋葬施設は設けられていなかった。古墳とは明言出来ないが、古墳時代の遺構であることに相違ない。墓とするため、予め造成を行なったのであろうか。本例のような遺構の存在の例は他にもあり、どのような名称を与えたたら良いのであろうか。墓として機能しなかった以上古墳とは呼べないが、その前段階まで準備されていたことは注目すべき事実であろう。南尾根などの地形を勘案に入れると、1号墳を築き、2号墳を造り、その間に平坦面だけを設けるのは考え難いので、上から下からかの順序を考えたい。もしくは一度に造成を行ない、個々に埋葬したのだろうか。注目に値する事実である。今後、埋葬施設のない例も名称とともに再考を要するであろう。

第3地点は、僅かな起伏があったので調査の手を加えたが、上方（第4地点）からの堆積であることことが判明し、古墳とは考えられない。後世の堆積土の方が高まっており、自然地形であることが明白であった。

第5地点は、第4地点との境界部分に弧状に溝が通り古墳の可能性が高いものと思われる。第4地点から上方に向けて、さらに斜度が緩くなるため、下方に掘をする溝を有したものかもしれない。溝内から土器の小片も出土している。調査地内では平坦面は認められず、南側の県道の予定地内に主体部があることを推測している。

北尾根支群は便宜的に地点名を11ヶ所与えて調査を実施した。尾根上も一応トレンチを設定したが、遺構をはじめ遺物も確認されなかった。11ヶ所のうち、明らかに平坦面を有する地点は2ヶ所だけだった。ともに土器器片を出土したが、調査地外へ平坦面の一部が続いており、平坦面の全てを調査出来なかった。調査地内では主体部は検索出来なかった。しかし、平坦面を造っていることと土器が出土していることから古墳と考えて良いと思われる。土器は少數ながら、高杯形部や壺瓶部など器種や部位が判るものも含まれている。

第4章 まとめ

1. 土器棺主体の古墳について

南尾根1号墳は土器棺4基を埋葬主体とする特異な古墳であった。但馬において土器棺の検出例は非常に少ない。調査例は、豊岡市鍛田古墳群と朝来郡山東町柿坪中山古墳群の2古墳群3例と稀少である。しかし、3例とも他に立体部が存在する。姫坪中山3号墳・同1A号墳は共に堅穴式石室・木棺が主体部としてあり、土器棺は周溝や平坦面の端と中心主体とは思われない。納屋ホーキー古墳も中心主体は箱式石棺と考えられる。

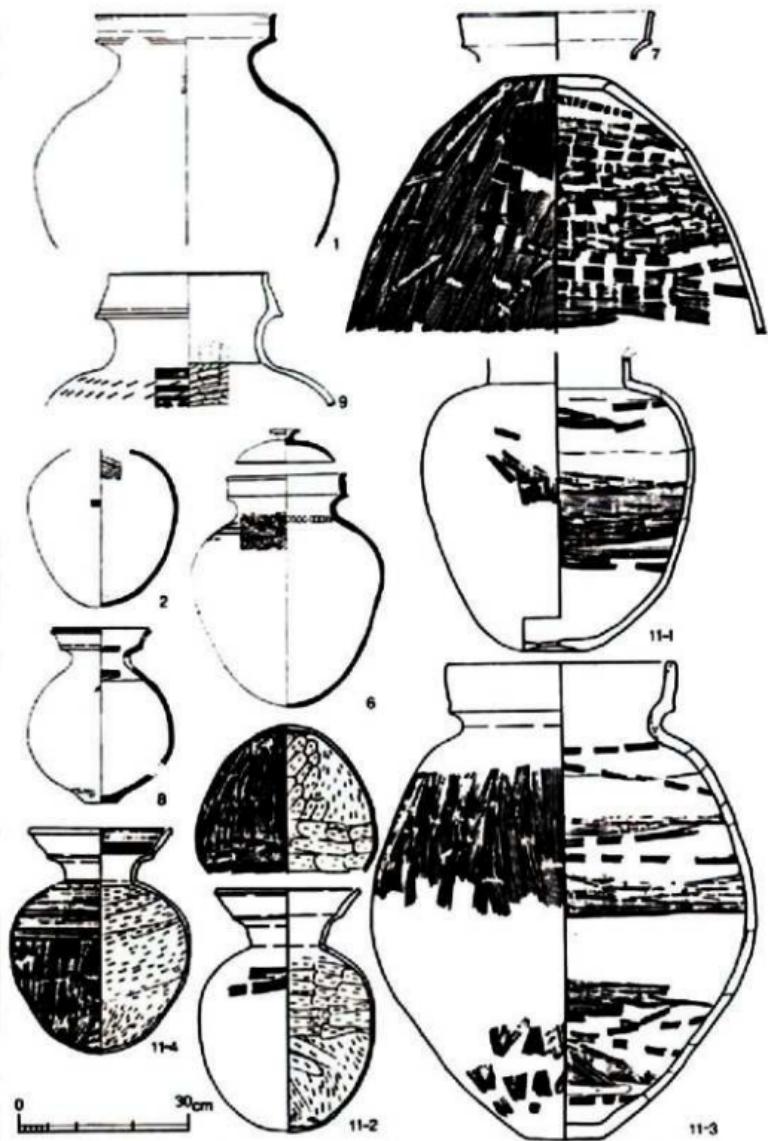
土器棺だけで構成された古墳は但馬では存在しない。その上、土器棺が4基もある例はないようである。その葬法は特異なものと思われる。県下で古墳前期の土器棺として多数1古墳に集成されている例は西播の養久山32号墳に壺棺が5基あるのが最多である。しかし、養久山32号墳も土壙墓など他種の埋葬施設が併設している。

最近の調査でも中心主体に一見付属したような状態で土器棺が検出されることが多い。例えば、多紀郡櫻山町の前山古墳は堅穴式石室と共存しており、龍野市と揖保郡揖保川町の境界に位置する養久山古墳群中の42号墳や養久乙城山1号墳(40号墳)は各々木棺直葬と土器棺を確認している。このように他の埋葬施設と土器棺が検出されることにはよく知られ検出例も多くある。但馬での土器棺検出例でも第1表のように土器棺だけの主体部は半坂峠南尾根1号墳だけである。土器棺のみを主体部としているのは何を意味するのであろうか、現在の時点では、土器棺という葬法は前代の弥生期から承継された葬法のイメージを払拭することは出来ない。古墳よりも弥生時代後期から築造され続ける集団墓の性格を感じさせる。

2. 3号棺の葬法について

4基の土器棺の葬法は個々異なっている。2・4号棺が通有の土器棺で、2号棺は二段墓壙になっていた。1号棺は非常に丁重に葬っているが、基本的には通有の土器棺の在り方と同じである。石を円に巡らしている点など特異な点があるが、厚葬の土器棺と言えるだろう。

それらに対して、3号棺は本質的に異なっている。土器棺と呼称はしているものの棺にはなっていない。大形壺を半截し、蓋として使っている。墓壙底に死体を置く屍床部を小判形に作り出し埋葬したのち、大きな底部の付いた方の半截を覆って内蓋としている。残りの半截は上下に削り、胴部下半で内蓋の口縁部を塞いでいる。残った口縁部を外蓋として胴部の上に重ねた方法を採用している。棺身は存在せず、土器の蓋だけが存在する主体部である。土器の曲線を意識して完全に覆うようにしている点が多少異なるが、土器蓋土壙墓と呼ぶのが正しいのかかもしれない。しかし、土器の性格を最大限利用した埋葬であるので、敢えて土器棺の範疇に入れておくことにしたい。



第26図 伊勢における土器検 (数字は第1表の番号に準ずる)

土器は器高85cmの大型の壺の完形品を意図的に半截している。その際、土器に溝状に傷をつけて割り易くしている。(第27図)

土器蓋とすることに伴った事例によるものであろうが、墓壙底の小判形の底床部も特徴的である。周囲に溝を穿ち、土器を合わせる作業は細かく行なっている。口縁の開いた空間を塞ぎ密閉しようとする意識は、単に蓋としての機能だけなく、それ以上の意識が働いていたようと思われる。石蓋土壙のように土壙の上面を蓋したものとは性格が異なるのではないだろうか。

3号棺のように墓壙底の溝を伴った遺構の類例は管見では見ないが、土器を被せた状態や蓋にした例は少數存在する。時期的に近いものは皆無に等しいが、同じ但馬の中でも近い例がある。^(註3)朝来郡山東町の神坪中山古墳群中に存在する。2号壺棺として報告されているもので、3号壺頂の東端に築かれた土器棺で中心主体は堅穴式石室である。3号壙に伴う遺構と考えられている土器棺で、二重口縁の壺を使っている。直立する口縁部で頸部が短い点などプロポーションは、半坂峠古墳群の土器とは異なっている。胴部上半しか残っておらず、胴部は半截して蓋に使っているが口縁部が完存している点は3号棺と異なっている。遺骸を覆っている点では、葬法に関する性格が同じである。

遺骸を覆うという点で神坪中山例は近似する例であるが、墓壙底の形状では懸離れている。



第27図 3号棺土器破片

第1表 但馬地帯土器棺地名表

古 墓 名	所 在 地	他 の 主 体 部
1 神坪中山3号壙	朝来郡山東町神坪	木棺・堅穴式石室(註3)
2 神坪中山1A3号壙	同上	木棺・堅穴式石室(註3)
3 桐山古墳群 D支群1号壙	朝来郡和田山町比治	(註4)
4 同上 F支群1号壙	同上	箱式石棺・土壙底(註4)
5 納屋ホーキ古墳	豊岡市納屋	箱式石棺(註5)
6 謙田東3号壙	豊岡市謙田	木棺(註6)
7 小野小学校裏山?	出石郡出石町小野	
8 西気小学校裏山?	城崎郡日高町太田	(註7)
9 ミヅ谷古墳	朝来郡朝来町桑市	(註8)
10 高末壙墓	美方郡浜坂町高末	木棺(註9)
11 半坂峠南尾根支群1号壙	豊岡市三宅	

縄坪中山例も口縁部側だけ深掘し、水平になるよう努めているが、その作業規模から考えると差があるようである。

3. 2号墳主体部について

2号墳の主体部は2基の木棺直葬である。切り合い関係にあり、共に土器片を少數含むだけで副葬品を有さない主体部である。そのため時期の隔たりはもちろんのこと、個々の時期決定さえ困難を極める。ただ小片ながら土器から1号墳と変わらない時期を与えるのが妥当かと思う。土器片とともに立地条件も同様で階段状に構築していることはその傍証となろう。

新しい時期の第2主体は木口穴と想定される平面長方形の小穴を検出した。豊岡市域の調査でよく見られるもので、近接した森尾北浦古墳群や福田の七ツ塚古墳群などに見られる。木口だけでなく長幅板を立てるための掘り方も検出されている。

2号墳の場合、頭位と思われる北側木口部に木の根があつて多くを語れない。しかし、足元に相当すると考えられる南側では顯著に木口穴を検出できた。やや黒っぽい暗茶褐色の有機質土が埋土となっていた。棺底で平面は 22×6 cmで深さは9cmと比較的小規模ではあったが、平面でも明瞭に検査出来た。(第25図)木口穴の存在は、木棺を現地で組み立てたことを示すものであり、当時の築造課程を知る上で重要な事実である。

本例は、片方の木口穴が検出しておらず対応する部分に木の根があるため、木口穴が両端にあったと断言は出来ない。ただ、豊岡市正法寺に所在した七ツ塚古墳群10号地点第1主体で片方だけ木口穴を検出した例があり、組み合わせ木棺に種々の変化があることが予想される。それゆえ、両側だけの木口穴の存在も一蹴することは出来ないと思われる。

4. 南尾根支群の意義づけ

南尾根支群と北尾根支群は相前後して築かれた同時期の古墳群と思われる。古墳の立地・外形などからは時期決定は困難である。階段状に連繋と築造された古墳群は、群中でも時期幅が認められる。近隣の旧神美郡内の北浦古墳群でも4世紀後半から5世紀後半と広がりがある。同タイプの古墳でも外形などでは時期決定が不可能な状況である。古墳間の先後関係は調査で確認されるが、急斜面に営まれているためにそれさえも困難を生じることが多い。

それゆえに時期決定は遺物に頼らざるを得ない。南尾根・北尾根支群とも土師器の破片が出土しているだけで、形のあるものは南尾根1号墳の土器館だけである。埋葬に使った容器だけに正確な時期決定の尺度にはなり得ないが、ある程度の枠を想定することは十分可能である。

1号棺・3号棺の3個体の土器は大形壺の中でも超大形と言えるもので特殊として扱わざるを得ない。1号棺身の平底でもなく丸底でもない特異なプロボーションは大形壺に見られるものである。3号棺身の平底もこの大きさでは平底にならざるを得ない土器で、平底であるからと言って古くする理由は見られない。特殊な大形品(棺専用壺)と思われる。同種同形のもの

は、鳥取県福都村直済遺跡出土壺がある。^(註2) 3号棺に比較して二回り位小形だが、黒斑が肩部に對称形に付いている点も酷似している。色調・胎土も似かよっている。これほど似ている土器ではないが、巨視的に見ると近似する土器は岡山北部から山陰地方に分布している。大形化すると二重口縁でも直立するのは技術的に必然性があるのであろうか。

時期決定をしようとするためには日常雜器が最も良いのは当然であるが、小形のものの方がより優れている。その点では、2・4号棺も最良の資料ではなく、もう一段階下の壺ならより比較しやすいという欠点は否めないが、平坂岬古墳群中では最も良い資料である。

2号棺と4号棺の土器を比較した場合、遺構の在り方から見ると、2号棺が中心に近く埋土も厚いことなど二者併一すれば古いものである。しかし、土器そのものを比較したら2号棺の方が長胴になり、極端に強いヨコナデも施されず古相を示すとは思われず、4号棺の方が古いものと思われる。遺構の配置状況が整然としていることや埋土が同一であることや同一層に被覆されていることから4基の立体部は同時期と考えている。ほぼ時期を同じくして埋葬された土器棺であろう。

そのように結論づけると、埋葬に使用された土器が尺度になりにくいことを強調することになるが、2号・4号棺の土器から先学の研究による時期を考えてみると、山陰地方の編年でいう広義の小谷式であると言えよう。最近刊行された長瀬高浜遺跡の分類に従えば、^(註3) 長瀬高浜Ⅰ期かⅡ期に相当する。新しい要素が存在することを考慮するとⅢ期に考えるのが妥当であろうか。2号棺はⅡ期に属するものである。島根県大原郡加茂町所在の神原神社古墳出土の土器と共通する。堅穴式石室壙の埋納壙出土のもので、前島・松本両氏の新田に細分された小谷式に属する。^(註4) 藤田氏の山陰Ⅱ期・青木遺跡の青木Ⅳ期・山陰考古学研究所の土師Ⅲ期にあたるものと思われる。それら先学の編年觀からすると、山陰の研究者は小谷式に包括され、藤田氏は健尾Ⅲ式になるという差異が生じる。山陰地方の壺の変化を見た場合、神原神社古墳や南尾根1号墳2号棺の長胴化した器形が、球形の胴や肩の張った壺より古くなるのは駄然とせず、低脚杯にしても裾部が角張った土器が、裾をやや上につまみ上げた土器より新しいとは思われない。それゆえ、狭義の小谷式の範囲に入れて考えるのが妥当かと思われる。絶対年代を示すには躊躇するが、現時点では5世紀初頭前後を考えたい。

2号墳は決定資料に欠けるが、1号墳と前後する頃の築造と思われる。南尾根支群は4世紀末～5世紀初頭半坂岬尾根上に構築された古墳である。同時期に北浦古墳群や立石古墳群などにも尾根上に階段状の古墳群が形成されている。尾根支群から北浦古墳群は頂上付近だけ眺めることが可能である。可視範囲は広く、西は六方田園をはじめ円山川が流れる豊岡盆地を東は三宅、森尾の地域を眺望範囲とする。穴見川によって形成された平野を挟み、眺望関係にある北浦古墳群の被葬者と全く無関係とは思えない。森尾市尾古墳をはじめ結構された共同体が存在したと想定したい。

天日槍は播磨から但馬へ移ったとされ、その日槍を祀る神社が但馬國一の宮の出石神社であ

る。また記紀に記され忠臣伝承に代表される田道間守は天日槍の子孫で半坂峠の東側に領座する中嶋神社の祭神である。記紀伝承をはじめとして、三宅連へと続く記載は出石郡の地域が、中央と深く繋がっていたことを想像させる。

南尾根支群は、特殊な葬法や丁寧な土器棺があり特殊な古墳ではあるが、土器棺という埋葬施設は斬新な埋葬方法とは思われない。どちらかと言えば、弥生時代の風習を継承した前代的な葬法を想起させる。周辺で多く築造された集団墓の要素を強く内在した古墳であると言えよう。それに対して、カチャ古墳は全く性質の異なるものである。時期的には同世代か1世代の差しか隔たりがない。カチャ古墳の精巧な石棺や埴丘は集団墓とは隔絶した権力を感じさせる古墳そのものである。カチャ古墳の立地は半坂峠を東に下ったところで、南尾根支群の眺望範囲を極端に狭めた範囲で地理的に考えても南尾根支群一カチャ古墳は一連のものと考えるのが妥当であろう。この流れの中で、古墳の変化は何を画期とするのだろうか。三宅の言葉をそのまま使うことは時のギャップを全ての点で与えるが、森尾市尾古墳で穴見川流域が中央権力との関係を持ち、引き続き同様の関係に置かれていた証左と考えるのは無謀であろうか。出石郡内の古墳に数多く鏡を埋葬していることは無関係ではなかろう。南尾根支群からカチャ古墳への変化を穴見谷においての共同体の紐帯を外部権力によってさらに緊密より強固なものとして、森尾市尾古墳の被葬者の関係を継承した根拠と考える。経済的結合や互助的な政治的結合から穴見谷全滅なくとも三宅以北の全城の政治的結合へと変化しただろう。ひいては、この関係が大字名の三宅となったのではないだろうか。南尾根支群は前代の最後の葬制を敷いた古墳としての意義があり、まだ出石郡と城崎郡の母体が生じ始める頃に營まれた古墳であると言えよう。

(註1) 須戸谷啓「鎌田古墳群・下陰古墳群発掘調査報告」 1976年 豊岡市立郷土資料館

(註2) 横本誠一・小川良太他「柿坪中山古墳群第1集」 1975年 山東町教育委員会

(註3) (註2) 同じ

(註4) 水野正好・輔老拓哉・吉田昇・田畠基氏教示

(註5) 直良信夫「山陰道発見の豪棺」『近畿古代文化叢考』

(註6) (註1) 同じ

(註7) 石野博信「但馬の古式土師器」『兵庫県埋蔵文化財調査集報第3集』 1976年 兵庫県教育委員会

(註8) 高島信之・潮崎誠「立脇トウスガ谷古墳群」 1979年 須磨町教育委員会

(註9) 中村典男氏教示

(註10) 大橋伸・中野卓郎他「古代祖先のあゆみ」 1980年 須磨町教育委員会

(註11) 昭和57年度兵庫県教育委員会調査

(註12) 深井明比古・市瀬重喜氏教示

(註13) 横本誠一・小川良太他「柿坪中山古墳群第1集」 1975年 山東町教育委員会

(註14) 須戸谷啓他「七ヶ塚古墳群」 1978年 豊岡市立郷土資料館・豊岡市教育委員会

- (註15) 須戸谷勘他「北浦古墳群」 1980年 豊岡市教育委員会
- (註16) 島根県立博物館展示資料
- (註17) 財團法人島根県教育文化財団「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 1981年
- (註18) 前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌62巻3号』 1976年
- (註19) 増田憲司「山陰「鏡尾式」の再検討とその併行關係」『考古学雑誌64巻4号』 1979年
- (註20) 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 1978年
- (註21) 山陰考古学研究所「山陰の前駆古墳文化の研究！」 1978年

VII カチヤ古墳の調査

第1章 古墳の位置

カチヤ古墳は豊岡市三宅字カチヤにある。三宅の集落の東方に穴見川が南流しており、この川にそって谷底平野が形成されている。その周囲は急峻な山地であり、その山麓に集落が営まれている。

古墳は三宅集落の南西方向にある標高 201.6m の三開山山頂から派生する尾根の突端にあり、三宅集落からは西方約 400m の位置にある。古墳の眼下には、通称半坂峠と呼ばれる峠があり、かつてこの峠が出石郡と城崎郡を分かつ郡界になっていた。

古墳から平野部を可視できる範囲はきわめて狭い。西方にある中谷集落や篠岡集落、その眼下に広がる平野部は峠にさえぎられ眺望することはできない。また、穴見川の流れる平野部を望むにしても、跳ねる高い尾根にさえぎられてその視界を狭められている。すなわち、式内社中島神社やその付近の三宅集落と穴見川を挟んでその対岸にある森尾集落の一部を望むことが



第28図 カチヤ古墳周辺の地図



第29図 カチヤ古墳周辺の地形図

できるにすぎない。なお、紀年銘を調査していたことで著名な森尾古墳は、この古墳から南東方向850mのところにあるが、カチヤ古墳からは尾根にさえぎられて見ることができない。また、この古墳と相前後して築造された南東方向1000mのところにある北浦古墳群も可視できない。

和名抄で記載されている郡・郷名を比定するならば、この古墳の所在は出石郡安美郷にあたりる。

(註1) 吉田東伍『大日本地名辞書』 1960年



第30図 カチヤ古墳南トレンチの状況

第2章 墳形と規模

調査前の現況は、墳丘の北東部が道路建設時に削り取られ崖面となっていたが、その他のところは雜木林として残っていた。

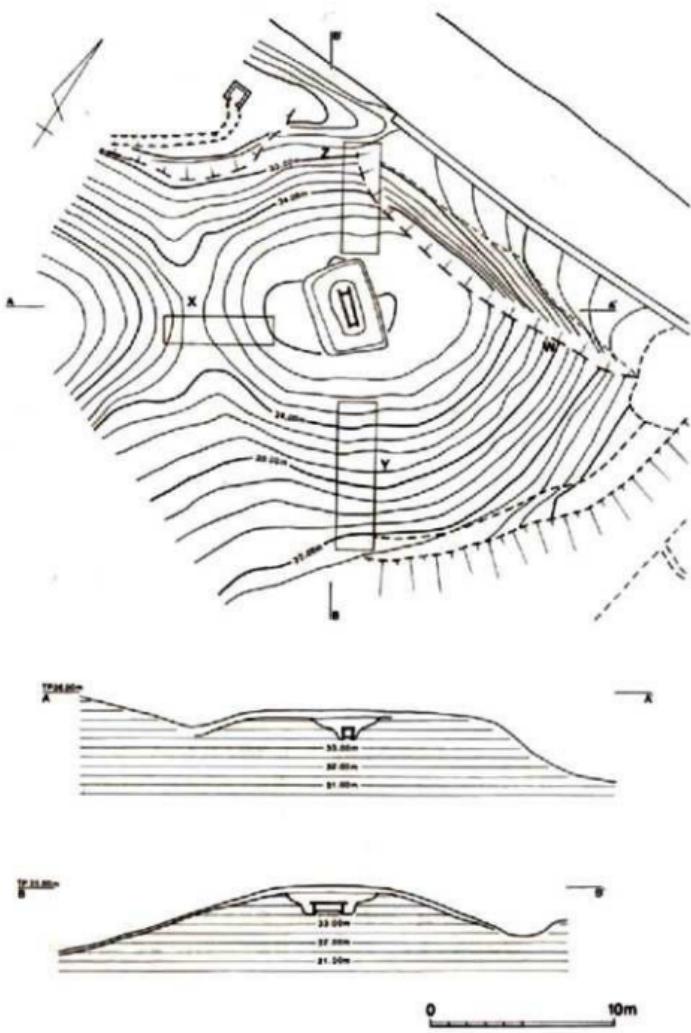
古墳は三間山山塊の支脈が北東方向に延びる幅の狭い尾根の突端にあり、自然の地形を利用して築かれた円墳で、墳丘の標高35.0mを測る。自然の尾根を修飾して作っていることにもよるが、他に葺石、埴輪の樹立という墳丘の基底を明確に画する造墓技術を採用していないことなどが原因して、墳丘の規模を正確に指摘することを困難にしている。なお、墳丘に3ヶ所のトレンチを設定して調査を行ったが、その土層を観察しても、墳丘の基底を作成するという目的意識をもった成形を行った痕跡を認めることはできなかった。このように、基底については、客観的な資料を今回の調査によって得ることができなく、外形図から推定せざるをえない。

外形図から比較的明瞭にその基底を捉えることができる的是墳丘の南西側である。それは、南西方向から北東方向に延びる尾根を切断することによって墳丘を画していると把握できるからである。その高さを示せば、標高34.25mのコンタ付近である。南東部では、標高33.0mのコンタ付近が基底部に近いと捉えたい。それは、尾根を切断された南西部からのコンタが示すところから類推したことである。同じような視点に基いて、北東側においても33.0mのコンタ前後がその基底を形成しているのであろう。北東側は前述のごとく、削り取られており、復原的に捉えることしかできない。その結果を示せば、長軸19m、短軸17m程度の規模で、橢円形を呈している。古墳の規模としては20mクラスの円墳と考えて大過ないであろう。

墳丘の基底のレベルをみれば、第31図で示したX地点が34.25m、Y地点が33.25m、Z地点が33.00mという数値を示し、その基底に高低差のあることが判る。このことは、この古墳が基底のレベルをそろえるということを意に介していないということであり、墳丘を区画するということに対しての努力をはらっていないということの表われであろう。

墳頂平坦面をみれば、墳丘規模に比べて広い平坦地を作っている。その広さは、短軸5.0m、長軸10.0mである。

この古墳の築成方法をみれば、トレンチの土層の観察や墳頂平坦面の存在から、地盤を整形することによってその墳丘を作成していることが判る。墳頂面は明らかに地盤を削り取ることによってその平坦面を作っており、埋葬が終了したのち平坦面上に40cm程の土を盛っている。斜面に入れたトレンチでは、現状面から地盤まで20~40cm程の暗赤褐色を呈する土層があるが、これは流出土なのか、整形のために化粧土程度に被覆したのかは識別することはできなかった。いずれにしても、墳丘形成に際しては、地山を削り整えることを主としていることに変りはない。



第31図 カチヤ古墳外形状測図

第3章 埋葬施設

入念に加工された組合式石棺を墓壙の中央に直接埋置された埋葬施設である。墳丘および組合式石棺の規模に対しては、不つりあいのきわめて大きな墓壙の中に石棺を直葬している。

1. 墓 壙

墓壙は墳頂平坦面のはば中央に地盤を掘りくぼめて作られている。その形は長方形であり、北西から南東の方向に長軸をおいている。墳頂平坦面の形状は、指円形を示しており、石棺の長軸と墳丘長軸とは直交しているという関係にある。円墳の場合は前方後円墳の主軸のごとく明確に意識されていたとは言えないであろうことも原因して、そこに法則性を求めるることは困難であると想われるが、この古墳では両長辺側に広い平坦面を必要としていると言えそうである。

地盤を掘削して墓壙を形作る過程は3段階に分けることができる。まず、長辺約4.78m、短辺約3.72mの長方形の掘削範囲を定め、下方に内傾するように掘る。その深さは約50cmである。そして、その底面中央のところを長辺2.88m、短辺1.27mの2段目の墓壙を掘り込む。その深さは40cmである。さらに、2段目の底面の周囲に幅24~30cm、深さ9~13cmばかりの小溝状を呈するものを掘る。溝状のところには石棺の各側石を嵌め込むためのものである。その結果、中央に「基台」ともいべき壇状の施設を作り出している。基台の大きさは必然的に石棺の規模に規定される。この基台の上に石棺を組み合わせたのちに礎石を敷いて棺床としている。

このように、墓壙は基本的に2段に掘られていると捉えられる。その間の平坦面の幅は長辺の方が短辺の方よりも広く作り出している。ちなみにその幅を見れば、東長辺91cm、北長辺は81cmである。

東側平坦面の中央にビットを1ヶ所検出した。すでに保存が決まっていたので、墓壙の調査もその構造と築造過程を知るために必要なところのみを調査する方法をとったので、この平坦面にビットが何ヶ所あったのかは判らない。ビットは不整形な長方形である。大きいところの数値は短辺40cm、長辺45cmであり、深さは21cmである。おそらく、石棺を墓壙に埋置するのに必要な道構と捉えるのが妥当と想われる。

各側壁の1段目の掘削傾斜をみれば、南壁は緩やかに曲線を描きながら掘られているが、その他の壁は南壁に比べて傾斜が急である。その角度を数値で示せば、東壁58度、西壁65度、北壁68度、南壁43度である。また、1段目よりも2段目の墓壙の傾斜はきつく、垂直に近く掘削しようとした意識が働いていたことが判る。

以上、述べてきたところの数値を示せば下記のとおりである。

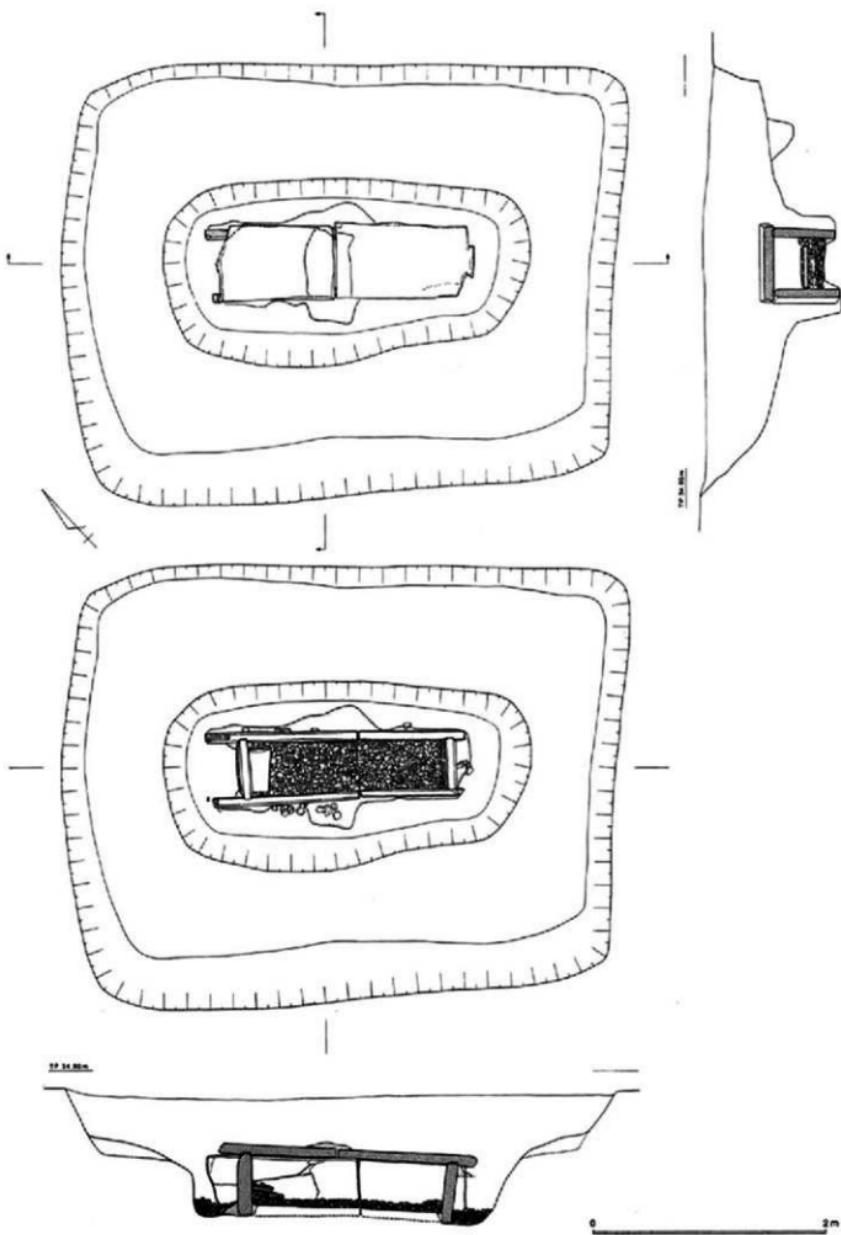


図32 図 力多ヤ古墳陪塚發掘調査圖(1)

	東 壁	西 壁	北 壁	南 壁
墓壇上段・上端	3.22m	3.38m	4.50m	4.35m
" " 下端	2.63m	2.93m	4.25m	3.83m
墓壇下段・上端	1.04m	1.15m	2.64m	2.70m
" " 下端	0.70m	0.75m	2.48m	2.55m
基 台・上端	0.30m	0.27m	1.53m	1.54m
" " 下端	0.38m	0.38m	1.62m	1.63m

2. 石 棺

精巧に加工された流紋岩の石材を組み合わせて構成された石棺である。この石棺は底石を欠く形態であり、シスト系の組合式石棺と呼称される種類のものである。なお、蓋石の西端に1個の突起を作り出していることなどは、この種類の石棺にはみられないところである。この点において、他の種類の石棺の影響も認められるのであるが、大勢においてシスト系組合式石棺の特徴を備えていると言える。

次に蓋石、側石等の説明に入るるのであるが、石棺の主軸を基点にすべてみれば、北東方向の長側石とか南東方向の蓋石とか使用すべきであるが、煩雑さをさける意味から北東方向を北に、南西方向を南、北西方向を西、南東方向を東として、各側石や蓋石の前に冠して記していく。

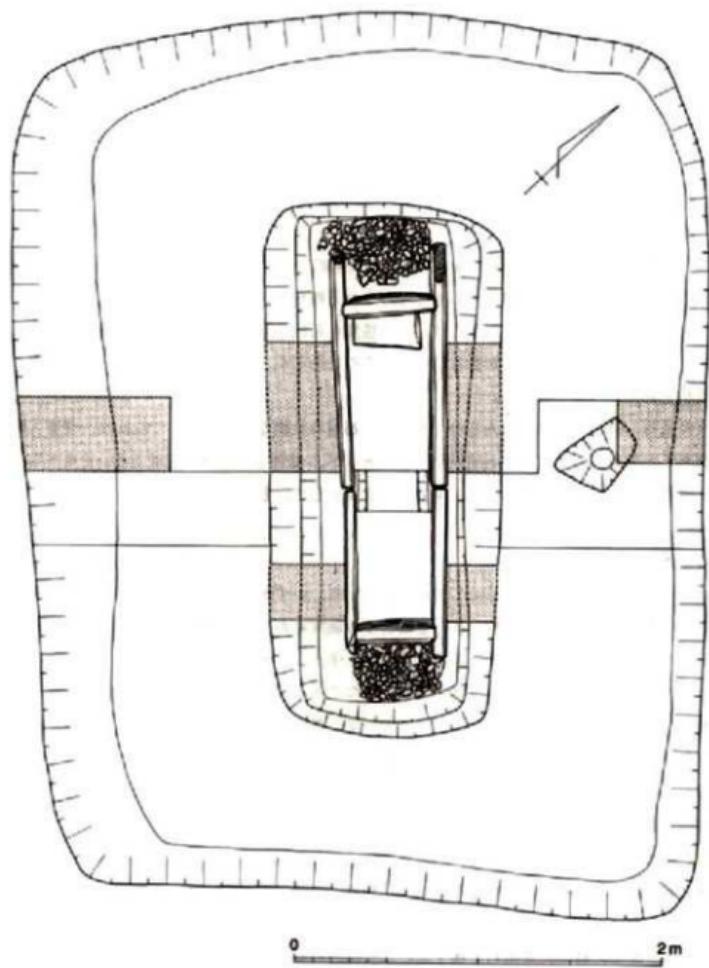
a. 蓋 石

蓋石は2枚の部材を組み合わせて構成されている。いずれも梯形というべき形状の扁平な板状の石材を使用している。2枚の蓋石を接合する箇所にあたる短側面にはなんらの仕口を施すことなく、平滑に面を仕上げているのみである。ゆえに、その組み方は短側面どうしが単に接して置かれるという意図のもとに加工されたものである。しかしながら、実際には棺身に蓋石を被せた結果は、合わせ目が接しておらずその間に僅か1~3cm程の隙間が生じている。そして、その上に粘土による目張りを行っている。

蓋石の下面には、四方の側石を嵌め込むための溝が彫り込まれている。棺身が長側石の内側に短側石をおく形態であり、溝もそれに対応する形に彫られている。

蓋石は西から東に向って傾斜しており、全長に対し東端で10cm下っている。

西蓋石 頭部側に被せられた蓋石である。長さ103cm、西端幅65cm、東端幅63cm、厚み8cmである。上面は平坦である。西短側面を除く各側面は平滑で直線的になるように加工を施しているようである。特に、東蓋石と接するところにあたる東短側面およびその付近は丁寧に仕上げられている。東蓋石にみられるような突起は作り出していないが、西側辺の中央が山形に突出していることが注意をひく程度である。下面には東短側辺を除く各側辺に沿って溝が彫られている。そのうち西側石に対応するものは西端から21cmの位置から始まっている。いずれも幅



第33図 カチヤ古墳埋葬施設実測図(2)

8cm、深さ2cm程度である。溝は斜めに彫り込まれているので、底面の幅は狭められている。溝の側壁、底面には幅0.6cm程の細いノミ痕が認められる。

東蓋石 足部側に被せられた蓋石である。突起も含めた長さ119cm、西端幅65cm、東端幅60cm、厚み8cmである。僅かであるが、西蓋石よりも大きい。東側辺に作り出された突起を除くと、各面は西蓋石と同様な加工を施している。突起は幅広く短い形状で、幅28cmであり、その基部は側辺と鋭角に交わり、抉り込まれているという状態を示している。また、突起は長持形石棺の突起ほど丁寧なつくりではなく、粗いつくりである。下面には、難ぎ目にあたる西端辺を除いて西蓋石と同様な溝が彫り込まれている。もちろん溝は各辺に沿って彫りされている。そのうち、東側石に対応する溝は東端17cmの位置から始まっている。

d. 長側石

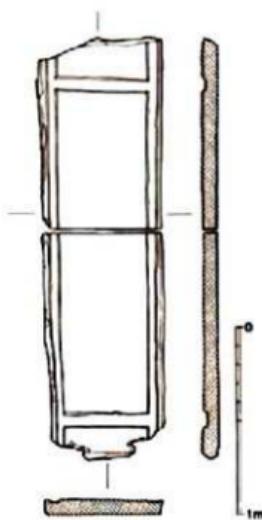
棺身の四方の側石は簡単な6枚の石材からなる。すなわち、両長側石は各々2枚の部材を組み合わせて構成されており、両短側石は各々1枚の部材からなる。なお、長側石の接合する側面にはなんらの仕口を作つておらず単に平滑に仕上げており、蓋石と同じような組み合わせ方である。

棺身の形態は長側石の内側に短側石を嵌め込むもので、長側石と短側石の組み合わせ方は、長側石の内側に彫られた溝に短側面を嵌入する方法を採っている。石棺の幅は頭部側にあたる西端が広く、足部側にあたる東端に向って漸次その幅を減じている。

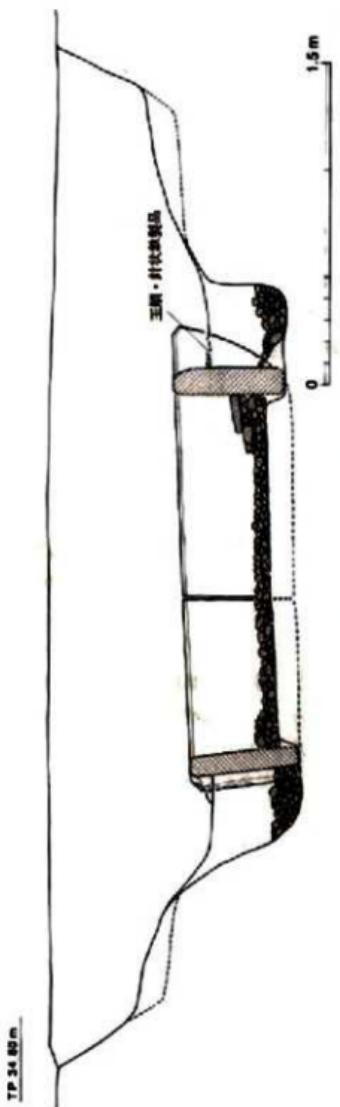
この石棺の内法は、長さ165cm、西端幅46cm、東端幅41cmであり、中央部の脚床からの高さ36cmである。

北・南側石とも、外側はその下半部ほど荒削りの加工で、幅2.5cm程のノミ痕が顕著に認められる。それに対して、内面はそのような痕跡ではなく、平滑に仕上げている。このようなことから内面はノミによって平坦にしたのち、仕上げは研磨によるものとみることできる。

上側面は平坦に作られているが、その長側辺の両縁は斜めに削りとて面を作り出しており、蓋石の溝に嵌め込むに容易な工夫を施している。上側面には幅0.4cm程の細いノミ痕が観察でき、ノミによって最終仕上げを行っていることが判る。ノミ痕の方向は長側辺と直交している。それに対して、両縁の斜面にはノミ痕を観察することができないところから推し測れば、上端面と同じくノミで成形したのち、研磨によって最終的な仕上げを行ったとみることが可能である。なお、外側には板状に剥離するこの石材の特徴を生かして、なんらの手を加え



第34図 カチヤ古墳蓋石前面実測図



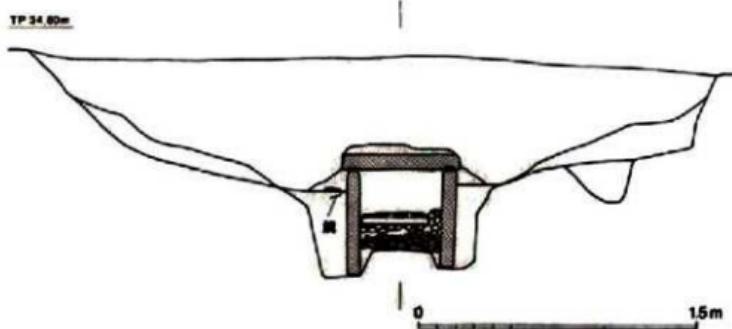
ず、自然な剥離面を利用しているところもあることが観察できる。

南長側石 南長側石の西側に置かれた部材と東側の部材では、その形状・大きさが異なる。すなわち、西側の部材はその西側辺がゴンドラ型の舟にみられる舳先のごとく下縁から上縁に向って反りあがっている。その他の側辺は直線的に加工がなされている。長さは上縁で 126 cm、下縁で 97 cm である。高さは埋置された状態での計測によれば 54 cm であり、厚みは 7 cm である。

東側の部材は梯形を呈し、長さ 90 cm、高さ 53 cm である。厚みは東側の部材よりも僅かに薄くて 6.5 cm である。

次に、嵌入された状態における上面からの観察ではあるが、短側石を嵌め込むための内面の造作をみれば、西側の部材には溝が彫り込まれているのが明瞭に認められるのであるが、東側の部材にはそれが明瞭でない。しかしながら、側方からみれば溝の存在が僅かに認められる。西側の溝に比べてきわめて浅いものである。西短側石に対応する溝は上面の西端 26 cm の位置から始まっており、幅 8 cm、深さ 2 cm 程のものである。

北長側石 西側の部材はその西側辺が下縁から上縁に向って反りかえっている。その反り具合は南長側石よりは急な角度をもって立ち上がりしている。その他の側辺は直線的な加工がなされている。長さは上縁で 130 cm、下縁で 115 cm である。高さは埋置された状態での計測によれば、50 cm であり、厚みは 7.5 cm である。いま、この部材を内面からみれば、大きく 3 つに破れていることが観察できる。そして、外面をみればその破れ口の接合面に



第36図 カチヤ古墳埋葬施設実測図(4)

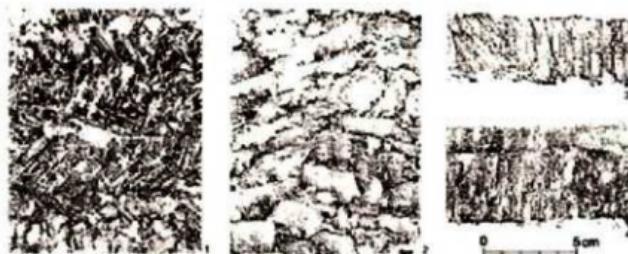
沿って粘土による目張りがなされていた。このようなことから、この破れは少なくとも墓室内に石棺を組み立てたときにはすでに生じていたことが判る。東側の部材は梯形を呈し、長さ92cm、幅48cm、厚み8cmである。

内面に彫られた溝は、短側石が嵌入された状態であるが、両部材とも明瞭に認められる。西側部材の溝は上面の西端27cmの位置から始まり、幅9cm、深さ3cm程のものである。東側部材のそれは東端9cmの位置から始まり、幅10cm、深さ2.5cmである。

c. 短側石

西短側石はこの石棺におけるなかでは比較的厚手の用材を使用している。そのことによるのであろうと推察されるが、外面の加工痕は、他の側石のノミ模よりも明瞭に認められる。そして、ノミ模も深いことが看取できる。このことは、側石の用材を一定の厚みにそろえるという意識が働いた結果であろう。内側は長側石と同じく、研磨によって仕上げている。これは東短側石も同様である。

両短側石とも蓋石・長側石に彫られた溝に嵌め込む側面には、嵌入し易いような工夫をして



第37図 カチヤ古墳石棺拓影

いることは、長側石の上側面と同じである。すなわち、側面は平坦に仕上げられ、その両縁は斜めに削りおとされている。

西短側石の上側面両縁の斜面に幅2.5cm余りの幅の狭いノミ痕が認められ、長側石のそのところの仕上げとは異なっている。また、その上側面は他の側面よりも広いこともある、土器文様でいう浮状文のかたちに加工されていることが認められる。両短側石の形状はいずれも梯形に加工されている。西短側石は上部幅51cm、埋置された状態で測定した数値では高さ52cmで、厚みは13cmである。東短側石はやや小型で、上部幅43cm、高さは西側石と同様な方法によった数値51cmである。

なお、両短側石外方と墓壇壁の間に礫石を充填している。礫石は墓壇底に充填され、両短側石の下部の面に接している。西短側石側は墓壇底と接するところに粘土による目張りを施した上に充填しているが、東側石には粘土による目張りは認められない。

d. 石枕

西短側石の内面に接して、梯形を呈する加工された扁平な石材を礫床上におき、石枕としている。石枕の大きさは長さ37cm、厚み4cmであり、その幅は北端の方が僅かに広く20cmである。

石枕の設置の仕方をみれば、石枕下方の礫床は大き目の礫石を用いて一段高く作られている。石枕は水平でなく、僅かに東側に下っている。なお、両長側石の間に生じた隙間には、石枕を固定するために礫を嵌み込むように充填している。

石枕の上面にベンガラの付着が認められ、赤色顔料を塗布されていたことが判る。

e. 磨床

石棺を組み合わせたあとに、墓壇の「基台」上に礫を敷き並べて磨床としている。磨床は石枕の下方と鉄剣が置かれていた両端が一段高く作られている。その他は、東側、すなわち足部側に向って僅かな傾斜をもちながら下っており、厚みは7~12cmである。

磨床の上面の礫石にはベンガラの付着が認められる。その状態を詳しくみると、上面に現われた礫石には礫石全体に亘って赤色顔料が塗布されているが、その下方の礫には顔料の付着は認められない。このことは、あらかじめ上面に置かれる礫石とその下に置かれる礫石とを区別しており、上部に置かれる礫石にのみ顔料を塗布したことが判る。礫石ひとつ置くにしても、用意周到な計画の基で準備がなされていたのである。言い換えれば、礫石を敷き並べたのちに顔料を塗布したのではないことは明白である。

f. 朱の塗布

石枕・磨床の赤色顔料の塗布についてはすでに述べたとおりであるが、石棺に塗布されたそれについてここで述べておきたい。

各側石と蓋石の内面にはベンガラの付着が認められる。しかし、各側石の上側面、および蓋石に彫られた溝とその外側にはベンガラの付着を認めることができなく、石棺の内部を構成する各面に計画的に赤色顔料の塗布がなされているのである。なお、蓋石の両短側石に対応する

溝の内側には赤色顔料の塗布は認められた。要するに、石棺内部はまさに“朱”に彩られた空間の世界であったと言える。

g. 粘土の目張り

部材の合わせ目などに生じる隙間の各所の外面には粘土による目張りが施されている。それらの箇所を列記すれば、以下のとおりである。両蓋石の合わせ目、蓋石と各側石の接合面、長側石と短側石の接合面、北長側石の破れ目の接合箇所、墓壇底と東短側石が接している箇所である。そのうち、蓋石の合わせ目部分にみられる粘土の目張りの範囲が最も広い。

粘土による目張りが施されていないところは両長側石の合わせ目、および墓壇底と東短側石が接している箇所のみである。前者の棺外遺物面より上方は、蓋石と側石の接合面の目張りと同時に行われており、正確には粘土による目張りがないとは言いきれず、棺外遺物面より下方の合わせ目には目張りは施されていないと言い換えるべきであろう。

粘土による目張りは少なくとも3回の工程に分かれる。まず、墓壇底に石棺を組合せた直後に実施される目張りである。次に、石棺と墓壇の間を棺外遺物面まで埋め戻し棺外に遺物を埋葬したあと、そして、最後は蓋石を被せたあとである。このように、入念に粘土による目張りを施していることは、石棺内部を封じ込めるというイデオロギーの表現であろう。

h. 石棺の材質

各側石・蓋石・石枕とも地元では、通称“陰石”と呼称されているものである。奥田尚氏に採集した石棺材の小片を鑑定していただいたところ、灰白色の流紋岩であるという結果を得た。奥田氏の観察記録は以下のとおりである。

表面は茶褐色を呈するが、断面は灰白色を呈する。発泡孔が多く見られ、長径1mm～2mmのものが多い。孔の内面は茶褐色を呈する場合と灰白色の場合とがある。軽石は白色を呈し、梢円形をなす。粒径は0.2mm～0.3mmである。造岩鉱物は石英と長石である。石英は無色透明で、多く自形をなすものもある。粒径は0.1mm～0.2mmで点在する。長石は無色透明でごく僅かである。粒径は0.04mm以下である。石基は乳白色ないし灰白色を呈し、緻密で堅い。

3. 遺物の出土状態

埋葬施設は全く擾乱されていない、ここで述べる状況が埋葬されたときの状態に近いことを示すものであろう。

副葬品は石棺内と石棺外に分けられる。棺内の遺物はすべて床面上から検出されている。なお、滑石製臼玉は礎石間に落ち込んでいるものが数多く認められた。石棺の西短側石の中央より32cm南東の棺中軸より僅か北東によって歯牙が遺存していた。石棺内は擾乱されていないにもかかわらず歯牙から離れた位置に頭骨があった。遺存していた頭骨はふたつの破片からなり、大きい方は歯牙から南東30cmの位置に検出された。このような状態は遺体の腐乱する過程に起因していると考えざるを得ない。

勾玉は歯牙を挟んで、対称の位置に勾玉の頭部を南東に向けて置かれていた。管玉と臼玉は歯牙の周囲に検出され、一連の首飾りとして着装されたと推察される状況を示していた。詳しくみれば、管玉は歯牙から西の一群と東の一群に分かれており、西群からは10個、東群からも10個出土した。237個の臼玉は歯牙の南2.5cm、すなわち両群の管玉の間にかたまっていた。なお、この臼玉の一群から南東3cm余り離れて、棺中軸を挟んで対称の位置に2個の臼玉が検出された。なお、玉類・歯牙付近には朱が認められた。おそらく、遺体の顔面全体に塗布されたものであろう。

勾玉と管玉を棺中軸を基点においてみれば、勾玉は棺中軸挟んで対称の位置にあるが、東群と西群の管玉は棺中軸を挟んで対称の位置にない。このことは、勾玉が着装された首飾りの一部を構成していないことを示していると考えられる。また、勾玉と管玉・臼玉の大きさから見ても、一連の首飾りとしては勾玉が大きすぎバランスがとれないと思われる。すなわち、勾玉は耳部付近に意識的に置かれたものと推察される。^{図33}なお、管玉と臼玉からなる首飾りの出土状況と棺中軸との上述した関係は、廻乱の過程で生じる遺骸の移動の結果であろう。以上の観察について、玉類副葬状況を想定したのが図版33である。

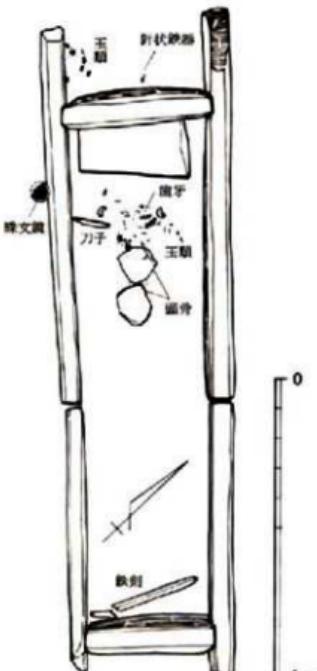
鉄刀子は西短側石から30cm南東の位置にあり、茎端を南長側石に接し、切先を北東に向けて副葬されていた。すなわち、切先は遺骸の方を向いていることになる。

鉄錐は闕付近で2つに折損しており、切先は東短側石の内面から北東12cmの位置に検出された。しかしながら、闕から茎にかけては東短側石に接しており、もとは東短側石と平行に、切先を北東に向けて副葬されていたのだろう。

棺外の遺物は隣床面より20cm前後の上位の面から検出されており、棺内遺物よりも高い位置に置かれている。その高低差は17~20cm余りである。

遺骸の頭位は石枕や歯牙の位置などから北西を向いて埋葬されたことが判る。

鏡は南長側石の西端から南東55cmの棺外に検出された。一方の鏡縁は南長側石に接して鏡背を上に向けており、側石に接する鏡縁の方が高く、もう一方に下にあるという出土状況であった。鏡は目張りの粘土の下からの出土であることを考えると、粘土を



第38図 カチヤ古墳遺物の出土
状態実測図

垂り付けたときに、鏡面を棺内に向けて立てかけるように覆蓋していたものが、検出された状況になつたと推測できなくもない。なお、鏡の下には木質が腐朽したとみられる有機質土も認められず、また鏡に布の付着も認められなかつた。

西短側石の外方で、両長側石に挟まれたところに玉類の一群と針状鉄製品が検出された。そのうち、玉類は南長側石寄りの15cm余りの範囲から出土している。この玉類は緑色凝灰岩製の扁平な勾玉、碧玉製管玉、ガラス製小玉、滑石製臼玉からなり、棺内出土の玉類とはその様相が異なっている。針状鉄製品は棺中軸に位置し、西短側石から4cm北西の位置に出土した。

4. 築造過程

カチヤ古墳の埋葬施設は粘土による目張りを各作業工程ごとに使用していることなどから、その築造過程の詳細を復原することが可能である。築造過程は遺体を石棺内に安置するまでの一連の作業工程と、遺体を安置したのちの工程とに大別される。前者は、埋葬および埋葬儀礼に伴うところの“式場”的整備が主要な目的であり、後者は埋葬に伴う一切の儀礼終了後の“首長蓋”を封じ込めることがある。

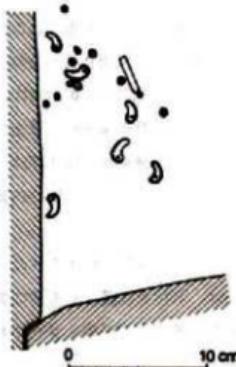
前述したことと重なるところもあるが、第41図に沿ってその検討を行ってみたい。

(1) 墓壙掘削の工程は3回に分れる。その結果、第41図にみられる墓壙が形作られる。

(2) 墓壙底の四周の溝に石棺を設置する。その後、石棺の外側に粘土による目張りを行う。目張りが実施されたところは、西短側石と墓壙底が接する箇所、両長側石の溝に両短側石が嵌



第39図 カチヤ古墳墓内東半部遺物の出土状態実測図



第40図 カチヤ古墳西側石外玉類出土状態実測図

入された外側、北長側石東側部材の破れ口の接合箇所である。目張りが実施されていないところは、2枚の部材からなる各長側石の合わせ目、東短側石と墓壙底が接する箇所である。棺外の隕石の充填は粘土の目張り後行われている。

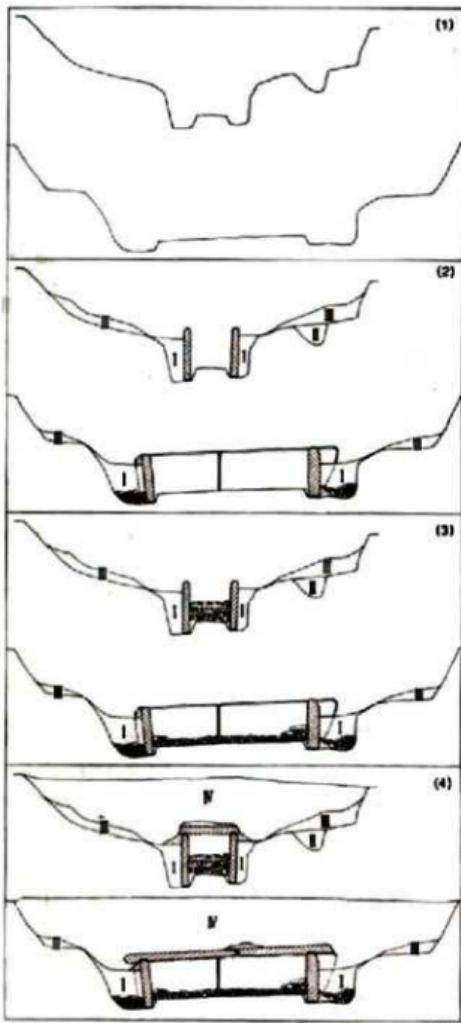
次に、墓壙壁と側石の間を埋め戻す(Ⅰ層)。それは側石下端から35~40cm程まで埋め、側石上端までは及んでいない。このときに、1段目墓底全面に掘上げた土を戻している(Ⅲ層)。Ⅲ層の土質はⅠ層、Ⅱ層に比べて固くひきしまっていた。Ⅲ層はいかなる目的で埋め戻したかは、いまそれを探る術はない。しかしながら、これは意外と簡単なことかも知れない。「埋め戻した」と表現したことには問題があって、埋め戻したのではなく、2段目墓壙の掘削時に、その一部を1段目墓壙底に置土をしており、Ⅰ層を埋め戻す際に、その置土をならしたというのが真相であろう。

なお、墓壙底に検出されたピットは、石棺を設置する直前に掘られたと考えるのが最も妥当であろう。

(3) 踏床を作り、石棺を置いて埋葬および埋葬儀礼に伴う式場の整備は完了する。そして、

次に遺体の安置、副葬品の納置を含む諸々の埋葬儀礼を行う。

(4) 埋葬および埋葬儀礼終了後、側石の外面周囲に粘土を塗り込める。粘土は側石上端にま



第41図 力チャ古墳埋葬施設の構造過程

で及んでいる。西短側石のみが外面全体に及んでいない、両長側石の嵌入部のみに粘土の目張りを施している。上からみれば、その形は扇形を呈している。この粘土によって棺外の鏡、玉類の一部は粘土下に封じられることになる。このことから、棺内と棺外の副葬品は時を同じくして納置されたことが判る。

次に、2枚の部材からなる蓋石を被せる。その後、その合わせ目に粘土による目張りを施す。

そして、N層の土を埋め戻し、埋葬施設の構築はすべて終了する。

最後に、石棺内面に塗布された朱は、いつなされたかを述べておきたい。それは石棺内面を詳しく観察することによって判断できる。すなわち、北長側石の両側部材が壊れたときに生じた剝離面に朱の付着が認められないこと、また、側石の縁辺部に生じた剝離面にも朱の付着が認められないことから、側石内面の朱は石棺を設置する以前にあらかじめ塗布されていたことが判る。蓋石の内面に塗布された朱も同様であろう。

(註1) 和田晴吾「鏡内の家形石棺」(『史林』第59巻第3号) 1976年

(註2) 香川県・岩崎山4号墳の舟形石棺に造り付けられた石枕の両側に勾玉状に彫られたものがある。このような例もあることから、勾玉も一連の首飾りとして扱われたものばかりでなく、耳部附近に意識的に副葬される扱いを受けたものもあるだろうと考えている。

第4章 遺 物

遺物の出土状態で前述しているごとく、副葬品は棺内と棺外に分けて納置されていた。棺内からは碧玉製勾玉2個、碧玉製管玉19個、滑石製臼玉239個、総数260個の玉類と鉄剣1本、^(注1)鉄刀子1本が副葬されていた。棺外からは鏡1面、白色を呈す軟質な碧玉製勾玉9個、碧玉製管玉2個、ガラス小玉5個、滑石製臼玉8個が出土した。

1. 鏡

カチヤ古墳から出土した鏡は珠文鏡1面である。目張りの粘土下からの出土であることも原因して、その遺存状態はきわめて悪い。取り上げたときには多くの破片からなる鏡となっていた。多くの破れ口はその出土状態から

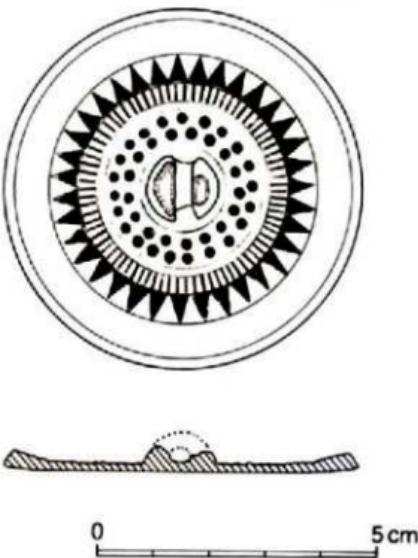
古くに破損していたものとは考えられない。しかしながら、鉢の上半部の破れ口は古いものとみることができ、副葬するときにはすでにその部分は欠損していたと推察される。

面径は6.4cm（復原径）で、背文構成は鉢から外方に、円座—珠文帯—1条の圓線—櫛齒文帯—鋸齒文帯—平縁という順に構成されている。主文様の珠文は2列に配され、合計39個の珠文からなる。その大きさは一定していないが、径0.2cm前後のものである。

縁形式は平縁で、その幅0.8cm、厚さ0.3cmである。反りの数値は完形でないので判らないが、反っていることは認められる。なお、図上でも反りは表現しているが、これはあくまでも復原的に捉えたものである。

鋸齒文帯の幅は0.5cmである。また、櫛齒文帯の幅0.3cmで、櫛齒文は中心を基点にして直行しているものを基本としている。

鉢の径は1.3cmで、高さは欠損して判らないが、推定0.6cm前後であろう。鉢座の径は1.6cmである。また、面厚0.15cmである。



第42図 カチヤ古墳鏡実測図

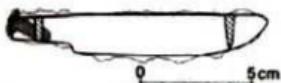
2. 鉄器

a. 鉄劍

全長38.5cm、劍身長29.6cm、身幅2.4~2.6cm、同厚さ0.5cm、茎長8.9cm、同幅2.0~1.1cm、同厚さ0.35cmを測る完形品である。銹化が著しいため、劍身の筋は明瞭でないが、それらしきものは認められる。闇は直角を示さず、弯曲しながら茎へと移る。茎端の近くに目釘孔1個をもつ。茎の先端の両側は丸く作られている。部分的に遺存しているにすぎないが、網布の付着は切先付近から茎端まで劍全体に認められる。それに対して、木質の遺存は全く認められない。こうしたことから、この鉄劍には鞘木、把木などの装具をつけずに、鉄劍そのものに直接網布を巻いて副葬したものと考えられる。

b. 鉄刀子

全長11.5cm、刀身長8.7cm、同幅(最大幅)1.8cm、同厚さ0.4cm、茎長

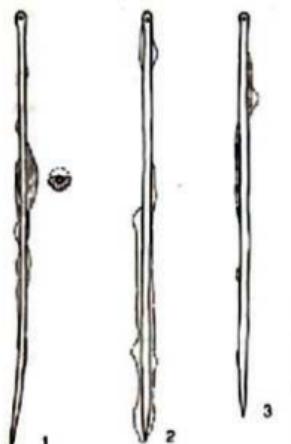


2.6cm、同幅(最大幅)1.3cm、同厚さ0.3cmを測る完形品である。

基の部分に網布の付着を観察することができるが、刀身部分には、いま、その付着は認められない。なお、木質は遺存しておらず、鉄劍と同様把木などの装具をつけずに、鉄刀子に直接網布を巻いて副葬したものであろう。



第43図 カチヤ古墳鐵劍実測図



第45図 カチヤ古墳針状鉄製品実測図

c. 針状鉄製品

棺外の玉類に伴って、針状鉄製品が3本出土した。針状鉄製品は円形の断面を示し、径0.15cm前後である。頭部は打ちのぼされ、そこに針孔の存在をうかがえるともみえるが、確かに針孔と断定できるものはない。X線写真をみれば、僅かに針孔らしきと想われるものがあり、固では針孔を表現している。針状鉄製品の先端は尖っている。

3本とも木質が遺存しており、それらを観察すれば、頭部以外は先端まで径0.4cm余りの木

質でおおわれていたとみることができる。おそらく、棒状の木に針状鉄製品を打ち込んでいるのである。(1) (2)は全長7.7cm、(3)は全長7.3cmである。

3. 玉類

a. 棚内の玉類

棺内より出土した玉類は合計260個あり、勾玉・管玉・臼玉の3種類である。その材質は2種類の石材から成り、勾玉と管玉は碧玉、臼玉は滑石である。

勾玉 勾玉は2個検出した。いずれも大型で、管玉よりも濃い色調の碧玉でつくられ、表面には光沢があり丁寧に仕上げられている。穿孔は両方とも片側から行っている。穿孔を始める面を裏面とし、反対側を裏面として以下記述する。

(1)は頭部の幅が最も広く、尾部に行くにしたがって狭くなっている。全体に丸味をおび、断面は円形に近いが、表面の孔付近はやや平坦になっている。側面には勾玉の弯曲に直交する方向に細かい研磨痕がある。腹部にも研磨痕が残っており、ほぼ横方向である。暗い緑色を呈し、全長32.75mmで、厚さは頭部で10.05mm、胸部で9.70mmをはかる。孔径は1.40～2.30mmで、裏面の孔周囲には穿孔時にできたと思われる小さな剝離がみられる。なお、頭部裏面には2ヶ所小さな凹みがあるが、整形の際の剝離面と思われる。

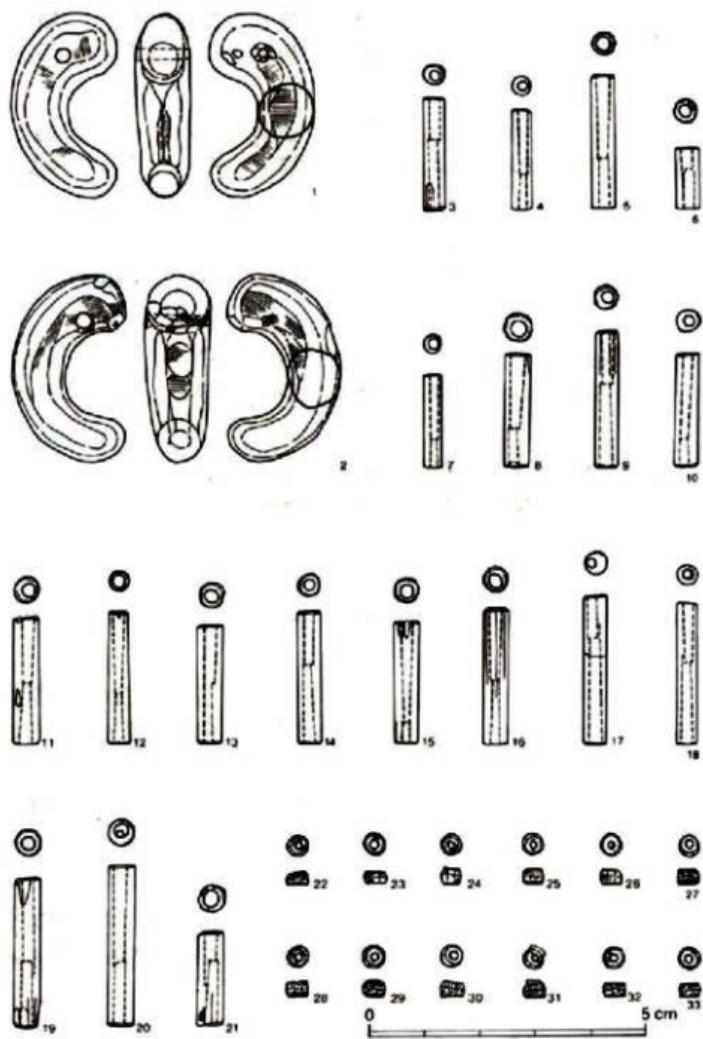
(2)は(1)よりもやや粗いつくりで、頭・胸部に整形の際の剝離面が観察できる。孔付近は平坦になっているが、胸部以下は丸みをもっている。全体にかなり精緻な鋸出しが行われているが、頭部付近や腹部では擦痕を残している。全長は33.10mm、頭部で11.95mm、胸部で11.05mmの厚さをもち、暗い緑色を呈する。孔は腹部寄りに穿たれ、表・裏面それぞれ径3.20mm、1.55mmである。両面とも孔の周囲には、小さな剝離が連続してめぐっている(図版32-1)。

管玉 出土時には20個であったが、うち(17)は2個が接合できたため、完形品としては19個である。しかしながら、その出土状態をみれば接合できた2個の管玉は約9mm離れた位置で出土しており、一連の首飾りとして使用しているときには、各々1個の管玉として扱われていたものと推察される。

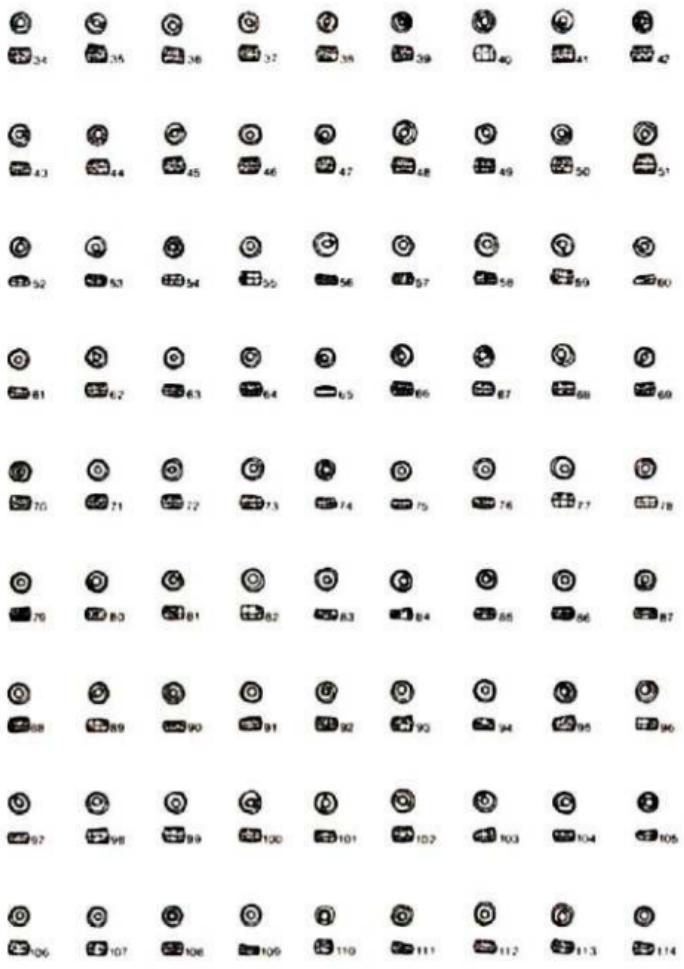
管玉には硬質なものと軟質なものがあり、硬質の管玉は(21)と(6)で、他は軟質なものである。(21)は棺内の勾玉と同じく暗い緑色を示し、(6)は軟質な碧玉と近い色調(灰みの緑色)を呈している。軟質のものはおおむね明るい灰みの緑色を呈する。また、軟質のものには側面端が風化しているものがある。

径の最も小さいのは(7)の3.25mmで、大きいものは(8)で、4.80mmである。第2表は個数と上・下径の平均値を0.2

	8	5	10	15	個数
320	2
340	1
360	1
380
400	1
420	6
440	*****	4
460	****	4
480	****
500	*****
520	*****
540	*****
560	*****
580	*****
600	*****
620	*****
640	*****
660	*****
680	*****
700	*****
720	*****
740	*****
760	*****
780	*****
800	*****
820	*****
840	*****
860	*****
880	*****
900	*****
920	*****
940	*****
960	*****
980	*****
1000	*****
1020	*****
1040	*****
1060	*****
1080	*****
1100	*****
1120	*****
1140	*****
1160	*****
1180	*****
1200	*****
1220	*****
1240	*****
1260	*****
1280	*****
1300	*****
1320	*****
1340	*****
1360	*****
1380	*****
1400	*****
1420	*****
1440	*****
1460	*****
1480	*****
1500	*****
1520	*****
1540	*****
1560	*****
1580	*****
1600	*****
1620	*****
1640	*****
1660	*****
1680	*****
1700	*****
1720	*****
1740	*****
1760	*****
1780	*****
1800	*****
1820	*****
1840	*****
1860	*****
1880	*****
1900	*****
1920	*****
1940	*****
1960	*****
1980	*****
2000	*****
2020	*****
2040	*****
2060	*****
2080	*****
2100	*****
2120	*****
2140	*****
2160	*****
2180	*****
2200	*****
2220	*****
2240	*****
2260	*****
2280	*****
2300	*****
2320	*****
2340	*****
2360	*****
2380	*****
2400	*****
2420	*****
2440	*****
2460	*****
2480	*****
2500	*****
2520	*****
2540	*****
2560	*****
2580	*****
2600	*****
2620	*****
2640	*****
2660	*****
2680	*****
2700	*****
2720	*****
2740	*****
2760	*****
2780	*****
2800	*****
2820	*****
2840	*****
2860	*****
2880	*****
2900	*****
2920	*****
2940	*****
2960	*****
2980	*****
3000	*****
3020	*****
3040	*****
3060	*****
3080	*****
3100	*****
3120	*****
3140	*****
3160	*****
3180	*****
3200	*****
3220	*****
3240	*****
3260	*****
3280	*****
3300	*****
3320	*****
3340	*****
3360	*****
3380	*****
3400	*****
3420	*****
3440	*****
3460	*****
3480	*****
3500	*****
3520	*****
3540	*****
3560	*****
3580	*****
3600	*****
3620	*****
3640	*****
3660	*****
3680	*****
3700	*****
3720	*****
3740	*****
3760	*****
3780	*****
3800	*****
3820	*****
3840	*****
3860	*****
3880	*****
3900	*****
3920	*****
3940	*****
3960	*****
3980	*****
4000	*****
4020	*****
4040	*****
4060	*****
4080	*****
4100	*****
4120	*****
4140	*****
4160	*****
4180	*****
4200	*****
4220	*****
4240	*****
4260	*****
4280	*****
4300	*****
4320	*****
4340	*****
4360	*****
4380	*****
4400	*****
4420	*****
4440	*****
4460	*****
4480	*****
4500	*****
4520	*****
4540	*****
4560	*****
4580	*****
4600	*****
4620	*****
4640	*****
4660	*****
4680	*****
4700	*****
4720	*****
4740	*****
4760	*****
4780	*****
4800	*****
4820	*****
4840	*****
4860	*****
4880	*****
4900	*****
4920	*****
4940	*****
4960	*****
4980	*****
5000	*****
5020	*****
5040	*****
5060	*****
5080	*****
5100	*****
5120	*****
5140	*****
5160	*****
5180	*****
5200	*****
5220	*****
5240	*****
5260	*****
5280	*****
5300	*****
5320	*****
5340	*****
5360	*****
5380	*****
5400	*****	..			

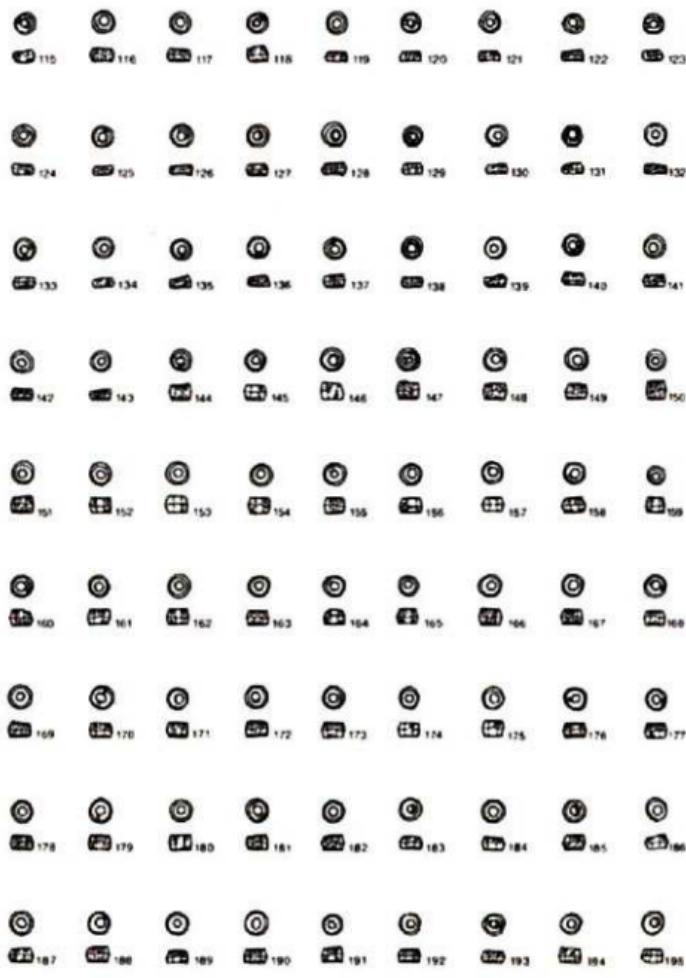


第46図 力チヤ古墳内出土玉類実測図(1)

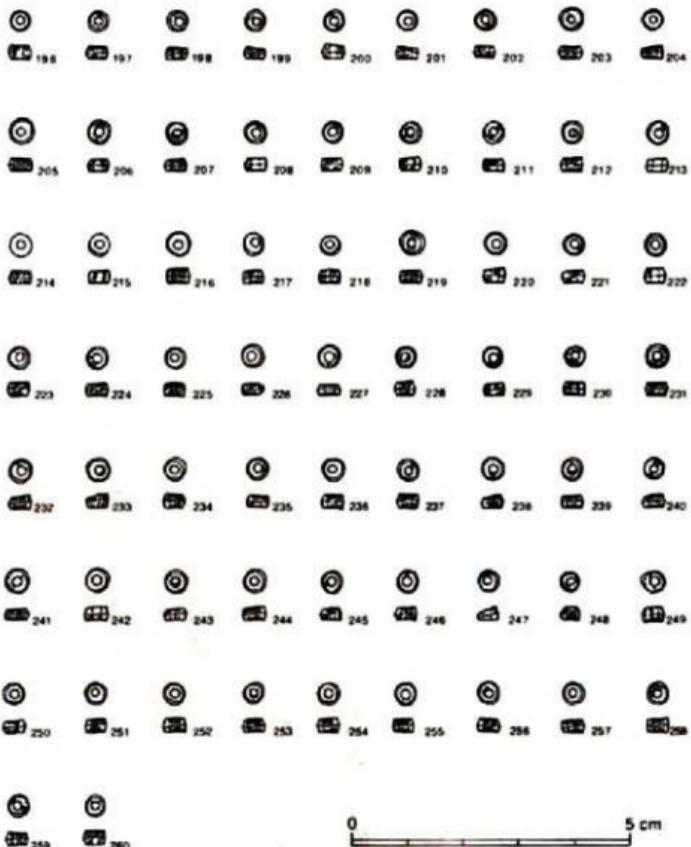


0 5 cm

第 47 図 カチヤ古墳内出土玉類実測図 (2)



第 48 図 カチヤ古墳内出土玉類実測図 (3)



第48図 カチャ古墳内出土玉類実測図(4)

mm単位の目盛で示したものであるが、径3.4mm前後の細いもの(4)(7)(12)(18)と、
径4.4mm前後のものの2つに分れることが観察できる。

長さは(17)が本来2個とすれば、上半が10.75mmで最も短く、28.30mmの(20)が最も長い。
(6)・(17)の上半のように11mm程度のもの(A類)と、(4)(7)(21)・(17)の下半のように17mm前後のもの(B類)、そして20mm程度以上のもの(C類)の3種に分けることができる(第3表)。ただし、(20)は2番目に長い(19)と2.2mmの差があり、D類として分離すべきかもしれない。また、径の小さいものはそれぞれ2個ずつB・C類に含まれる。なお、總延

長は約412mmである。

孔はすべて両側から穿たれており、1.25mm(13)から2.40mm

(21)まであるが、2mm前後のものが最も多い。細いものの孔
径平均値は1.84mm、太いものは2.01mmではほとんど差はない。

整形については、軟質のものと硬質の(6)が側面の両端が
研ぎへらされてやや丸味をねびている。(21)の上端は細かい
剝離により面とりをしているが、研磨がゆきとどいていない。
下端は側面端に加えて孔の周囲も研がれ、軟質のものより丸
い。断面は円形に近いが、(9)(11)(15)(16)(19)等は側
面端付近の断面が多角形を呈する(図版32-2)。この多角形
は、4角形を基本とした8角形のものが多い。(3)(8)等の
側面には部分的に平坦面があり、それらの一辺と思われる。た
だし、径の細いもの、硬質のものにはこれらは全
く認められず、断面はほぼ円形である。

白玉 棚内で出土した白玉は239個あり、すべ
て滑石製で暗い青みの緑色を基本とする。そのうち2個(22)(23)はやや離れた位置で検出した
が、つくりは他のものと同じである。実際に糸を
通して計測した総延長は約538mmである。

白玉の形態は、側面中央に丸味のある棱をもつ
ものがほとんどであり、後述の棺外白玉B類に相
当する。棱のないものでも中央が丸くふくらんで
いる。孔のある面はどちらも平坦であるが、両面
が平行でないものが多い。

厚さは1.55mm(85, 132, 134)から3.15mm(51,
150)で、その差は1.6mmある。しかし、厚さと個
数の関係をグラフに表すと、2.3mmを中心とした
山形に近い形を示し、厚さによって分類すること
はできない(第4表)。

径は3.20mm(159, 248)から4.20mm(56)のもの
のままであるが、(110)(159)(248)の際立って小
さい3個を除けば、3.5mmから4.2mmのわずか0.7
mmの間にすべておさまり、かなりの齊一性がみら
れる(第5表)。なお、径平均値は3.84mmである。

	6	5	10	15	個数
1480					2
1500	***				
1520					
1540					
1560					
1580					
1600					
1620					
1640					
1660					
1680					
1700					
1720					
1740					
1760					
1780					
1800					
1820					
1840					
1860					
1880					
1900					
1920					
1940					
1960					
1980					
2000					
2020					
2040					
2060					
2080					
2100					
2120					
2140					
2160					
2180					
2200					
2220					
2240					
2260					
2280					
2300					
2320					
2340					
2360					
2380					
2400					
2420					
2440					
2460					
2480					
2500					
2520					
2540					
2560					
2580					
2600					
2620					
2640					
2660					
2680					
2700					
2720					
2740					
2760					
2780					
2800					
2820					
2840					
2860					
2880					
2900					
2920					
2940					
2960					
2980					
3000					
3020					
3040					
3060					
3080					
3100					
3120					
3140					
3160					
3180					
3200					
3220					
3240					
3260					
3280					
3300					
3320					
3340					
3360					
3380					
3400					
3420					
3440					
3460					
3480					
3500					
3520					
3540					
3560					
3580					
3600					
3620					
3640					
3660					
3680					
3700					
3720					
3740					
3760					
3780					
3800					
3820					
3840					
3860					
3880					
3900					
3920					
3940					
3960					
3980					
4000					
4020					
4040					
4060					
4080					
4100					
4120					
4140					
4160					
4180					
4200					
4220					
4240					
4260					
4280					
4300					
4320					
4340					
4360					
4380					
4400					
4420					
4440					
4460					
4480					
4500					
4520					
4540					
4560					
4580					
4600					
4620					
4640					
4660					
4680					
4700					
4720					
4740					
4760					
4780					
4800					
4820					
4840					
4860					
4880					
4900					
4920					
4940					
4960					
4980					
5000					
5020					
5040					
5060					
5080					
5100					
5120					
5140					
5160					
5180					
5200					
5220					
5240					
5260					
5280					
5300					
5320					
5340					
5360					
5380					
5400					
5420					
5440					
5460					
5480					
5500					
5520					
5540					
5560					
5580					
5600					
5620					
5640					
5660					
5680					
5700					
5720					
5740					
5760					
5780					
5800					
5820					
5840					
5860					
5880					
5900					
5920					
5940					
5960					
5980					
6000					
6020					
6040					
6060					
6080					
6100					
6120					
6140					
6160					
6180					
6200					
6220					
6240					
6260					
6280					
6300					
6320					
6340					
6360					
6380					
6400					
6420					
6440					
6460					
6480					
6500					
6520					
6540					
6560					
6580					
6600					
6620					
6640					
6660					
6680					
6700					
6720					
6740					
6760					
6780					
6800					
6820					
6840					
6860					
6880					
6900					
6920					
6940					
6960					
6980					
7000					
7020					
7040					
7060					
7080					
7100					
7120					
7140					
7160					
7180					
7200					
7220					
7240					
7260					
7280					
7300					
7320					
7340					
7360					
7380					
7400					
7420					
7440					
7460					
7480					
7500					
7520					
7540					
7560					
7580					
7600					
7620					
7640					
7660					
7680					
7700					
7720					
7740					
7760					
7780					
7800					
7820					
7840					
7860					
7880					
7900					
7920					
7940					
7960					
7980					
8000					
8020					
8040					
8060					
8080					
8100					
8120					
8140					
8160					
8180					
8200					

孔は臼玉のほぼ中央に穿たれ、側面の後と直交する方向のものが多いが、(95) (185) (212) (239) 等斜め方向のものもある。孔径は上面と下面に差があるが、最も大きいものは1.70 mm (80)、最小は1.10 mm (24)を測り、一方から穿孔されている。

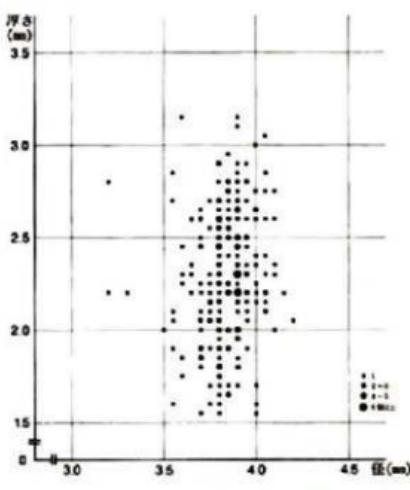
整形については、側面に研磨痕を残すものが大部分を占めている(図版32-3)。研磨痕は側面中央部ではなく、両端付近に限られるものがほとんどであり、「ソロバン玉」形を意識して研磨調整したものと思われる。研磨方向は孔と同じ方向のものと、左斜め方向のものとがある。側面の研磨は数回にわけて行われたと思われ、孔のある両側の平坦面は円に近い多角形を呈する(図版32-5)。また、側面の研磨痕を消しているものもみられる(図版32-4)が、平坦面および側面断面は円に近い多角形である(78, 129, 157, 213, 243)等。なお、研磨痕を平坦面にも残すものがある(22, 42, 90, 138, 181, 230, 258)等(図版32-7)。

孔を観察すると、孔径が両側で異なることがあげられる。また、孔と平坦面との間の縫が欠けているものが大部分を占め、それらのうち孔の全周が欠けているものと、一部のみのものとがある。しかも孔径の小さい方に限って孔の周囲が欠損しており、孔が貫通した際に欠損したものと思われる(図版32-6)。このような欠損が大部分の臼玉にみられることは、穿孔が1個ずつ行われたことを示すものであろう。

側面と平坦面との間の縫は明確であるが、縫の一部が破損し消失するものがある(56) (92) (120) (139) (185) (248) 等(図版32-8)。これは使用時のものとは考え難く、むしろ製作時に小さなタガネのようなもので1個ずつ割り出した痕跡と思われる。

次に、以上述べてきた臼玉の特徴から考えられる製作法を若干記してみたい。

臼玉の製作法は、平板石に基盤目状に直交する溝を刻み、各々の中央に穿孔し、板チョコレートのように割るもの(A)、扁平長方形の細長い板材を次々と切断し、正方形の材をつくり、整形、穿孔するものの(B)、板状の扁平石を原材とし、1個ずつ割り出していくものの(C)、管玉を切断するものの(D)、の4種類が指摘されている。ただし、(A)は沖の島の大臼玉及び平玉に限られるということであり除外すると、カチャ古墳出土の臼玉が1個ずつ穿孔している点か



第5表 カチャ古墳内臼玉分布表

第6表 カチャ古墳・棺内管玉計測表 (単位mm)

No.	長さ	径		孔径		穿孔法	色調	類型	備考
		上	下	上	下				
3	19.85	4.35	4.25	2.05	2.25	両	にぶい青みの緑	C	軟
4	17.60	3.30	3.45	1.80	1.50	タ	明るい灰みの緑	B	タ・細
5	23.30	4.25	4.25	2.10	2.05	タ	にぶい緑	C	タ
6	10.90	4.25	4.20	2.00	1.80	タ	灰みの緑	A	硬
7	16.55	3.30	3.25	1.75	1.65	タ	明るい灰みの緑	B	軟・細
8	20.15	4.80	4.65	2.30	2.00	タ	灰みの緑	C	タ
9	24.15	4.35	4.20	2.00	2.25	タ	にぶい青みの緑	タ	タ
10	20.15	4.10	4.40	1.95	1.75	タ	明るい灰みの緑	タ	タ
11	22.35	4.50	4.40	2.10	1.95	タ	タ	タ	タ
12	23.60	3.50	3.65	2.15	1.70	タ	タ	タ	タ・細
13	20.90	4.50	4.30	2.00	1.25	タ	やわらかい緑	タ	タ
14	23.40	4.20	4.20	2.00	1.80	タ	明るい灰みの緑	タ	タ
15	21.50	4.60	4.60	2.35	1.45	タ	灰みの緑	タ	タ
16	24.15	4.40	4.40	1.95	1.75	タ	タ	タ	タ
17	10.75	4.05	4.15	1.90	2.35	タ	明るい灰みの緑	A B	タ
	16.30							B	
18	25.20	3.80	3.75	1.95	2.20	タ	タ	C	タ・細
19	26.10	4.45	4.45	2.15	1.95	タ	やわらかい緑	タ	タ
20	28.30	4.65	4.70	2.35	1.95	タ	あさい青みの緑	タ	タ
21	16.40	4.65	4.60	2.40	2.15	タ	暗い緑	B	硬

第7表 カチャ古墳・棺内臼玉計測表 (単位mm)

No.	径	厚	孔径	色調	No.	径	厚	孔径	色調
22	3.90	2.20	1.40	暗い青みの緑	32	3.80	2.50	1.25	暗いグレイ
23	3.95	2.05	1.55	タ	33	3.80	2.60	1.60	タ
24	3.70	2.65	1.10	灰みの緑	34	3.95	2.80	1.60	暗い青みの緑
25	3.75	2.55	1.25	タ	35	3.90	3.10	1.35	タ
26	3.95	2.70	1.20	にぶい緑	36	3.80	2.70	1.60	タ
27	3.80	2.45	1.40	灰みの緑	37	3.80	2.70	1.65	タ
28	3.85	2.70	1.60	暗いグレイ	38	3.85	2.55	1.35	暗いグレイ
29	4.05	2.75	1.60	タ	39	3.80	2.40	1.25	暗い青みの緑
30	3.95	2.50	1.60	暗い青みの緑	40	4.10	2.75	1.60	灰みのオリーブグリーン
31	3.85	2.65	1.30	タ	41	4.05	2.85	1.35	タ

No.	径	厚	孔 径	色 調	No.	径	厚	孔 径	色 調
42	3.90	2.50	1.60	暗いグレイ	76	3.90	1.80	1.50	暗い青みの緑
43	3.90	2.45	1.30	灰みの緑	77	4.00	2.40	1.60	×
44	3.80	2.70	1.65	暗い青みの緑	78	3.70	2.00	1.60	緑みのグレイ
45	3.95	2.80	1.30	×	79	3.80	2.25	1.25	暗いグレイ
46	3.85	2.75	1.50	灰みのオリー ブグリーン	80	3.80	2.00	1.70	暗い青みの緑
47	3.65	2.60	1.50	暗い青みの緑	81	3.90	2.35	1.45	×
48	4.05	2.60	1.35	×	82	4.10	2.30	1.60	暗いグレイ
49	3.80	2.30	1.30	暗いグレイ	83	4.00	1.70	1.20	緑みのグレイ
50	3.85	2.95	1.65	暗い青みの緑	84	3.90	2.00	1.45	暗い青みの緑
51	3.90	3.15	1.55	暗いグレイ	85	3.70	1.55	1.60	暗いグレイ
52	3.75	1.70	1.60	暗い青みの緑	86	3.90	2.00	1.60	暗い青みの緑
53	3.70	1.85	1.30	灰みのオリー ブグリーン	87	3.90	1.80	1.20	灰みの緑
54	3.80	1.80	1.65	緑みのグレイ	88	3.65	2.30	1.60	暗い青みの緑
55	3.90	2.30	1.60	×	89	3.90	2.20	1.45	×
56	4.20	2.05	1.60	暗い青みの緑	90	3.80	1.90	1.20	暗い青みの緑
57	3.80	1.90	1.60	灰みの緑	91	3.80	2.20	1.60	暗いグレイ
58	4.05	2.15	1.30	暗いグレイ	92	3.90	2.45	1.20	暗い青みの緑
59	3.90	2.40	1.65	明るい灰みの 黄緑	93	3.90	2.50	1.60	×
60	3.60	1.75	1.60	緑みのグレイ	94	3.80	1.95	1.25	緑みのグレイ
61	3.70	1.80	1.50	灰みの緑	95	3.90	2.30	1.60	暗い青みの緑
62	3.95	2.20	1.30	オリー・ブグリ ーン	96	3.85	1.90	1.60	暗いグレイ
63	3.85	2.00	1.25	明るい灰みの 黄緑	97	3.75	1.90	1.20	暗い青みの緑
64	3.75	2.15	1.45	灰みの緑	98	3.95	2.35	1.50	×
65	3.80	1.60	1.25	×	99	3.80	2.45	1.25	暗いグレイ
66	3.90	2.25	1.60	暗い青みの緑	100	3.80	2.00	1.20	灰みの緑
67	3.80	2.35	1.60	灰みのオリー ブグリーン	101	3.70	1.90	1.45	暗い青みの緑
68	4.05	2.20	1.60	灰みの緑	102	3.90	2.20	1.60	×
69	3.75	2.25	1.25	×	103	3.90	2.30	1.20	×
70	3.85	2.20	1.25	暗い青みの緑	104	3.80	1.85	1.60	×
71	3.80	2.25	1.25	暗いグレイ	105	3.55	1.60	1.55	灰みの緑
72	3.85	2.40	1.25	灰みの緑	106	3.60	2.30	1.40	にぶい青みの 緑
73	4.00	2.15	1.60	暗いグレイ	107	3.60	2.25	1.40	にぶい青みの 緑
74	3.70	1.85	1.60	暗い青みの緑	108	3.55	2.10	1.35	×
75	3.75	1.60	1.60	×	109	3.80	1.75	1.60	にぶい緑

No.	径	厚	孔径	色調	No.	径	厚	孔径	色調
110	3.30	2.20	1.45	灰みのオリーブグリーン	144	3.85	2.80	1.30	暗い青みの緑
111	3.80	1.80	1.60	〃	145	3.90	2.70	1.65	〃
112	3.80	2.10	1.40	暗い青みの緑	146	4.05	3.05	1.50	明るい灰みの緑
113	3.85	2.25	1.60	灰みの緑	147	3.90	2.90	1.30	暗い青みの緑
114	3.50	2.00	1.40	にじい緑	148	3.90	2.65	1.60	〃
115	3.70	2.10	1.65	暗い青みの緑	149	3.90	2.70	1.60	〃
116	4.00	2.20	1.65	灰みのオリーブグリーン	150	3.60	3.15	1.40	灰みのオリーブグリーン
117	3.90	2.15	1.60	灰みの緑	151	3.95	2.90	1.60	暗い青みの緑
118	3.55	2.70	1.30	暗い青みの緑	152	3.80	2.55	1.30	灰みのオリーブグリーン
119	3.80	1.70	1.55	灰みの緑	153	3.90	2.80	1.60	灰みの緑
120	3.80	1.80	1.25	暗い青みの緑	154	3.80	2.90	1.60	暗い青みの緑
121	3.85	1.70	1.55	〃	155	3.80	2.80	1.20	〃
122	3.80	2.00	1.60	暗いグレイ	156	3.90	2.50	1.60	暗いグレイ
123	3.60	1.65	1.30	暗い青みの緑	157	3.85	2.80	1.65	灰みのオリーブグリーン
124	3.80	1.65	1.55	明るい灰みの緑	158	4.00	2.65	1.60	暗い青みの緑
125	3.85	1.65	1.60	暗い青みの緑	159	3.20	2.80	1.40	灰みのオリーブグリーン
126	4.00	1.60	1.50	暗い緑みの青	160	3.80	2.60	1.60	暗い青みの緑
127	3.90	1.85	1.60	暗い青みの緑	161	3.90	2.85	1.60	〃
128	4.10	2.00	1.15	灰みの緑	162	3.90	2.80	1.25	〃
129	3.55	1.90	1.25	暗い青みの緑	163	3.85	2.60	1.60	灰みの緑
130	3.80	1.75	1.50	〃	164	3.80	2.50	1.60	暗い青みの緑
131	3.70	1.90	1.55	〃	165	3.55	2.85	1.65	灰みの緑
132	4.00	1.55	1.25	灰みの緑	166	4.00	3.00	1.55	暗い青みの緑
133	3.90	1.70	1.50	暗い青みの緑	167	3.90	2.65	1.65	灰みの緑
134	3.80	1.55	1.35	灰みの緑	168	3.95	2.50	1.60	暗いグレイ
135	3.70	2.05	1.25	暗い青みの緑	169	4.00	2.75	1.30	明るい灰みの黄緑
136	3.90	1.95	1.60	灰みの緑	170	3.90	2.45	1.60	暗い青みの緑
137	3.80	2.05	1.60	暗い青みの緑	171	3.75	2.70	1.55	〃
138	3.80	1.80	1.60	灰みの緑	172	3.95	2.60	1.65	暗いグレイ
139	3.85	2.00	1.20	暗い青みの緑	173	4.00	2.60	1.65	〃
140	3.90	2.00	1.60	灰みの緑	174	3.70	2.60	1.30	緑みのグレイ
141	3.95	1.90	1.65	明るい灰みの黄緑	175	3.80	2.90	1.60	暗いグレイ
142	3.90	1.95	1.25	暗いグレイ	176	3.90	2.65	1.25	暗い青みの緑
143	3.85	1.65	1.25	灰みの緑	177	3.85	2.55	1.60	灰みの緑

No.	径	厚	孔径	色調	No.	径	厚	孔径	色調
178	3.90	2.60	1.60	暗い青みの緑	212	3.90	2.45	1.60	灰みのオリーブグリーン
179	3.85	2.75	1.35	暗いグレイ	213	3.85	2.20	1.60	灰みの緑
180	3.90	2.60	1.30	暗い青みの緑	214	3.95	2.30	1.25	暗い青みの緑
181	3.95	2.80	1.25	やわらかい黄緑	215	3.80	2.45	1.25	〃
182	3.85	2.50	1.60	暗い青みの緑	216	4.10	2.60	1.55	〃
183	3.90	2.50	1.60	〃	217	3.90	2.15	1.60	〃
184	3.95	2.20	1.65	暗い灰みの青	218	3.55	2.05	1.25	暗いグレイ
185	3.80	2.60	1.60	暗いグレイ	219	4.05	2.10	1.65	暗い青みの緑
186	3.90	2.35	1.55	暗い青みの緑	220	3.85	2.50	1.60	〃
187	4.00	2.25	1.60	〃	221	3.90	2.20	1.25	〃
188	3.90	2.75	1.60	暗い灰みの青	222	3.70	2.45	1.65	暗いグレイ
189	3.90	2.00	1.25	暗いグレイ	223	3.90	2.60	1.30	明るい灰みの黄緑
190	4.05	2.40	1.65	明るい灰みの黄緑	224	3.95	2.30	1.65	暗い青みの緑
191	3.80	2.45	1.20	緑みのグレイ	225	3.75	2.30	1.25	緑みのグレイ
192	3.95	2.45	1.25	緑みのグレイ	226	3.85	1.90	1.65	にぶい青みの緑
193	3.90	2.00	1.60	暗い青みの緑	227	3.90	1.95	1.60	暗いグレイ
194	3.90	2.65	1.65	灰みの緑	228	3.65	2.35	1.60	にぶい青みの緑
195	3.90	2.20	1.65	〃	229	3.70	2.25	1.60	暗い青みの緑
196	3.80	2.50	1.60	明るい灰みの黄緑	230	3.90	2.35	1.30	〃
197	3.75	2.20	1.50	暗い青みの緑	231	4.05	2.30	1.25	暗い青みの緑
198	3.75	2.05	1.60	緑みのグレイ	232	4.00	2.65	1.60	暗い青みの緑
199	3.70	2.05	1.55	暗いグレイ	233	3.75	2.55	1.60	にぶい青みの緑
200	3.90	2.45	1.60	〃	234	3.70	2.50	1.60	暗い青みの緑
201	3.80	2.15	1.60	暗い青みの緑	235	3.90	2.20	1.60	〃
202	3.80	2.05	1.70	〃	236	4.00	2.35	1.25	灰みの緑
203	4.05	2.20	1.30	灰みの緑	237	3.80	2.55	1.30	暗い青みの緑
204	3.85	2.25	1.20	暗い青みの緑	238	3.90	2.30	1.30	暗いグレイ
205	4.05	2.20	1.25	灰みの緑	239	3.80	2.15	1.60	暗い青みの緑
206	3.95	2.15	1.65	暗い青みの緑	240	3.85	2.20	1.25	〃
207	3.90	2.20	1.65	〃	241	4.05	2.10	1.60	灰みの緑
208	3.90	2.30	1.60	にぶい緑	242	4.15	2.20	1.60	暗い青みの緑
209	3.85	2.20	1.60	暗いグレイ	243	3.95	2.10	1.60	〃
210	3.85	2.60	1.40	灰みの緑	244	4.10	2.35	1.30	〃
211	3.90	2.10	1.60	暗い青みの緑	245	3.75	2.15	1.60	〃

No.	径	厚	孔 径	色 調	No.	径	厚	孔 径	色 調
246	3.90	2.20	1.60	暗い青みの緑	254	3.80	2.30	1.60	灰みの緑
247	3.65	2.20	1.25	グリーン	255	3.70	2.45	1.60	グリーン
248	3.20	2.20	1.55	濃い青みの緑	256	3.95	2.20	1.25	やわらかい黄緑
249	3.70	2.60	1.65	灰みの緑	257	3.85	2.20	1.25	灰みの緑
250	3.75	2.10	1.60	緑みのグレイ	258	3.80	2.65	1.30	暗い灰みの青
251	3.80	2.35	1.30	暗い青みの緑	259	3.70	2.20	1.60	灰みのオリーブグリーン
252	3.80	2.45	1.30	グリーン	260	3.90	2.20	1.55	暗い青みの緑
253	3.90	2.30	1.60	グリーン					

らすれば、(B) (C) があてはまる。これは寺村光晴氏が曰玉製作法として未製品資料をもとに指摘しているところである。しかし、カチャ古墳出土の曰玉は径があまりに揃いすぎており、(B) (C) のように原石から1個ずつ割り出せば径は不揃いになるはずである。たとえ「連擦り」を想定したとしても、径の揃った同じ形態のものをつくるのは不可能に近いであろう。したがって、あらかじめ曰玉の径の揃うもの（円柱ないし端面方形の角柱）をつくったのち、1個ずつ割り出し、穿孔すると考える方が妥当であると思われる。しかし現在の白玉未製品資料には中実の円柱ないし方角柱は見当らず、可能性を指摘するにとどめたい。

d. 槙外の玉類

槙外より出土した玉類には勾玉・管玉・ガラス小玉・曰玉があり、合計23個である。材質は、勾玉が緑色凝灰岩、管玉は碧玉、そして白玉は滑石である。

勾玉 勾玉は9個検出した。頭部付近が平坦で、全体にやや扁平な形状を示すが、(7)のみ丸みをもっている。すべて軟質で表面が風化しているものが多いが、表面が残っている部分には光沢があり、丁寧に研磨されていることがうかがえる。

(1) は全長15.80mm、厚さは頭部で3.90mm、胴部で3.70mmを測る。孔はそれぞれ2.00mm、1.60mmで片側穿孔である（図版32-9）。

(2) は全体的にややいびつな形状を呈し、特に頭部は丸味が少ない。全長は13.25mmで、頭部の厚さは3.00mm、胴部でも3.00mmを測る。片面は凹面をなす。孔径は大きく、外側で2.40mm、内側で1.95mmを測る。両面穿孔である。

(3) は全長15.90mmで、頭部で3.50mm、胴部で3.35mmの厚さをもつ。孔は片側から穿たれており、2.00mmと1.85mmを測る。

(4) は片面が平坦で、もう一方の面は孔付近のみ平坦となっている。全長は14.85mm、厚さは頭部で3.65mm、胴部で3.45mmである。孔径は、外側で2.50mmと2.30mm、内側でも1.70mmと大きい。両側から穿孔している。

(5) は全長14.90mm、厚さは頭部で3.15mm、胴部で2.70mmを測る。孔はそれぞれ2.05mm、

1.60mmで両側穿孔である。

(6)は尾部端を欠失しており、現存長16.10mm、頭部で3.65mm、胴部で3.55mmの厚さをもつ。孔は両側から穿たれており、それぞれ1.65mm、1.75mmを測る。

(7)は全長15.80mm、厚さは頭部で3.70mm、胴部で4.00mmを測り、胴部が頭部よりも厚い。また、胴部断面は円に近い形状を呈する。孔は両側穿孔で、それぞれ1.30mm、1.40mmと最も小さい。

(8)も(7)同様頭部よりも胴部が厚く、それぞれ3.00mm、3.40mmの厚さを測る。頭部は扁平で先端部に後をもち、頭部から尾部にむかって徐々に幅が狭くなり、尾部先端はやや尖る。全長は15.25mmである。孔径はそれぞれ1.60mm、1.40mmで、片側から穿孔している。

(9)は全長16.90mmと最も長い。腹部の後が鋸く、胸・背部に研磨痕が認められる。頭部の厚さは4.05mm、胴部は3.60mmである。孔は両側から穿たれており、ともに1.60mmを測る。

全体的に「C」字形を呈するが、そのうちでも「コ」字形に近いものがあり、大きく2種に分かれる。A類は「C」字形で白色をなし、厚みに均等性がないなどやや粗雑なつくりのもので、(2)(4)(5)(7)(8)の5個である。B類は「コ」字形に近い形状で、うすい緑色を呈し、均整のとれた丁寧なつくりのもので、(1)(3)(6)(9)の4個である。

管五 管玉は2個検出したが、どちらも硬質のもので、やわらかい緑色を呈する。

(10)は全長25.45mm、径は上で5.80mm、中央で5.90mm、下で5.75mmを測り、中ぶくらみの形状を示す。側面の両端は研磨の際に研ぎ減らされて、やや丸味をおびている。側面の上端部付近にはゆるやかな棱を数条もち、断面は円に近い多角形を呈する。表面はすべてきれいに研磨されている。孔径は上が3.30mm、下が2.90mmで、両側から穿孔している。

(11)は全長21.80mm、上径5.50mm、下径5.45mmである。断面は円形に近く、側面両端は丸味をおび、表面は光沢があり、きれいに仕上げられている。孔は両側から穿たれており、上で3.15mm、下で2.60mmを測る。

ガラス小玉 ガラス小玉は完形のもの3個と破片2個が出土したが、完形のうち1個は破損が著しく、可能な限り接合し図示した。

(12)は緑みのスカイ色を呈し、径5.00mm、孔径1.25mm、厚さ6.60mmを測る。孔の周囲は丸味をもち、平坦面をなさない。側面の一部を欠失するが、断面はほぼ円形である。

(13)はこい・紫みの青色で、断面は丸味をもった菱形に近い。径は3.90mm～4.90mmをはかる。孔は梢円形で、1.40～1.80mm、厚さは4.65mmである。

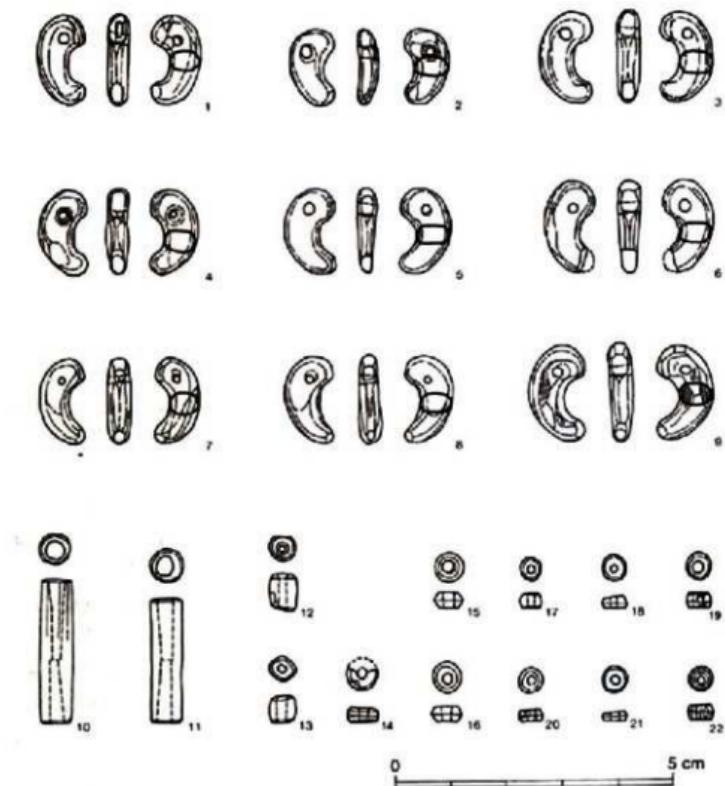
(14)は扁平な円柱形で、側面にはにぶい棱をもつ。径5.50mm、厚さ2.60mm、孔径1.70mmで、孔の周囲はきれいな平面になっている。色調は(13)と同色である。

図示しなかった2片はいずれもつよい青緑色を呈し、径2～3mm、厚さ2mm程度のものである。一方の端に「ぱり」状のものが未調整のまま残存していること、気泡が孔に並行してのびていることから、どちらも管切法によって製作されたものと推定できる。

白玉 棺外より出土した白玉は8個で、すべて滑石を材質とし、形状等から2種に分けられる。A類は径5mm程度で、側面中央が大きく張り出し、明瞭な稜をもち、「ソロバン玉」状を呈する。表面はきれいに研磨され光沢をもつ(15, 16)。B類は径4mm前後で、中央の稜があまり明瞭でなく、表面もやや荒いものである。

(15) (16) はともに明るい灰みの緑色を呈し、上・下面是きれいな平坦面になっている。(15)は径5.00mm、厚さ2.75mm、孔径1.75mmである。(16)は(15)よりやや大きく、径5.15mm、厚さ2.85mm、孔径1.80mmを測る(図版32-10)。

(17) は側面中央の稜ではなく、丸朱をもち、明るい灰みの緑色を呈する。径3.90mm、厚さ2.55mm、孔径1.50mmで、孔の周囲も丸くなっている。



第50図 カチヤ古墳棺外玉類実測図

(18) は扁平で、側面中央にゆるやかな稜をもち、径4.25mm、厚さ2.10mmを測る。孔径は1.30mmで、孔のある両面は平坦になっている。色調は明るい灰みの緑色である。

(19) は灰みの緑色を呈し、径4.35mm、厚さ2.65mmで、側面中央にゆるやかな稜をもつ。側面の両端付近には孔と並行して研磨痕が走り、孔のある面は円に近い多角形になっている。孔径は2.00mmを測る。

(20) は径4.15mm、厚さ2.15mmと扁平で、上面は丸味をおびる。側面中央の稜も目立たない。孔径1.60mmで、灰みのオリーブグリーン色を呈する。

(21) は最も扁平で、径4.20mm、厚さ2.75mmを測る。側面に稜線が認められ、上・下面是平坦であるが、(18) 同様平行でない。色調は明るい灰みの緑色。

(22) は側面中央に稜線があり、両端付近には擦痕が認められる。孔のある下面は平坦であるが、上面は孔の周囲の稜がなく、丸くなっている。径は4.30mm、厚さ2.65mm、孔径1.30mmで灰みのオリーブグリーン色を呈する。

カチヤ古墳からは述べてきたように各種の玉類が出土したが、次にその年代について検討してみることにする。

まず勾玉であるが、棺外より検出した平均長15mmの緑色軟灰岩質の小型勾玉は、大きさや、頭部から剣部が扁平であるという形態からみると、滑石製勾玉に似ている。しかし、厚みがあり、滑石製勾玉の形態からみれば古式である。滑石製勾玉は畿内では4世紀末頃に出現し、5世紀前半にピークをむかえる。また、滑石製勾玉出現以前に、碧玉製腕飾類がその盛行に伴い、良質の碧玉から緑色軟灰岩や珪藻岩製に移行し、質悪となるとすれば、勾玉も量産に伴って緑色軟灰岩製のものが出現した可能性がある。

棺内碧玉製勾玉は「C」字形で、剣部断面が円に近く、頭部から尾部へ徐々に細くなってゆく整美なものである。棺外のものは「C」字形でも「コ」字形に近いものを含む。したがって時期的には中期前半頃におさまるであろう。

ガラス小玉については、その色調が紺と水色の青系統のみである。紺・緑・青緑・黄・赤など色調の多様性を示すものが5世紀後半頃から現れるとすれば、カチヤ古墳のものは中期中葉以前のものとすることができます。

当古墳出土の白玉には、径5mm程度の「ソロバン玉」形の丁寧なつくりのもの(A類)と、径3.8mm程度のやや形のくずれた粗い仕上げのもの(B類)とがある。A類は、奈良県池ノ内5号墳第1棺出土の切子玉A型式および白玉A型式のものに酷似する。大きさの点で約1mmの差があるが、時期的に隔たりのあるものではないと思われる。B類は、奈良県兵家古墳群白玉A類、池ノ内5号墳1号棺白玉C型式(B型式?)および2号棺白玉B型式に相当する。兵家A類では中期前半、池ノ内は4世紀末~5世紀初頭の時期である。

以上をまとめると、勾玉・ガラス小玉・白玉から5世紀前半という時期が与えられ、「ソロ

「パン玉」形の臼玉を重視すれば前半でも初頭に近くなる。

次に棺内と棺外の玉類を比較してみると、「ソロパン玉」形のものは棺内では出土しておらず、棺外の方が若干先行すると思われる。しかし勾玉をみれば、棺内のものが「C」字形で胸部断面が円に近いのに対し、棺外勾玉では「コ」字形に近いものを含み、胸部断面はやや扁平である。したがって、相対的には棺内勾玉が棺外に比べ若干先行する。いずれにせよ4世紀末から5世紀初頭という年代で矛盾はない。

(註1)「玉類の説明」では緑色凝灰岩製としているが、緑色凝灰岩も広義の碧玉として捉えて、このように使用している。将来は明確にしなければならないであろう。

(註2) 調査時には紐の一部を除いてほぼ完形であったと推定されるが、調査段階ではすでに粘土に押されたことなども原因してひび割れを起こしており、粘土とともに取り上げてしまった細片などがあるという状況であった。

(註3) 重量は測定していない。欠損していたのと鏡が非常にもなく現地から直接保存処理に出したため等による。

(註4) X線写真は元興寺文化財研究所で撮影していただいた。なお、X線写真をみても明確に針孔があるとは断定することに躊躇せざるをえない小さな点が見えるにすぎない。今後の良好な資料の増加をまってその当否は再検討が必要とするであろう。

(註5) 高橋美久二・平良泰久「宮の古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1974』) 1974年

(註6) 堀山林雄・小山修三「臼玉の未成品とその製作工程について」(『神坂峠』) 1971年

(註7) 寺村光晴「古代玉作形成史の研究」 1980年

(註8) 今井亮「古墳の副葬遺物」(『考古資料の見方<遺物編>』) 1977年

(註9) 小林行雄「珊瑚」(『統古代の技術』) 1964年

(註10) 菅谷文朗「池ノ内5号墳」(『墳丘・池ノ内古墳群』) 1973年

(註11) 鹤田啓一・伊藤勇輔・植元哲夫・山本彰・一瀬斎男「兵家古墳群」 1978年

なお、玉類の構をなすにあたっては、上書の一瀬斎男氏による玉類の観察を参照した。

付記 奥田氏に玉類の材質の鑑定をお願いしたのが遅く、そのときすでに説稿していた。氏は棺外勾玉の材質を滑石とされており、それに従うべきであるが、考古学的には通常軟質の碧玉ないし緑色凝灰岩と経験的に呼称していたものである。この考古学的手法に基づいて遺物の説明及び編年的位置づけを行っており、あえていま修正する必要がないと考えて修正しなかった。今後この種の石材については、両分野の協業によって修正すべきは修正していく必要があることを痛感している。奥田氏に対して深謝するとともに、末筆ながらこのことをお断りしておきたい。

第5章は公開していません

第5章 特殊遺物の観察

第6章　ま　と　め

カチヤ古墳の調査結果を章を分けて述べてきた。ここでは、この古墳から派生する問題に若干触れてまとめたい。

選地 カチヤ古墳から平野部を望見しうるところはきわめて狭い範囲に限られている。言い換れば、平野部からもこの古墳を望みえるところはきわめて限られていることになる。古墳を造営するとき、その位置の選地については平野部から望見できること、また、古墳からの眺望が重視されているという見解にたてば、カチヤ古墳はきわめて条件の悪いところに選地していると言える。

古墳の位置の視覚性という観点から、穴見川の周辺に形成された平野部を望見でき、平野部からも望みえる適地はこの周辺にいくつか指摘できる。それにもかかわらず、適地を選ばず、条件の悪いところに古墳を選地した理由はどのあたりにあるのだろうか。これについてはいくつかの考え方ができる。

第1に、古墳の性格の差によって古墳の位置の視覚性というイデオロギーに差があるということ、第2に、政治的領域によってその選地が決められるということ、第3に、技術的な問題を含めた労働条件などがあげられる。第3の理由はこの周辺にカチヤ古墳と同じような立地で、同程度の高さの尾根の突端はいくつかあることからして、これが主要な理由にならないであろうことは判る。第2の点は古墳の選地にあたって宿意されたと考えられることは当然であろうから、これも主な理由にならないとするのが妥当であろう。

そのようにみれば、第1の条件が主要因となって、カチヤ古墳の選地は決められたということができる。しかしながら、古墳の性格とは墳形、規模、埋葬施設、副葬品等の内容などから時期を決定し、さらに周辺などの古墳の比較などを通じて考定されるべきものである。いま準備がなく、十分な検討はできないが、カチヤ古墳の選地にあたっては古墳から平野部を眺望でき、平野部から古墳を見ることができるという観念が乏しかったと言える。

墳丘の築成 カチヤ古墳は葺石・埴輪の樹立という造墓技術を採用していない、また盛土によって墳丘を形作ることもない古墳であり、主に地盤を成形することによって古墳を築成している。この手法は弥生時代の台状墓を作る技術とほとんど差はない、その延長線上にある墳丘の築成方法と言える。この周辺の古墳には、出石町・田多地古墳群、豊岡市・北浦古墳群、同・立石古墳群など古墳時代前期・中期から後期の初めまでこのような築成方法を採用している古墳が知られている。そのうち、北浦18号墳は長さ5.75mという狭長な組合式木棺を有し、鏡（小型鏡）を副葬品にもつ古墳である。また、立石105号墳は全長21.5mの造り出しをもつ円墳である。

組合式石棺 カチヤ古墳は墓室内に直接組合式石棺を埋置する埋葬施設であった。この種の

精巧に加工された組合式石棺は稀有な例ではなく、各地にその存在が知られている。

第3章の中では、底石をもたない精巧に加工されたカチャ古墳の石棺をシスト系の組合式石棺と呼称してきた。シスト系の組合式石棺と箱式石棺の分類基準をどのような特徴なり、指標をもって行うかはきわめて困難を伴うことである。いまのところ明確な基準を示されている論巧には接していない。そのような状況の中においても和田晴吾氏は、シスト系の組合式石棺を石材処理技術という視点から、在地の石材を利用して製作された段階のもので、舟形石棺を作る石工技術と密接に結びついたところの所産であろうという見通しを述べている。いずれ、和田氏がそのあたりの基準を明確に示されるのであろうが、いまは接していない。

そこで、カチャ古墳の石棺の特徴を再述することによってそのことに触れてみたい。カチャ古墳の基本的な特徴を列記すれば、以下のように捉えられるであろう。

- (1) 蓋石と棺身の四方の側石からなり、底石を欠いていること。
- (2) 棺身の組み方は長側石の内側に短側石を置く形態であること。
- (3) 蓋石と各側石および長側石と短側石の結合は、いずれも蓋石に溝状の彫り込みがあり、そこに一方を嵌入する手法であること。
- (4) 石棺の内部に腰床と石枕を設けていること。
- (5) 蓋石の下面、各側石の内面、腰床上にはペンガラが塗布されていること。

この石棺におけるこれらの特徴と共通する例を示せば、大分県・潛塚古墳⁽¹⁾、京都府・作り山古墳⁽²⁾、山口県・上小田古墳⁽³⁾、奈良県・塚山古墳などの組合式石棺を挙げることができる。

これらの諸例のなかで箱式石棺との相違を示す具体的な指標といえば、(1)の手法であると言える。

(2)の特徴をこれら諸例の中でみれば、潜塚古墳および作り山古墳の石棺では石枕が設けられていない。なお、潜塚古墳1号石棺は腰床ではなく、石棺内部に粘土を敷きつめ、その上に赤色顔料を塗布された一種の粘土による床を作っている。これら諸例の中でもその有無に差異があることが指摘できる。

弥生時代の墳墓であるが、赤色顔料を塗布された腰床をもつ箱式石棺をみれば、竜野市・白覺山古墳⁽⁴⁾、同・斐久山5号墓⁽⁵⁾、揖保郡揖保川町・梅原山8号墓など兵庫県下に限っても、いくつか指摘することができる。この3例はいずれも石枕を伴ってはいない。すなわち、(2)もシスト系の組合式石棺と箱式石棺を区別する特徴とは成りえない。

- (1)と(2)は箱式石棺においても通有の形態であり、これも両者を区別する指標たりえない。

カチャ古墳の石棺においては認められなかったが、付属施設といるべき副室の存在をこれらの諸例の中でみれば、潜塚古墳2号石棺、作り山古墳石棺、塚山古墳石棺の3例がある。その位置をみれば、潜塚古墳2号石棺はその両短側石外側に付設しているが、あと2例は足部側の短側石の方に付設している。その作り方は作り山古墳の方が丁寧である。

- 和歌山県和歌山市・岩橋千塚17号墳、兵庫県出石郡出石町・田多地3号墳第3号墓等の箱式

石棺においても調室が付設されている。すなわち、調室の有無も両者を分ける基準には成り得ない。

このようにみれば、(4)のみが箱式石棺とシスト系組合式石棺を区別する指標として残ると言える。

このように捉えるならば、シスト系組合式石棺と箱式石棺はその形態において基本的に異なることがなく、そこに蓋石や各側石を結合する手法としての大型石材を加工する技術の導入があって、初めて成立したと言えるだろう。

第16表 シスト系の組合式石棺一覧表

古墳名	石棺	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	材質	床の種類	石枕	赤色顔料	調室
潜原	1号棺	1.7	0.6	0.5	凝灰岩	粘土の床	×	○	×
	2号棺	1.8	0.5	0.4	砂岩	板石の床	×	○	○
上小田		1.5	0.5	0.37	花崗岩	礫床	○	○	×
坂山		1.79	0.63	0.58	墨片岩	礫床	○	○	○
作り山		2.2	0.48	0.36	花崗岩	礫床	×	○	○
カチヤ		1.7	0.45	0.35	流紋岩	礫床	○	○	×

そこで、次にシスト系組合式石棺の諸例の構造とその組み合わさる仕口を個々に検討することによって、箱式石棺との差を明確にしてみたい。

潜原古墳は墳頂平坦面中央に2基の石棺が平行して築かれていた。その先後の関係は1号石棺が先に築かれている。1号石棺は蓋石と身の四方を組み合わせて構成されている。蓋石・各側石は、すべて1枚の凝灰岩の加工された石材からなる。蓋石の内面には、各側石を嵌め込むための溝が彫られており、各側石の上面面の両端は斜めに削り取り、蓋石の溝に嵌入しやすいように加工している。なお、長側石と短側石の組み合わせる方法は報告書では判らない。床には「丹粘土」を敷きつめている。石枕の設置、調室の付設はない。蓋石の裏面・裏面および各側石の内面はベンガラが塗布されている。2号石棺も1号石棺と同様、蓋石・身の四方の側石は1枚の石からなる。その石材は軟弱な砂岩のため風化が著しく、細部の加工は知れないのであるが、蓋石の裏面には溝が彫られている。両短側石の外側に調室を付設している。床は加工された砂岩の1枚を各側石の内側に嵌め込んでおり、板石による床を作成している。ベンガラの塗布は1号石棺と同様に施している。石枕は設けられていない。なお、1号石棺が墓壙内に設置されるまでの構造は、後述するこの種の石棺の諸例とは異なっている。まず、墓壙底に扁平な礫石を並べ、その上に淡赤色を呈する粘土を覆う。次に、石棺を組み立てる。この粘土は粘土床と呼称しても、あながち不适当ではないと考えられる。石棺を設置したのちに、その粘土上に「黄砂土」と記述されているものを置き、さらにその上に「丹粘土」を置く。また、墓壙と石棺の外側の間隔には控え積みに近い手法の礫石を充填している。これらの構造は堅穴式石

室のそれと相通ずるところが看取される。2号石棺の構造も1号石棺の構造と類似する。その簡略化されたものと捉えて良いであろう。

上小田古墳は墳頂平坦面中央より西南によったところで石棺1基が検出されている。石棺は蓋石と四方の側石を組み合わせて構成されている。蓋・各側石は、すべて花崗岩の加工された1枚の石材からなる。蓋石の裏面には各側石を嵌入するための入念な加工が施されている。両長側石に対応する仕口は段状に彫り込まれ、両短側石に対応する仕口は溝状に彫り込んでいる。蓋石外面の長側辺の周縁は斜めに削り落され、その斜面に研磨を施している。長側石と短側石を組み合わせる仕口をみれば、両長側石の内側に溝を彫り、そこに短側石を嵌入する方法^(図5)を探っている。この造作は大阪府柏原市・松岳山古墳石棺の蓋石と側石を組み合わせる手法と類似していると言えるが、その下面の造りは松岳山古墳における石棺の精巧さの比ではない。棺内には襖石を置き、襖床上に川原石を使用した石枕を設置している。石枕は3個の川原石を使用し、長辺を横にした石枕に他の2個の川原石を両側から挟み込むように造作していた。蓋石の下面・各側石の内面には赤色顔料の塗布がなされていた。副室の付設はない。なお、側石上縁から15cm程下には襖石を敷きつめ、襖石上に棺外の遺物がある。また、棺身の四周は赤みがかった粘土によって取り巻かれている状態であった。

塚山古墳は墳頂平坦面中央に2基の石棺が確認されている。そのうち1基の石棺が調査され詳しく述べられている。それによると、石棺は蓋石と身の四方の側石と組み合わせて構成されている。蓋石・各側石はすべて1枚の凝灰片岩からなる。蓋石の下面に沿って溝が彫られている。これは、言うまでもなく、棺身の側石を嵌入するための造作である。蓋石の断面をみれば、両長側辺が削り落とされ、僅かに中央が高い鉢形を呈している。蓋石の大きさは長さ2.3m、幅0.9mである。両長側石の両端にも、短側石を嵌める溝が彫られている。棺内には襖石を充填し、襖床を作りその襖床の上に、石棺の用材と同じ凝灰片岩の石枕を設置している。蓋石の下面および側石の内面には赤色顔料が塗布されている。足部側にあたる北短側石側に副室を付設している。副室内には武具と工具類が納置されていた。副室を開む用材は加工を施さない凝灰片岩を用いている。副室は作り山古墳のように用意周到な計画のもとでなされたものではなく、まさに付設したという表現が的を得ている構造である。なお、石棺・副室の両蓋石の上面には長さ20cm前後の扁平な石材で覆っている。

作り山古墳は墳頂平坦面中央に石棺が安置されていた。この石棺には副室を設けられているが、前述した塚山古墳2号石棺、塚山古墳石棺に付設された副室とはその構造が異なる。すなわち、右長側石は1枚の用材で副室までまかなっている。そこには用意周到なものと、この副室が計画されていたことが窺える。左長側石は同じ規模の用材が手に入らなかったとみえ、2枚の石材からなる。すなわち、棺身の側石と副室の側石を組み合わせており、两者あわせて右側石と対応するようになされている。蓋石も棺身を被せるものと副室を被せるものの2枚の用材からなる。蓋石・各側石とも加工された花崗岩の石材を用いている。各側石の外表面は粗い加

工のままであるが、内面と側石上側面は平滑になるように加工している。蓋石の下面には、各側石と対応するかたちに各側辺に沿って溝が彫り込まれている。副室の蓋石の下面の造作は報告ではよく判らないが、おそらく、棺身の造作と同じような溝が彫られていたものと推測される。棺身の長側石と短側石を組み合わせる工夫をみれば、頭部側における短側石を嵌入する部分の長側石は溝状に彫られ、隔石とも呼称される足部側の短側石は段状に彫り込まれている。副室の短側石と対応するところには、そのような工夫は施されていない。石棺内には厚さ10cm程の礫石が敷かれ、襖床を作っている。その襖床上に石枕の設置はみられない。各側石の合わせ目の中には粘土による目張りが施されている。これは、カチヤ古墳と通じるところである。

以上、カチヤ古墳の石棺と類似するシスト系の組合式石棺の諸例を詳しくみてきた。そこに共通する特徴を列記すれば、次のようなになるであろう。

- (1) 蓋石と棺身の四方の側石は加工された1枚の石材からなり、底石を欠いていること。
- (2) 棺身の組み合わせ方は、長側石の内側に短側石を置く形態であること。
- (3) 蓋石と各側石および長側石と短側石の結合方法は、溝あるいは段状の仕口がなされていること。
- (4) 蓋石・身の四方の側石は基本的に加工を加えた1枚の扁平な大型石材からなること。
- (5) 蓋石の下面、各側石の内面には赤色顔料が塗布され、石棺内部はまさに「朱」に彩られた空間世界を作っていること。
- (6) を除くこれらの特徴はカチヤ古墳の特徴と同じである。カチヤ古墳の蓋石および両長側石は各々2枚の石材からなる。しかしながら、蓋石下面の溝の形状および蓋石、両長側石の部材の合わせ目にならんの仕口を施さず、単に平滑にした面を合わせるという手法は、本来1枚の石材の使用を意図していたが、意図した大型の石材が得られなかつたことによると捉えたい。このように捉えられれば、カチヤ古墳も(4)の条件を満たしていると考えられる。

以上から、(1)～(5)はシスト系の組合式石棺の特徴を示しているといえる。このうちで、箱式石棺との差を明確に表わしている要素は(3)と(4)であろう。前述しているように(3)と(4)は大型石材を加工する技術がなければ不可能なことであり、大型石材処理技術と深く関連するものである。

次に、これら諸例の編年的位置づけを遺物を通してみていくたい。潜塚古墳は銅鏡の型式・鐵鏡の形態などから1号・2号の両石棺は前期後半の中におさまるであろう。なお、1号石棺の三角縁神人竜虎鏡、2号石棺の素面凹帯型式の内行人文鏡はともに鉛鏡である。作り山古墳は新しい型式の碧玉製石鏡や滑石製小玉などから前期末葉前後に比定できる。塚山古墳は三角板鏡短甲、横矧板鏡宿衝角付背などから中期後半に比定できる。上小田古墳は鐵製武器と鐵製工具類のみであり、その時期を比定するのに困難を伴うが、鐵鏡の形態から中期前半までにおさまると考えて良いであろう。カチヤ古墳出土玉類の材質の構成から、前期末から中期初

第17表 シスト系の組合式石棺をもつ古墳の内容

古墳名	所在地	墳形と規模	副葬品	性別	備考
瀬塚古墳	福岡県大牟田市 黄金町1丁目	円墳 約30m	1号棺(棺内) 三角鍔冲入電虎 鏡1、碧玉管玉2 (棺外) 銀鏡1、鐵刀子 2、鐵鏡1、鐵鏡1~2 2号棺(棺内) 内行文鏡片 (分割鏡)1、(棺外) 銀 鏡47、銀鏡先1、鐵鏡1、 鐵斧2、鐵鏡2、鐵製品 破片、土師器蓋2	壮年の 男性	2基の組合 式石棺
上小田古墳	広島県安佐郡高 陽町	円墳 約25m	(棺内) 鉄劍2、鉄刀1、鉄錐 1、鐵斧1、 (棺外) 鉄劍1、鐵斧1		
塚山古墳	奈良県五条市出 屋敷	方墳 約24m	(棺内) 亜角芸鉄劍2、鹿角芸 刀子1、鐵刀子2 (副室) 三角形銀鏡留短甲1、鐵 劍、鐵鏡、鐵鏡1、鐵斧2 鐵鏡2、ノミ17、鐵手 刀子1、鐵石1、土錐 22 (棺外) 鉄鏡2、鐵石突2、鐵 刀1、鐵劍、鐵石、不 明鉄製品	壮年の 男性	鐵鏡の总数 267、他に埋 葬施設1基 あり、葬石 転輪(内輪 転輪、裏輪 転輪他)
作り山古墳	京都府宇治郡加 悦町	溝り出しを もつ円墳 全長 41m、 内部は 径31m	(棺内) 乳頭四歌鏡1、碧玉石 鏡2、碧玉勾玉2、碧 玉管玉35、滑石小玉500 以上 (棺外) 鉄劍12、鐵斧2、鐵錐 1、鐵刀子4、鐵劍1	熟年の 男性	
カチヤ古墳	兵庫県豊岡市三 宅	円墳 約19m	(棺内) 碧玉勾玉2、碧玉管玉 19、滑石臼E239、銀鏡 1、鐵刀子1 (棺外) 银鏡1、碧玉勾玉9 碧玉管玉2、ガラス小 玉5、滑石臼玉8	熟年の 女性	

頗と考えられる。他にも、これに類する資料も存在しているのであるが、筆者の皆見に触れたもののみを掲げた。

まとめとしては不十分なものになってしまった。カチヤ古墳石棺における突起の問題。シスト系組合式石棺の墳形およびその規模からみた性格と舟形石棺や祖型的な長持形石棺との関連、カチヤ古墳と作り山古墳における棺内出土の玉類の構成が石棺と同じく共通していることから提起される問題。瀬戸谷裕氏が精力的に追求されている陰石の開発に果したカチヤ古墳の位置付けとその後の展開の問題。遺物としては針状鉄製品の問題等、準備不足と力量不足から果し得なかった。これらについては、機会をみて別途他日に期したいと考えている。

(註1) 近藤義郎「第3部第1章位置・形態・規模」(『月の輪古墳』) 1969年

原口正三・西谷正「弁天山C1号墳」(『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17編)

1967年

- (註2) 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓一體化遺跡をめぐって」(『岡山大学法文学部学術紀要』第37号)
1977年
- (註3) 兵庫県教育委員会・小川良太氏に教示
- (註4) 関戸谷啓『兵庫県豊岡市・北浦古墳群』 1980年
- (註5) 関戸谷啓『豊岡市立石古墳群発掘調査報告』(『兵庫県埋蔵文化財調査報告第4集』) 1979年
- (註6) シスト系組合式石棺の相違を扱ったものではないが、両者の副室を付設した古墳を論じたものには次の論考がある。
- 上田三平「組合せ石棺の特種構造に就て」(『考古学雑誌』第31巻第11号) 1941年
- 北野耕平「福山古墳石室構造に関する考察」(『奈良県埋蔵文化財調査報告』第1集) 1957年
- (註7) 和田晴吾「巣内の家形石棺」(『史林』第59巻第3号) 1976年
- (註8) 渡辺正気『瀬谷古墳』 1975年
- (註9) 楠原末治「桑飼村蛭子山・作り山古墳の調査(下)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14編) 1933年
『加悦町文化財シリーズ』 1982年
- (註10) 本村豪平「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」(『広島考古研究』第2号) 1960年
- (註11) 伊達宗憲「福山古墳」(『奈良県埋蔵文化財調査報告』第1集) 1957年
- (註12) 松本正信「第2章 考古学からみた鬼野」(『鬼野市史』) 1978年
- (註13) 是用長・松本正信・加藤史郎『斐久山』 1967年
- (註14) 田沢金吾「岩鍋千塚第1期調査」(『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1編) 1921年
- (註15) 小林行雄「河内岳山古墳の調査」(『大阪府文化財調査報告書』第5編) 1957年

V おわりに

調査の協議のために半坂峠を訪れたのは一昨年の梅雨になろうかとする時であった。雜木林となっており草木が繁茂して古墳の形状を判断するのもとまどわれた。しかし、現在半坂峠へ行ってみると工事中だが斜度の緩いて2車線の道路が通ろうとしている。南尾根も勾配をつけた崖面を呈している。その犠牲となった古墳の調査記録を公刊するのは原団者ならびに調査を実施した行政機関としては責務である。半坂峠古墳群・カチヤ古墳の記録をここに刊行することが出来たが、これが全てではないはずである。これを契機に古墳群の新しい面が引き出されれば僅かながらも心が安まる。破壊された古墳への自責の念も柔らぐであろう。

カチヤ古墳については、関係諸機関の御理解によって保存されることになった。埋め戻しを行ない復原された。残された喜びとともに今後も保存活用されることを望むものである。

調査を円滑に進められたのは、残暑の厳しい頃から霜が立ち積雪に見舞われる長期間にわたって作業して戴いた方々の努力のたまものであろうと思う。また、支障なく調査が実施出来るよう進めて戴いた豊岡土木事務所・県教育委員会の担当の方々の協力によるものである。始終作業を支えて戴いた松田土木の山崎氏をはじめ関係者に謝意を表したい。深夜遅くまで現地説明会資料作成や実測の労苦を共にした補助員の諸君や整理作業に入つてから毎晩協力戴いた方々の助力があって本報告が仕上ったことを明記して半坂峠古墳群・カチヤ古墳が但馬の歴史において考究されるように願いたい。

付載 三宅オヤシキ1号墳の測量調査

1. 位置と立地

本墳はオヤシキ1号墳と呼称され、穴見川と六方川の分岐点より穴見川に沿って北上すること約3km、今回調査の半坂峠より見て北東約1.5km、豊岡市三宅字オヤシキに所在する。

穴見川は、奥野より香住までの約5km間两岸を標高200m前後の山塊にかこまれ、幅約300m～500m前後の谷地形一穴見谷をつくっている。本墳は、穴見川の東岸山裾に位置している。

本墳の立地は、法沢山（標高643.5m）の北西の一枝峰（標高302.9m）から北西にのびる尾根の西斜面山裾にあたり、尾根の急斜面が山裾で一度平坦になり、再び穴見川へ向って落ちかかる。その平坦面に築かれている。

平坦面から穴見川の氾濫原までの落差は3m前後あり、穴見川の氾濫によって急傾斜に削られている。

北側に同様の墳丘規模をもつ円墳が存在しているが両古墳の周辺は本墳の南側を除いてほとんど人為的な改変を受けておらず、尾根上からの流土、穴見川の氾濫による河原石を含む堆積土が比較的厚くのっている状態である。

2. 外形

現状では、開口部前面（墳丘南側）が耕作地の為の植樹に際して旧地形の傾斜面が若干削平される改変を受けているが、本墳の東、西、北側については自然環境の漸進的な改変以外は受けていない。この為、狭門部を含む周辺が一部崩れている他は墳丘は比較的残りがよい。径約10m～15mの円墳である。墳丘高は約3m。

北隣にある円墳（2号墳）が墳丘盛土に多量の河原石を混え、土と石の混合による一種の積石塚の型をなしているのに対して、本墳においては、河原石は使用していない。

3. 内部構造

本墳の内部構造は、南面に開口する横穴式石室である。石室は胴張りを持つ無袖式横穴式石室であると考えられる。

今回は発掘調査を行っておらず、実測はすべて床面堆積土上面より上について行った。現状では、開口部より土砂が流入しており石室中央部では角礫を含む土砂が10cm前後は堆積していると推測される。狭門部の天井及び側壁の用材を一部欠失しており狭門部方向に近づくにつれて堆積は厚い。

石室の規模は以下の通りである。

石室現存長約6.30m。奥壁部での幅1.92m。石室中央部幅（胴張り最大部）2.60m。開口部付近で1.90m。高さは堆積土表面より奥壁部で1.75m。中央部で1.65m。開口部付近で1.0mを測る。壁面は自然石（主として花崗岩）もしくは自然石の半裁面を使用している。

石室の平面プランは計測値からもわかる通り胴張りを呈している。舟形に近い形の無袖式石室である。平面プランで見る限り石室の前半部—奥壁より約3.5mの部分—で両側壁の基底石

の並ぶ方向が変わり、開口部へむけて石室の幅が板端にせばまっていくことが指摘できる。基底石の方向が変化する部分は、無袖式石室でありながら袖の意識をもっているのであろう。

平面プランにおいて特徴としてあげられる今一つの点は、右側壁の奥壁際の基底石の使い方にあって、奥壁と右側壁の基底石が共用されている為に右側壁と奥壁とのコーナーが直角にならない点である。

以下は、壁体構築について述べる。

奥壁の構造は主軸を境に左右2グループにわけられる。左側壁には、幅約1m、高さ約1.8m以上の立石が使用されており、上面に若干の割石をのせるのみで天井石をのせている。これに対して、右側壁は幅0.5m、高さ0.3m～0.4m、長さ約1.0mの石を横置3段にのせて、更に5段目には縦0.3m、横0.4mと縦0.3m、横0.7mの2個の石をのせその上に天井石をのせている。

右側壁最奥の基底石は平面プランの項でも述べた様に、奥壁側へむかって斜めに据えられており奥壁、側壁の両方の基底石として使用されている。この場合、1段目の縦おき石と右側壁の基底石の両方にのっており、右側壁第1段目の基底石をおいた後奥壁2段目はのせられていたことがわかる。3段目、4段目もまた右側壁とかみ合う様に積まれており、奥壁右半分と右側壁に接する整体は交互に積まれていることが明瞭に観察できる。奥壁3段目と4段目の間の割石は、4段目上面レベルを交互に積む右側壁とあわせる為の配慮であろう。

次に、左・右側壁について述べる。

左側壁は4段。右側壁は3～4段積みで構成されている。外見上の特徴として指摘できる点は2点ある。1点は持ち送りが顕著であること。2段目より行なわれ奥壁際では右側壁では1.65m、左側壁では1.71mを測る。2点目は、左右の側壁の構成が非常に異っている点である。

左側壁は、基底石と考えられる最下段（1段目）から天井石をのせる4段目に至るまで1段づつが比較的規則正しくレベルを合わせて並べられている。奥壁との組み方は、左側壁では奥



第52図 三宅オヤシキ1号墳開口部

壁の外側より積んでいる。

これに対して右側壁においては、全体として積み方が複雑で、石室前半部において石の積み方が不規則になっている。

左右側壁を比較した場合、石室後半部の用材の使い方は酷似しており、左右側壁の構成が同一を意図したものであったことが推測できる。左側壁が右側壁に対して整然と積まれている事実は、左側壁が右側壁に優先して構築されたことを示すものであろう。

天井石は、奥壁より3枚残っている。後門部が破壊されていることから見て、あと1枚もしくは2枚存在していたと考えられる。

4. まとめにかえて

今回調査を行ったのはオヤシキ1号墳1基のみであるが、本墳の周辺には10基の古墳が存在したと考えられる。

本墳の南方の小尾根、谷間に分布調査によって9基の古墳が知られている。また、本墳の所在する西斜面にも数基の古墳が存在していたことが推測され、数基にわかれても小規模な群集墳を形成していたと考えられる。崩壊したそのうちの1基から出土したと伝えられる須恵器有蓋高杯身が土地所有者の栗原氏宅に伝っているが、TK 209型式平行で6世紀末の年代を示している。

オヤシキ1号墳自体の築造時期は、遺物の出土がない為不明であるが、群集墳中の1基とを考えた場合、6世紀後半から末にかけての時期が推定できよう。

本墳の内部構造での特徴的な点として、胴張りプランであること、持ち送りを行っていること、奥壁と側壁の基底石を共用していること、後道部にあたる部分の幅が急激にせまくなることなどをあげてきた。同タイプの石室例は、現在のところ円山川下流域には認められない。

円山川下流域のなかでも豊岡市周辺では、初期群集墳といわれる主として尾根筋に築かれた木棺直葬墓群の分布は顯著であるが、後期群集墳の数は比較的少ないと考えられており、石室構造もまた、穴見谷及びその周辺ではほとんど知られていない。

円山川流域では、中流域の大蔵古墳群、下流域では二見谷古墳などで、横穴式石室の発掘、実測調査が行なわれてきているが、これらは、いずれもオーソドックスな両袖式石室を主体としており、オヤシキ1号墳の類例をそのなかに見ることはできない。オヤシキ1号墳と同タイプ、または、類似する構築方法をもつ石室を周辺にもとめた場合、丹後地方にいくつかあげられる。

京都府野田川町堂谷のコウモリ塚古墳は無袖式石室で、胴張り及び奥壁と側壁の基底石を共用しており、きわめてオヤシキ1号墳と近い形態をもっている。

奥壁と側壁の基底石を共用する構築方法は、野田川町大石2号墳、加悦町入谷11・14号墳においても行なわれており、野田川町周辺で主として見ることができる。

後道部方向へいくにしたがって急激に石室幅が狭くなる例については、網野町相谷古墳、岡^(註7)
1号墳などで同様のことが行なわれており、類例としてあげられよう。

以上、簡単に類例をあげてきた。オヤシキ 1号墳の石室構築方法は、円山川流域よりも丹後地方、特に野田川、加悦町周辺とのつながりが考えられよう。野田川、加悦町とオヤシキ古墳群との距離は、直線距離にして約20kmで、間に高龜寺岳（標高697m）東里山（標高664m）をはさんでいるが、比較的近い距離にあるともいえよう。

オヤシキ 1号墳のもつ構築技術が、群集墳の造営主体の性格を示しているものか、あるいは、丹後地方特に野田川、加悦町周辺での構築技術が、単に技術として円山川東岸にまで流れこんでいるかは、現在のところ、群集墳の資料状況が今一つ明確な為に言及できないが、円山川東岸域の分析を重ねることによって明確にされうる問題であろう。

（註1）『豊岡市の埋蔵文化財一分布地図と地名表一』 豊岡市文化財調査報告書第10集

1980年 豊岡市教育委員会

（註2）『但馬・大阪古墳群一北兵庫における大型群集墳一』

1978年 龍父町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会

（註3）『二見谷古墳群一但馬における家屋石棺を内蔵する古墳の調査』

1975年 城崎町教育委員会

（註4）兵庫県教育委員会 山下史朗氏の御教示。

（註5）『野田川町岩屋地区踏査記録略報』同志社大学考古学研究会 1980年

（註6）佐藤晃一「加悦町入谷15号墳について」『太陽考古第2号』 1982年 両丹技師の会

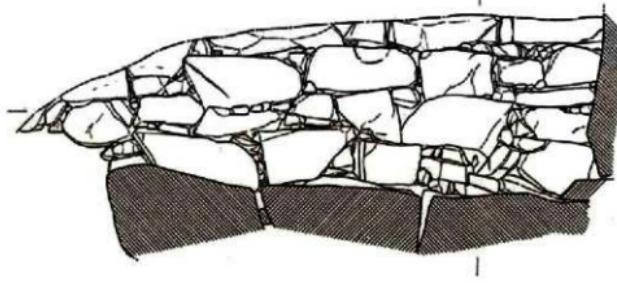
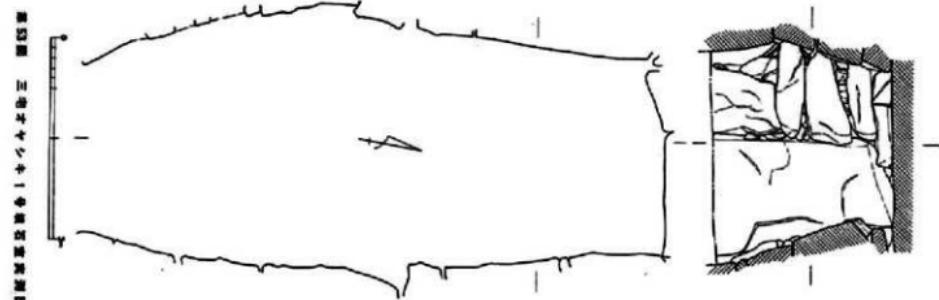
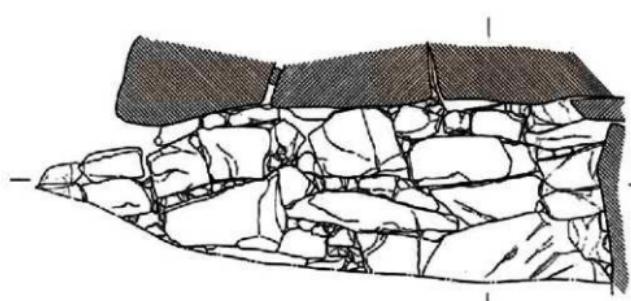
『野田川流域分布調査概報第1集』 1973年 同志社大学考古学研究会

『 同 3集』 1975年

『 同 10集』 1979年

（註7）駅 龍雄『相谷古墳発掘調査報告』 1962年

（註8）樋口隆康「網野町の三古墳」『京都府文化財調査報告第22冊』 1961年



図版1 半坂峠古墳群



北西上空から見た半坂峠古墳群



上空から見た半坂峠古墳群

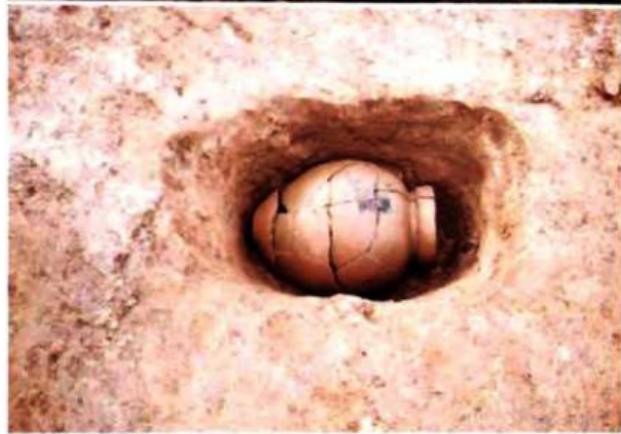
图版2 半坡岭古墓群 两尾根支群1号墓



全景



1号棺

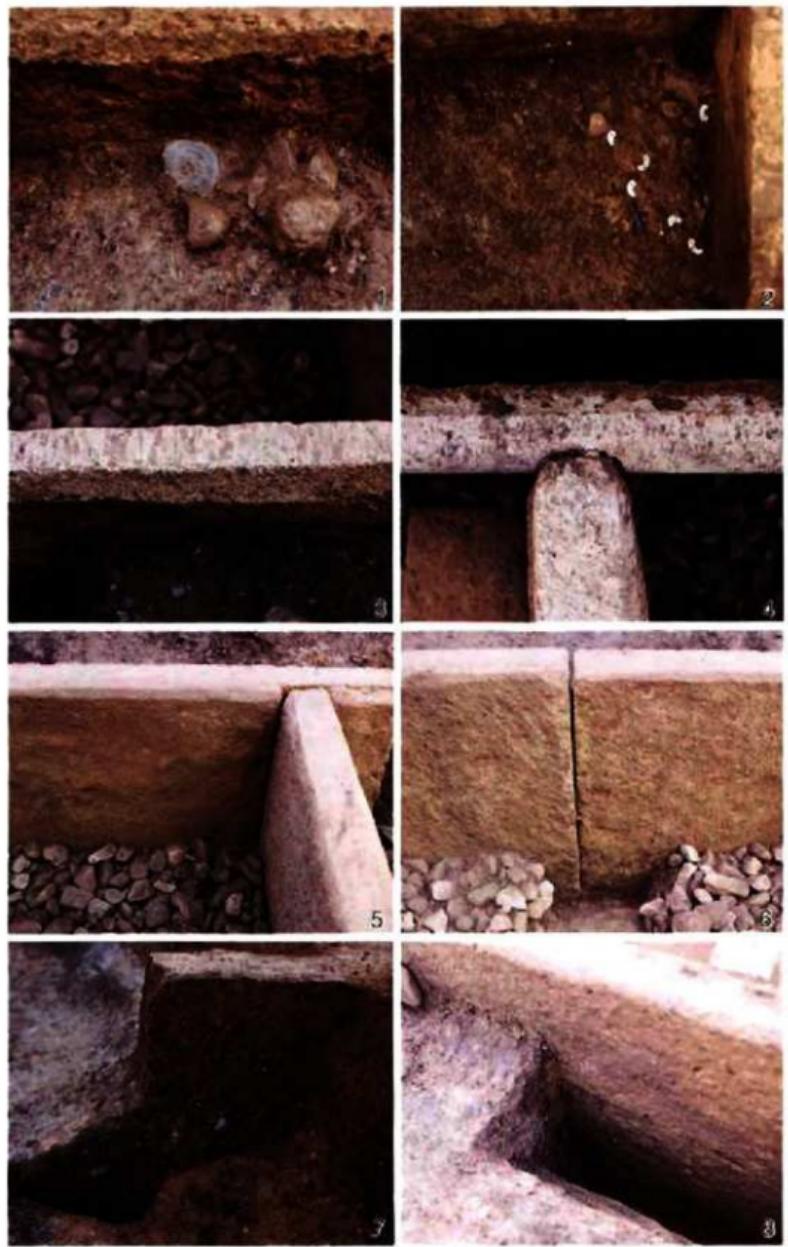


3号棺

図版3 力子ヤ古墳 埋葬施設(1)



(上) 石棺身全景 (下) 棺内遺物出土状態



1. 棺外鏡 2. 棺外玉項 3. 長側石上端部 4. 西長側石と西近側石の嵌入部
5. 北長側石の内面 6. 北長側石の両部材の合わせ目 7. 墓塚内埋土のⅢ層とⅣ層の関係
8. 北長側石外面破れ口接合面の粘土の日張



航空写真 真上空から見た古墳群



航空写真



航空写真 北尾根支群



遠景



遠景

圖版 8 半坂峠古墳群 南尾根支群



調査前



調査終了後

圖版 9 半坂峯古墳群
南尾根支群 1 号墳



全 景



1号棺 全景



1号棺 侧面写真



1号棺 棺盖除去後



2号棺 全景



2号棺 侧面写真

圖版 12
半坡鮮古墳群
南尾根支群 1 号墳

3 号棺 蔊殼



3 号棺 下部蓋除去後

3 号棺 上部蓋除去後



3 号棺 全景





3号棺 検出状況



3号棺 棺の側面写真



4号棺 蓋の落ち込み状況



4号棺 全景



1号棺 棺身



1号棺 棺蓋



2号棺 棺身



2号棺 棺蓋



3号棺



4号棺



3号棺の成形技法



第1主体



第2主体



10~13地点



1~9地点



西方から見た墳丘



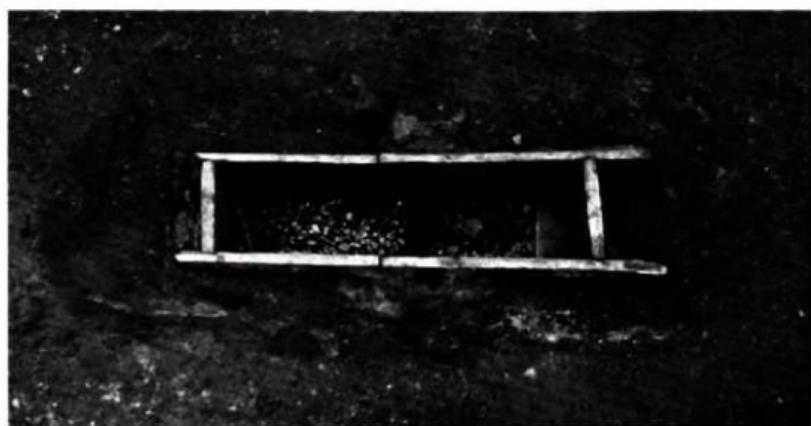
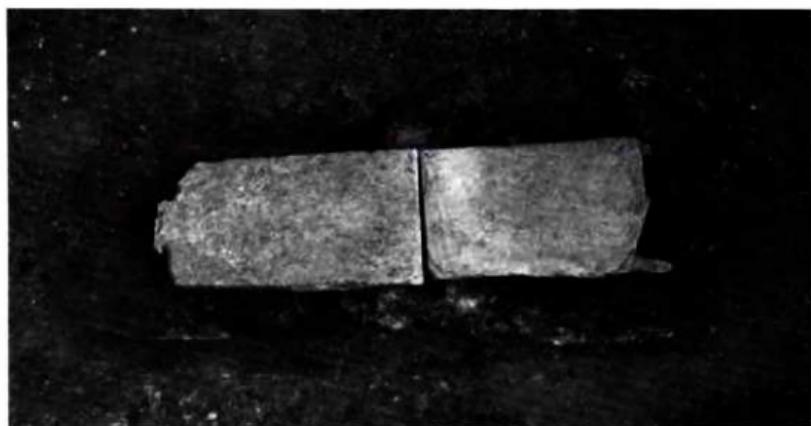
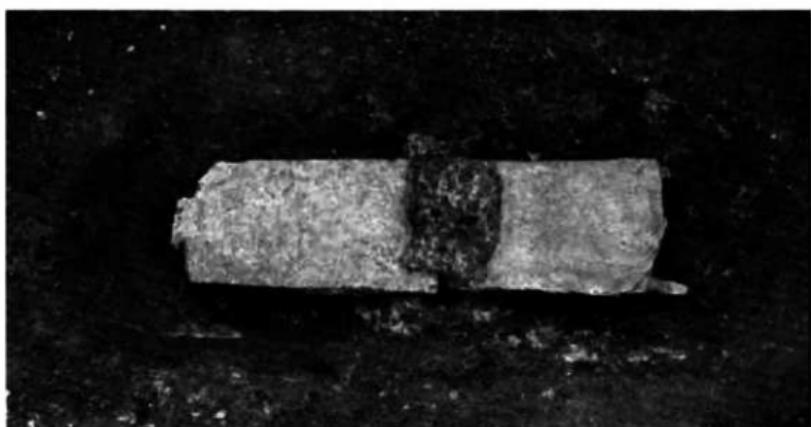
墓塚の断面



墓槨と石棺



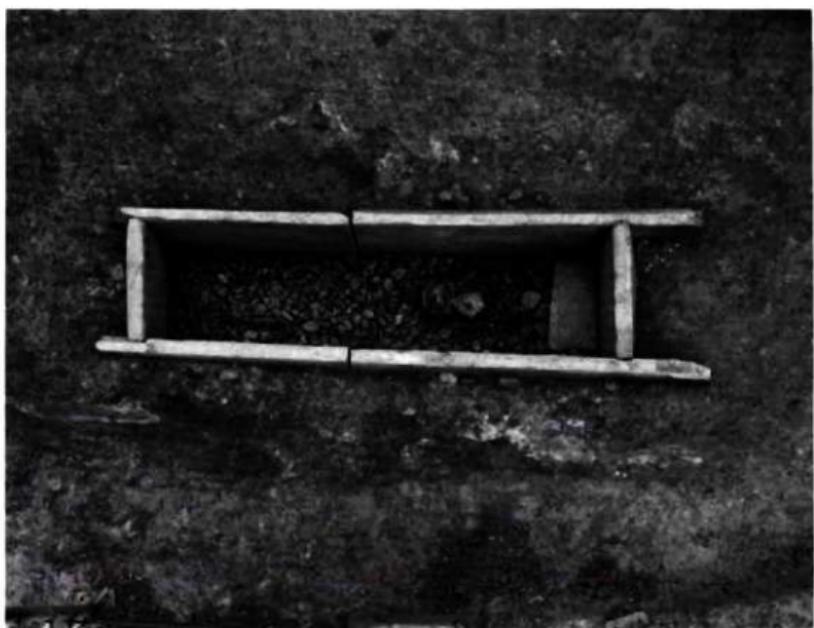
墓槨と石棺（蓋石除去後）



(上) 蓋石

(中) 粘土の日張除去後

(下) 蓋石除去後



北から見た石棺身



石棺身の構造



(上) 南から見た石棺蓋石

(下) 東から見た石棺身(蓋石除去直後)



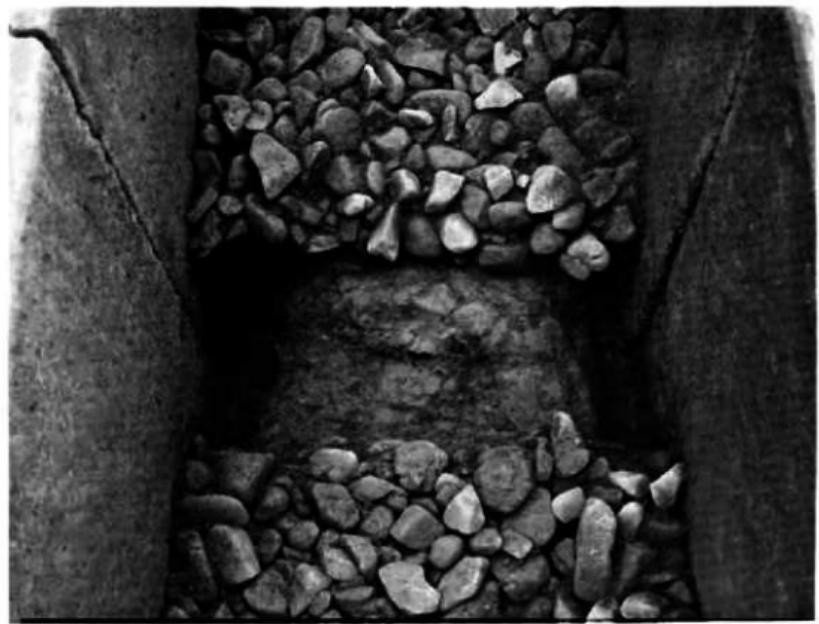
長側石西端部の状況



西短側石外側の隙と粘土の状態



東短便石外側の壁の状態



碑床の断面



西短側石外側の疊と粘土の断面



棺内の石枕と東半部の遺物出土状態



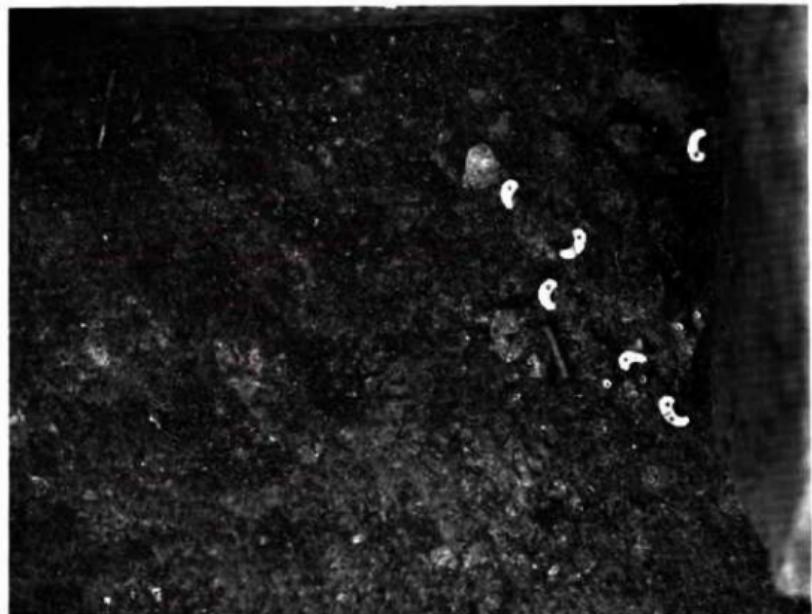
頭骨と玉類・刀子の出土状態（棺内）



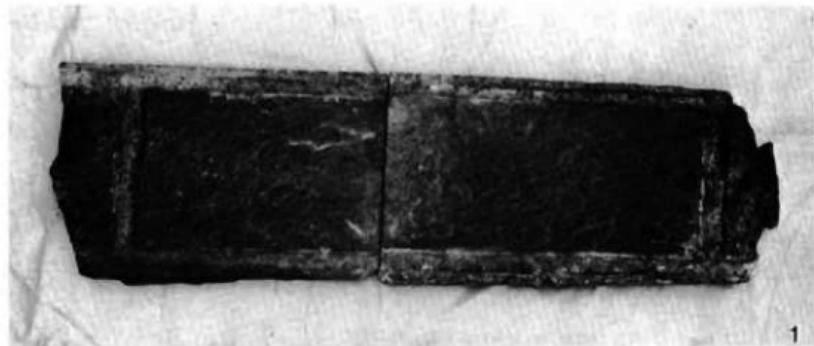
鉄剣の出土状態（棺内）



鏡の出土状態（棺外）



勾玉・管玉と針状鉄製品の出土状態（棺外）



1



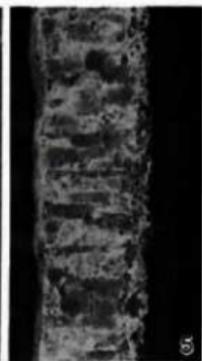
2



3

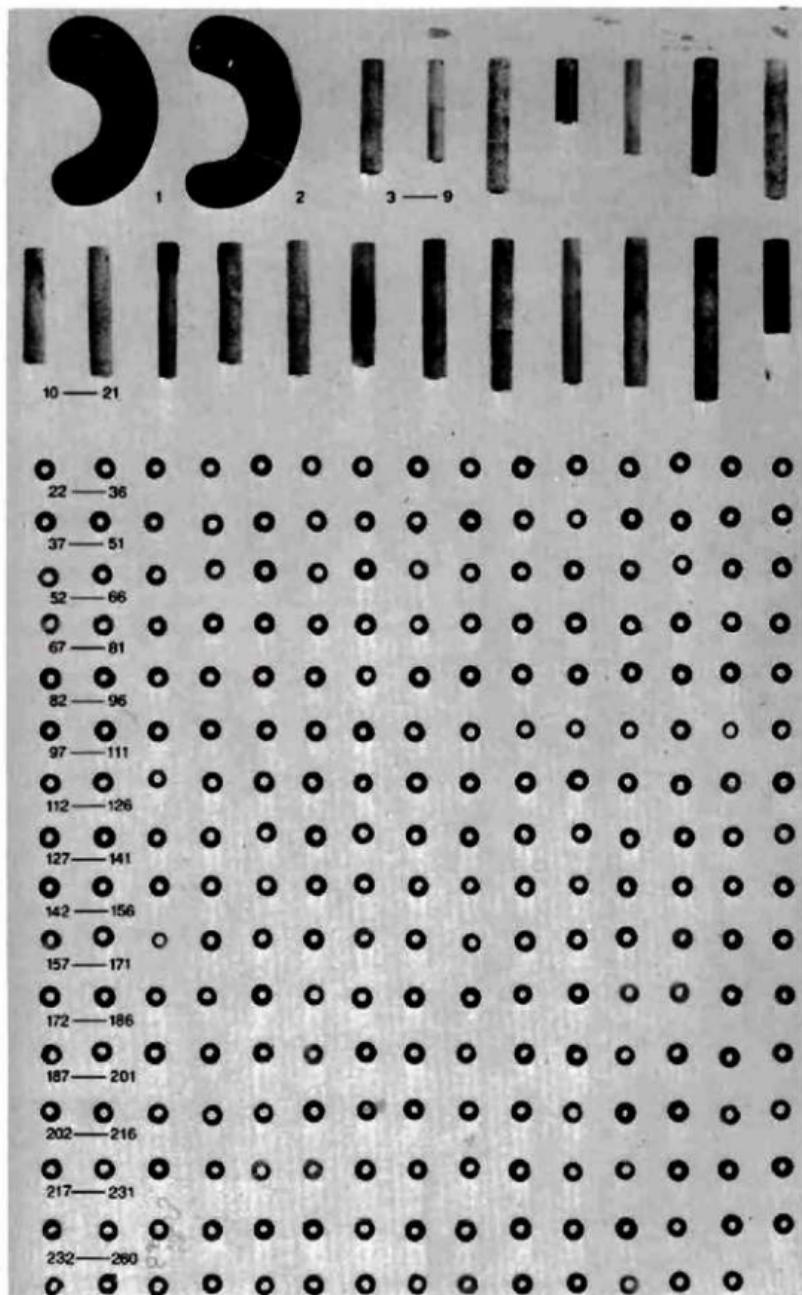


4

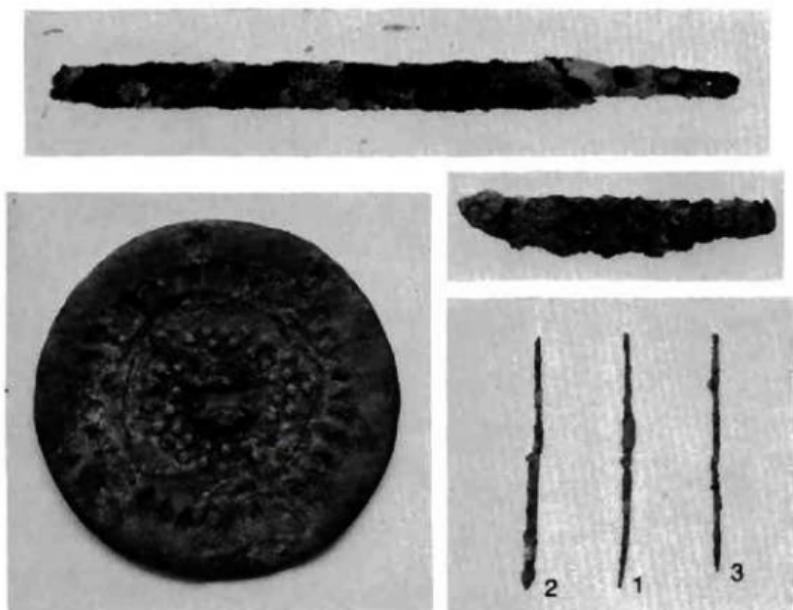


5

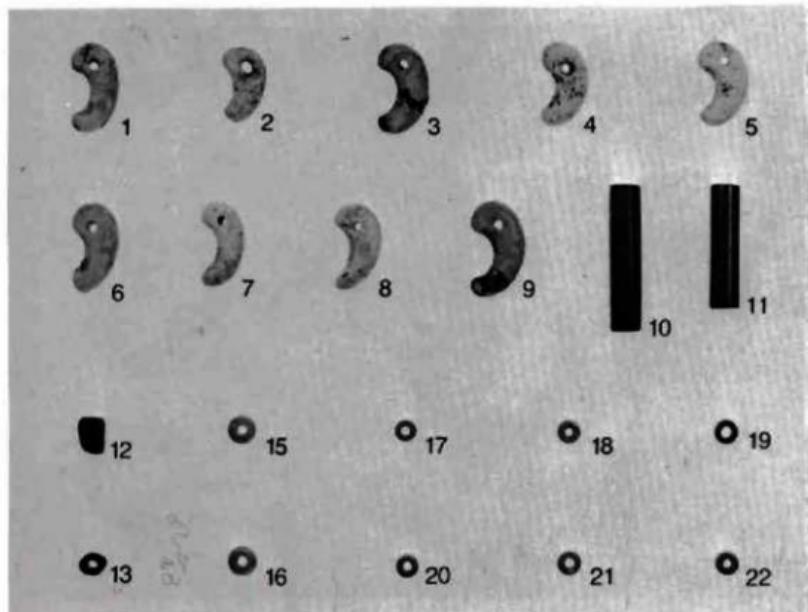
1. 蓋石裏面 2. 東蓋石裏面の細部 3. 西長側石と西短側石の嵌入部
4. 西短側石外面の整形痕 5. 長側石上端部の整形痕



棺内出土玉類（勾玉・管玉・白玉）



鏡と鉄製品（鐵劍・鐵刀子・針状鐵製品）



棺外出土玉類（勾玉・管玉・ガラス小玉・白玉）



1



2



3



4



5



7



8



6

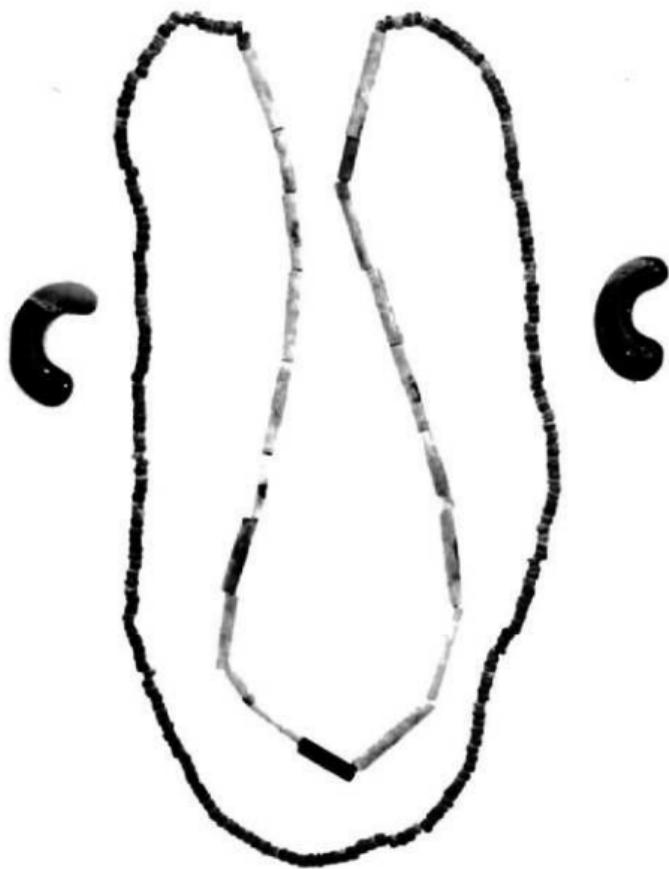


9



10

玉類大写真（勾玉3倍、他は6倍）



棺内類飾の想定着装状態



外 形



石 室

兵庫県豊岡市

辻遺跡の調査

1983. 3

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は昭和56年度県道竹野森本日高線拡幅に伴う豊岡市辻字前田に所在する辻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は豊岡土木事務所の依頼によって兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が担当した。
3. 調査は昭和56年10月26日～29日、12月9日の5日間実施した。
4. トレンチの実測・写真撮影は和田長治・山口卓也・渡辺昇が行なった。
5. 遺物の実測・浄字は、石器については山口が行ない、土器については赤松千恵子・出田敬子の協力を得て渡辺が行なった。断面図の傾きや上下逆などの誤りは渡辺にある。
6. 執筆は目次の通りで、渡辺が編集した。
7. 報告書刊行に際して今まで採集された遺物を掲載した。
8. 石器の撮影は森昭氏にお願いした。撮影の準備に際して岸本一宏氏の協力を得た。
9. 採集資料をお借りし報告を許された豊岡市立郷土資料館をはじめ、岡谷正一・猪師利雄・坪多正裕の各氏に謝意を表します。

本文目次

例　　言

Iはじめに	渡辺	(1)
1. 調査に至る経過		
2. 調査の体制		
3. 調査日誌抄		
I　遺跡の位置	渡辺	(2)
II　調査結果	渡辺	(3)
IV　辻遺跡出土採集遺物		
1. はじめに	渡辺	(6)
2. 土器	和田	(7)
3. 石器	山口	(15)
V　おわりに	渡辺	(41)

挿図目次

第 1 図	辻遺跡の位置	(3)
第 2 図	調査地近景	(3)
第 3 図	調査地平面図	(4)
第 4 図	第 5・7 トレンチ土層断面図	(5)
第 5 図	第 5 トレンチ全景	(5)
第 6 図	竹野町森本出土石棒	(5)
第 7 図	辻遺跡分布調査結果(福田・矢谷古墳群原図に加筆)	(6)
第 8 図	縄文土器(1)	(7)
第 9 図	" (2)	(8)
第 10 図	" (3)	(10)
第 11 図	" (4)	(11)
第 12 図	" (5)	(12)
第 13 図	" (6) (岡谷正一氏蔵)	(13)
第 14 図	" (7) (豊岡市立郷土資料館蔵)	(14)
第 15 図	石器実測図(1)	(17)
第 16 図	" (2)	(18)
第 17 図	" (3)	(19)
第 18 図	" (4)	(20)
第 19 図	" (5)	(21)
第 20 図	" (6)	(22)
第 21 図	" (7)	(23)
第 22 図	" (8)	(24)
第 23 図	" (9)	(27)
第 24 図	" (10)	(28)
第 25 図	" (11)	(29)
第 26 図	" (12)	(32)
第 27 図	" (13)	(33)
第 28 図	" (14)	(34)
第 29 図	" (15)	(35)
第 30 図	" (16)	(36)
第 31 図	" (17)	(37)

第 32 図	石器実測図	38
第 33 図	〃	39
第 34 図	〃	40
第 35 図	〃	41

表 目 次

第 1 表	採集石器一覧表	31
-------	---------	----

図 版 目 次

図 版 1	(上)辻遺跡並びに調査地遠景 (下)辻遺跡近景
図 版 2	(上)調査地全景 (下)7トレンチ南壁
図 版 3	縄文土器
図 版 4	石 器 (1) (2)
図 版 5	石 器 (3) (4)
図 版 6	石 器 (5) (6)
図 版 7	石 器 (7) (8)
図 版 8	石 器 (9) (10)
図 版 9	石 器 (11) (12)

兵庫県行政区画図



豊岡市の位置

I はじめに

1. 調査に至る経過

奈佐川沿いに南北に通る県道福田辻線は年々改良され道幅が増し整備されつつある。しかし豊岡市辻まではともかく日高町へ向う路線は、道幅も狭く車の離合にも不便を生じている。そのため豊岡土木事務所によって、土地内のT字路部分の拡幅が計画された。最大幅5mと表す範囲ではあるが、当地が豊岡市において屈指の縄文遺跡である辻遺跡の周縁部にあたるため県教育委員会と協議がなされた。協議の結果、遺跡の広がりが予想されるので昭和56年度の確認調査を実施することに決まった。遺跡の広がりを確認した場合、次年度に全面調査を行なうこととし、急を要さないが年度内に確認調査だけ実施することにした。豊岡土木事務所の関係で半坂峠古墳群に兵庫県教育委員会の職員2名が調査に入っていたので、調査期間内で辻遺跡の確認調査を行なうこととした。9月以降現地立合い・協議を行なったのち10月26日から調査を開始した。1枚の畑で大根が栽培されていたので、収穫を持って12月9日8時レンチだけ発掘調査を連れて実施した。

2. 調査の体制

兵庫県教育委員会を調査主体とし、下記の体制で調査を実施した。調査事務は昭和56年度の体制で半坂峠古墳群と同じである。

調査担当者 山本三郎（社会教育・文化財課主任）

被渡一昇（社会教育・文化財課技術職員）

調査員 和田長治（但馬考古学研究会会长）

山口卓也（関西大学大学院文学研究科）

調査協力

・辻区長岡谷正一氏をはじめ辻地区の方々

・松田土木山崎叶氏をはじめ三宅と辻の間の送達をお願いした松田土木の関係者

・豊岡土木事務所

・揖保川町文化センター

3. 調査日誌抄

- 9月10日（木）曇り時々晴れ
豊岡市木事務所山本氏と県教育委員会福・小川
・渡辺現場にて協議。調査日程や方法検討。試掘
調査を実施することにし、トレンチを10本前後入
れる予定。
- 10月26日（月）晴れ
和田・山口・渡辺の3名現地で合流し、トレン
チ設定箇所の検討。周辺分布調査。一部大根が植
えられている畑は見送ることにする。
- 10月27日（火）晴れ
本格的調査開始。1～5トレンチ設定。1トレン
チから掘り始める。黒色土層を除去するとすぐ
地山となる。隨時写真撮影。
- 10月28日（水）晴れ
6～8トレンチ設定し調査開始。7トレンチで
土器小片数片出土するが確認している。地山に黒
色土を埋土とする浅いビット（落ち込み）挿出し
たが人工的とは思われない。土層断面を固定化・標
記した顛に埋め戻し実施。
- 10月29日（木）雨のち曇り
実測しトレンチを平面図に記入する。埋め戻し
も行ない一時調査を終える。大根収穫後に1～2
ヶ所追加する。
- 12月9日（水）曇り時々雨
大根畠に9トレンチ設定し調査するが1・8ト
レンチと同じ状況。記録を取り埋め戻しを行ない
今回の調査は終了。整理作業に入る。
- 整理作業は遺物を兵庫県教育委員会へ運んでから
間時実施した。石器は山口が、土器を渡辺が相
当して行なった。各人の作業の合い間を抜いて無
理な作業を行なったかもしれない。土器の拓本に
關しては大半が赤松千恵子・出田教子両氏の手に
よるものである。また石器の写真撮影については
森昭氏の手を頼った。

I 遺跡の位置

辻遺跡は豊岡市辻字前田に所在する。豊岡市ひいては但馬を代表する縄文時代の一遺跡であ
る。奈佐川によって形成された細長い谷の奥に立地している。奈佐川は円山川の支流の一つと
して豊岡市南西部から北東へ向けて流れている。奈佐川は豊岡と竹野の境界及び豊岡と日高の
境界付近を源として流れ始める水を辻で合わせて北東へ流している。豊岡との境界から流れ出
る川と言つてよく北但層群を削りながら狭長な谷を形成している。基盤層は、北但層群中の豊
岡層群下層の辻隕岩層で当遺跡周辺はその標式的な岩相を示している。奈佐川は、宮井・岩井
からの小河川を合流してから川幅とともに谷幅も広げ始める。城崎町との市境である森津で円
山川に合流する全長9km余の川である。

谷平野の見られる最深部に辻は所在する。標高40m前後の緩い傾斜面を呈する地形で、地目
は水田・畑である。山陰本線豊岡駅とは6.4kmと数字では余り離れた感覚がないが、実際には

奥深く入り込んでいることがわかる。

奈佐谷の入口である福田・橋江は以前から古墳が存在することが知られていたが、他には辻遺跡だけが顯著な遺跡であった。近時農業基盤整備（圃場整備）を契機として遺跡が増加しつつある。宮井の条里遺構の調査が行なわれてから注意を促したが、確実な遺構検出例はない。宮井・内町で縄文時代の遺物が採集されている点は興味深い。辻遺跡の次の時期に相当するもので、低い方へ生活を移したのだろうか。中谷貝塚などの比較とともに大きな意味を有しているようである。



第1図 辻遺跡の位置

III 調査結果

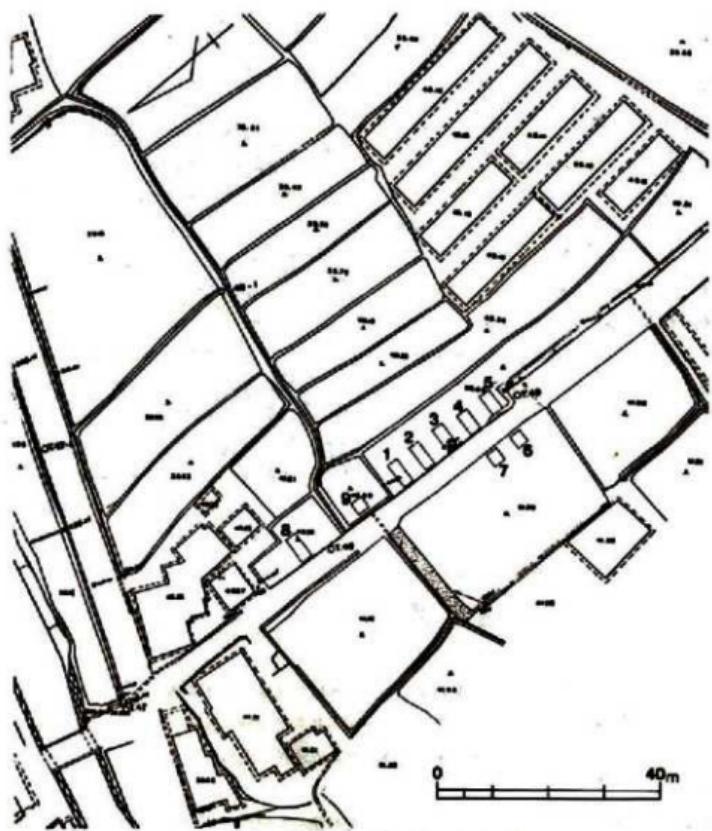
県道拡幅部分に9本のトレンチを設定した。2m幅を基準とし拡張幅に合せて長さは変わっている。6・7・9トレンチは2mで1トレンチが最長で5mの長さである。県道の主軸に直交してトレンチを設定した。田畠は来年も使うため埋め戻しを行なうように耕土を別にして堆土を置いた。

9本のトレンチの結果、基本的な層序は同じだが僅かな地形の変化は看取できた。9本とも堆積状況は同じで、地山である黄色砂質土の上に黒色土層が堆積しており、その上に農作物を植えるため水田に比べて畑は厚く耕作土がある。ただ、黒色土層はトレンチによって、またトレンチ内においても幾つか変化を持っている。基本的には1層であるが、疊の多少や粘性の強弱などがある。急激な変化はなく緩やかに堆積したものと思われる。

地山も上層の黒色土層に伴って変化している。疊の多い所は地山も平坦でなく凹凸が激しく



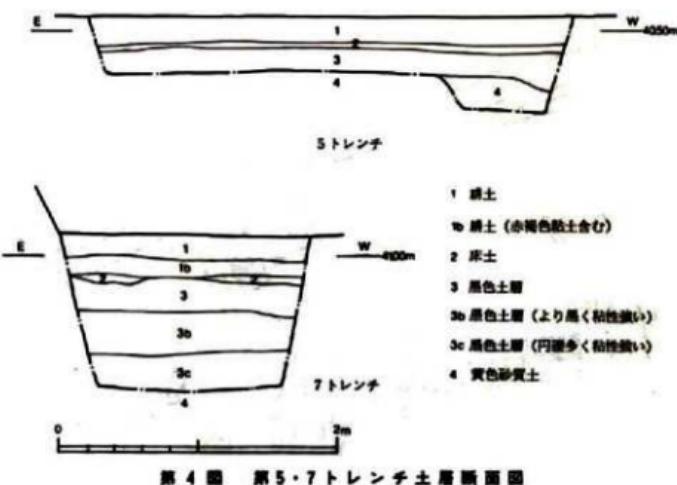
第2図 調査地近景



第3図 調査地平面図

い。8・9トレンチの方が他のトレンチより絶対高(標高)で僅かに低く、微妙な地形の変化があることが窺われる。すなわち、西方山塊から延びてくる丘陵に小さな谷地形が存在するようで8・9トレンチはその谷にあたっているようである。地形は西から東に緩やかに低くなっている。8・9トレンチで隔てられた北側の現在店屋が建っている地域は丘陵が延びてきた微高地となっている。辻遺跡の本体が統一しているとは思われないが、小規模の遺跡が存在している可能性は残されている。

今後も注意を必要とする。遺跡の中心は7・4トレンチの延長上から南に存在するが、東は奈佐川の合流地点まで延びている。



第4図 第5・7トレンチ土層断面図



第5図 第5トレンチ全景

また、調査地北側の県道福田・辻線沿いの田畠も遺跡の可能性が残されている。こここの斜面に石柱が置かれていた。原位置とは思われないが遺跡の広がりを今後考慮する際の一資料とすべきであろう。



第6図 竹野町森本出土石棒

参考文献：1. 佐々木信一著「奈良時代の古墳と古跡」（1980年）2. 岩谷和也著「奈良時代の古墳と古跡」（1980年）3. 岩谷和也著「奈良時代の古墳と古跡」（1980年）4. 岩谷和也著「奈良時代の古墳と古跡」（1980年）



第7図 辻遺跡分布調査結果（「豊岡市福田・矢谷古墳群」1974に加筆）

IV 辻遺跡出土採集遺物

1. はじめに

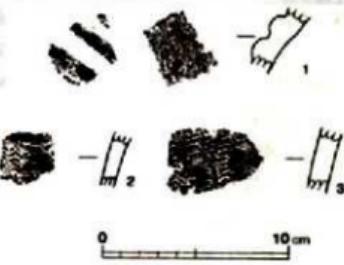
以下紹介する資料は豊岡市立郷土資料館蔵保管の遺物の他、調査員の一人である和田長治氏の長年にわたる分布調査活動の成果、ならびに地元辻在住の岡谷正一氏・猪師利雄氏採集の遺物である。和田・岡谷・猪師各氏の採集以外に辻遺跡の性格を明らかにしようと分布調査を行った人々がいる。同じく調査員に加わって戴いた山口卓也氏や坪多正裕氏ら研究者の表面採集によるもので、郷土資料館蔵の遺物の骨子ともなるものである。郷土資料館の資料は多数の方々の手によって採集されたものであるが、採集地点は同一なので原則的には採集日の相違だけで同一地域の資料と

みなして大過ない。

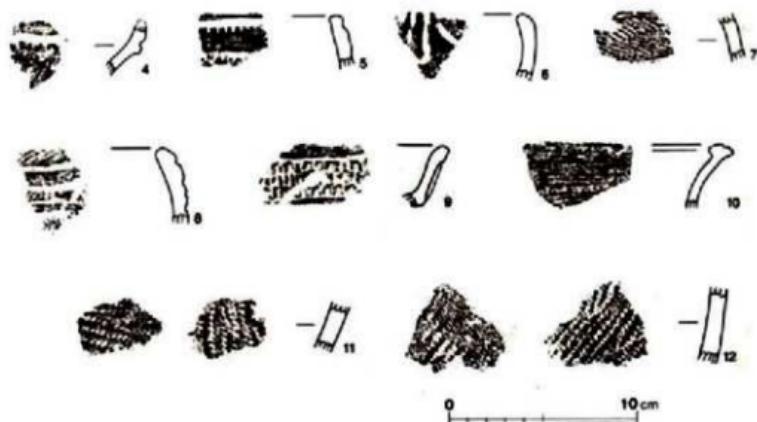
2. 繩文土器

辻遺跡は古くから良く知られた遺跡で地元の人達を始め但馬各地の人々により遺物の採集が行なわれている。又先学諸氏による試掘も一度ではないとの事である。完形の土器も出土し県外に出たという話もある。此の度の報告に採用する土器は、地元の研究家岡谷氏の採集土器と和田の採集土器である。遺跡は古くから畠として耕作が行なわれ、遺物の損傷が甚だしく細片となっている。採集地点も3地点になる様であり、その中の2地点はほぼ同じ性格の様であるが、先端部の地点から縄文早期の土器が混在の形で採集されている。この遺跡で採集された土器の時期は、縄文早期後半と中期後半から後期中頃までの様である。前期と中期前半が欠落している。この遺跡のすぐ隣には内町という後期終末から晩期の遺跡がある。又この奈佐川の下流の宮井にも中期と後期中頃の土器を出す遺跡があり、辻の空白部を一部埋めている。

次は土器の概略である。2・3は早期中頃の押型文である。焼成の良い明るい褐色の土器である。11は口縁部内面の斜行凹線文である表面には、かすかではあるが梢円文が見られる高山寺と呼ばれるものである。暗褐色の焼成の良い土器である。11・12は表裏織文であり時期のむずかしいものであるが、この土器は早期終末を考えてみた茶褐色の焼成の良い小石の多い土器である。4・5・9・27・30・43は中期後半の土器と思われる。固化不可能だが同時期の土器の一点は口縁部であり、口縁直下に沈線を引き竹管で直上から刺突したものである。口縁を内傾させその上を同じく刺突したものもある。黒褐色の土器である。36も口縁部であり、口縁直下に3条の沈線を引き下の2本に刺突を加えたものである波状を呈し、明るい褐色で焼成の良い土器である。5・9は口縁部であり、5は口縁直下とやや離れて2条の沈線を引き籠状工具で細かく刺突している口縁部は平坦面仕上で茶褐色の土器である。9も口縁部で5と同じ要素であるが、沈線の内側を3列に向きをかえて刺突している正面の大きな傷は土器焼成前のものである。鳥取と浜詰に類似がある。27も口縁部で前者と同じ要素であるが、工具が細く無操作に刺突している口縁部には貝の口縁による刺突文が付されている暗褐色の土器である。4は口縁に近い破片で同じ要素の焼成のやや悪い土器である。43は磨滅の著しい土器であるが、継糸を全面に施し沈線を引き刺突を加えたものである。8・76も中期後半の土器と思われる。8は内傾した口縁部である。無筋の細かい織文が全面に施され、口縁と平行に4本の沈線が見られその下に別の文様が描かれている褐色の粒の多



第8図 縄文土器 (1)

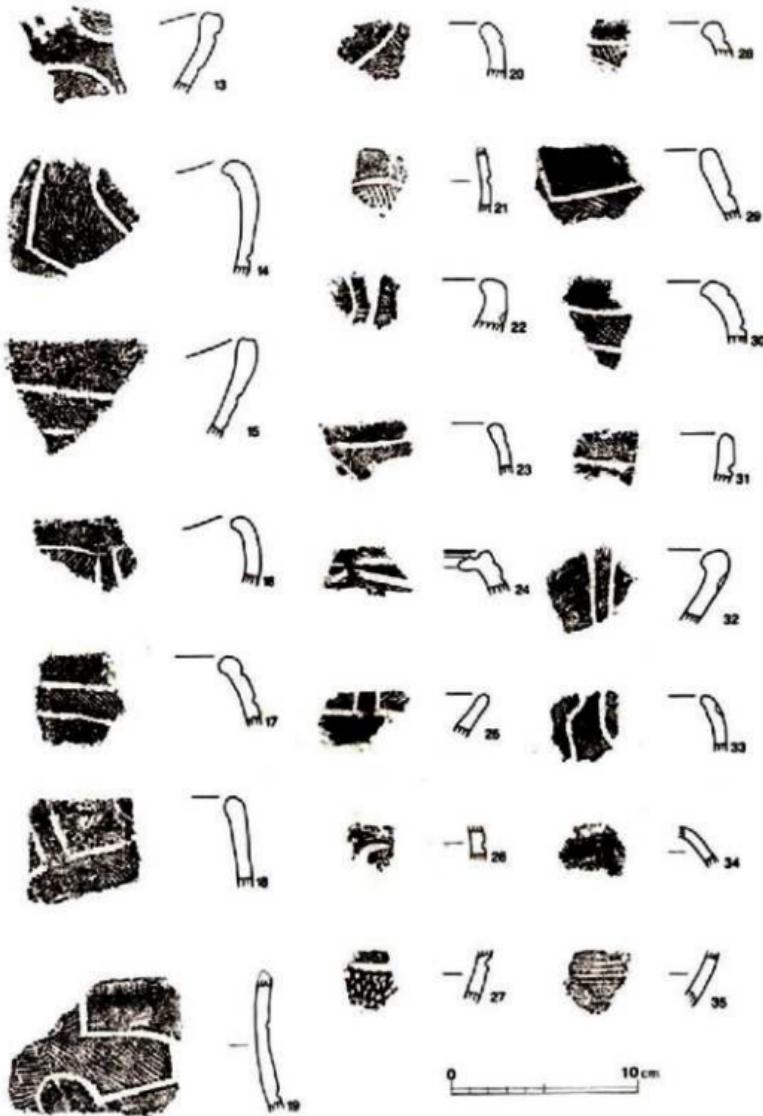


第9図 織文土器(2)

い土器である。76も全面に織文を施し幾条もの沈線が引かれた胴部の破片で暗褐色の土器である。次は後期の土器である所謂中津式と呼ばれるものである。胎土の悪いものが多く破片ばかりで確かな事はないが、波状口縁で深鉢が圧倒的に多く色調も暗褐色が多く黒褐色・褐色等である。50・89・93は内面に条痕の付された磨消織文である。50・89は内面に条痕のある土器である。93は裏面を条痕で仕上げ裏面はさらに織文を付し磨消で仕上げているが、地文の条痕が消し残されている。16・31は文様体が織文から始まるものである。数ある中で磨消が織文から始まるものは少ない。7・42・46・57・59・70・88・95は2cmをこえる広い織文帯を持つものである。7は焼きのよい堅い土器である。42・57・70は胴部破片であり、比較的太い原体で施文されている。46は色調が黒の土器である。59・95は3cmをこえる織文帯をもつものである。59は波状口縁の1つの頂点であり端部がいく分肥厚し内湾している焼きの良い黄褐色の土器であり、95は小石の多い胎土の悪い土器である。88は堅い織文の経糸で施文してある胎土の良い土器である。6・13・22は共に波状口縁の1つの頂点である。3本又は4本の沈線が集まっている。6はほとんど直行に近く、13と22は内側に肥厚がある。22は褐色の土器である。18・20・32も波状口縁の頂点であると共に2本の沈線が集まっている。20・32は内に肥厚し、18はほとんど肥厚がない。胎土の悪い土器でひどく剥落している。15・17・22・28・29は口縁部であり、共に口縁肥厚の見られる土器である。15・29は内面にやや肥厚している胎土の悪い土器である。17・22は内面に肥厚しており、22は褐色で胎土は共に良い。28は内側に肥厚しており胎土の良い褐色の土器である。23・25・33・38・40・41は肥厚のない口縁部で、23・25・33は内湾が見られ33は著しい。38・40・41は直行したものである。23・40は胎土の悪い土器である。85は無文土器に沈線を引いたものであり暗褐色の胎土の良い土器である。90は渦巻状沈線

文の土器であり、文様の中央が沈線の起点でありそこから沈線を左右に引いている。表面はヘタナリによる条痕の地文である。部分的に条文も付されている磨褐色の土器である。60は細い縦条で羽状に付し磨滅している胎土の良い土器である。46・63・64・66・67・68・77・79・80・83・84・86・89・94・95の15点は磨消繩文の胸部破片である。46は磨消部の広い表裏共に研磨され精製された黄褐色の土器である。63は太めの纏を使っており表面は褐色・裏は赤褐色である。64は細い纏の磨消文土器である。67・80・86は黄褐色・暗褐色の土器である。67は表面は黒褐色・裏面は赤褐色の土器である。68は表裏をヘタナリで仕上げ、その上に繩文を磨消している。内面も研磨仕上げであるが消し残しが表裏共に見られる。79は内面に研磨のない土器である。83は胎土の悪い黄褐色の土器である。84・94は褐色の土器である。89は磨消繩文でないかも知れない。繩文地に沈線を引いたのかも知れない（そうすると年代にも関係してくる）。95は胎土に茶色の小砂が入っていてスコリアかもしれない沈線に強い線と弱い線がある。14・21・26・44・45・47・48・49・51・52・53・55・56・58・61・75・81・87は細片ばかりでとり立てて述べる特徴はない。その中で45は後期にしては器厚の薄い土器である。47も同じく薄手で5mm未満である。56は装飾的に貼付けられていた土器である。61は厚手の土器で1cm以上である。

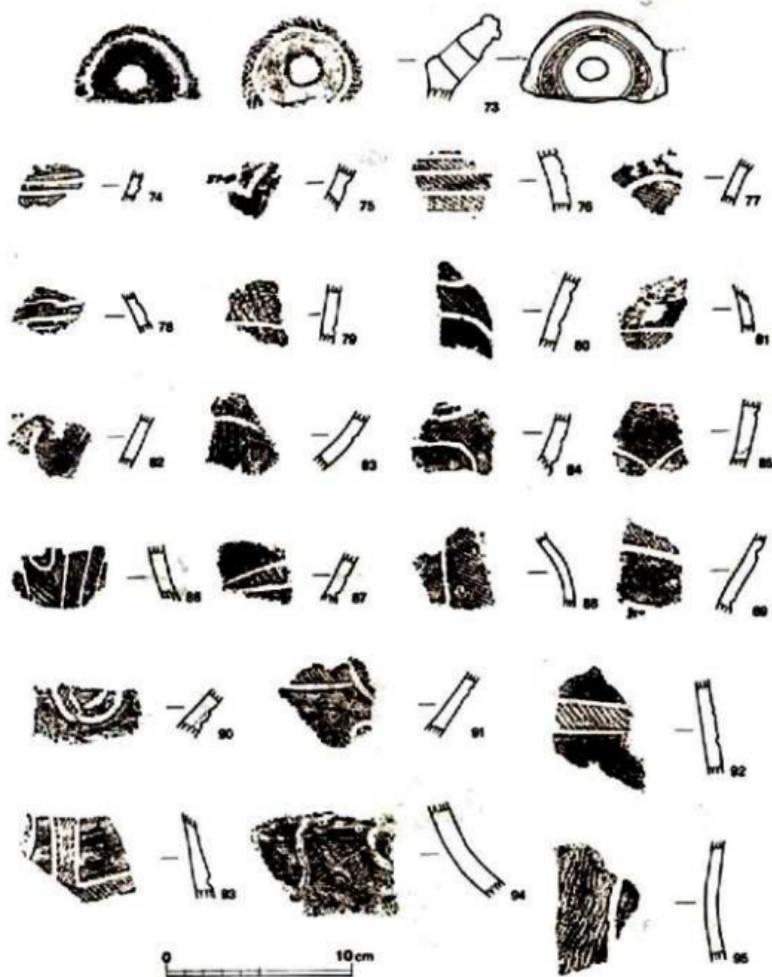
以上が中津と呼ばれるものである。繩文原体の縦はRが多くLは少ない。又金屬物の入っているものと入っていないものがある。内面に条痕のあるものもある。文化内容による違いなのか、無作為になせる業なのか今後の問題である。22・24・39・62・72・73・82・91は本来の中津より少し時期の新しいものである。22は口縁である。瘤狀状に外反した口縁に端部をさらに薄くして反りを持たせ、内面に粘土を貼付け製形肥厚を行なっていて端部には刻目も付けられている。24も口縁である。内面は粘土を貼付け製形肥厚を行なっている。縁帯文の前ぶれであろうか表面は磨消繩文である。39も口縁部で肥厚部は欠落してて縦条の磨消である。73は口縁の外反突手であり現代の平鍋の取手の様なものである。表裏に同じパターンの磨消繩文が施してあり、中央には径1.3cmの穴があけてある胎土の良い精成土器である。62・72・91・92は胸部の破片である。62は胎土の悪い灰褐色の土器である。72は黒褐色の砂粒の多い土器で胎土は津葉に似ている。91・92は黄褐色の精製磨消繩文土器である。91は内面も研磨してある。86は細い沈線が縦に走り間の広い所には円形文、繩文が付けられている。後期中頃の土器ではないか。74・78も細片で良く判らないが、同じ時期のものではないか。37は口縁部で直行した口縁端部は平坦仕上げであり、口縁に平行して2本の沈線がある。表面はヘタナリの磨消が行なわれている。94は胸部のくびれ部の破片である。無文地に縦の蛇行文が広く浅く施文されており、これが無文帯に施文されたものなのか、無文土器に施文されたもののかは判らない。やはり後期中頃と思われる。この他に図示していないものの中に福田Kとと思われるものもある。無文の鉢形土器も何点がある。粗製の条痕文土器片も多い深鉢が多いというだけで他の事は判らない。



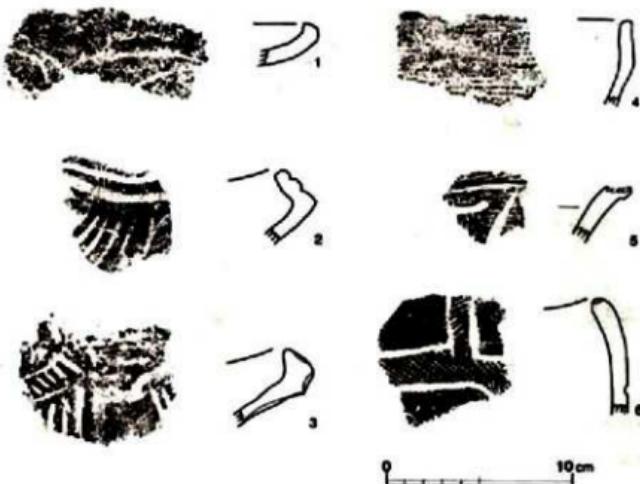
第10圖 國文土器(3)



第11図 製文土器(4)



第12圖 繪文土器 (3)



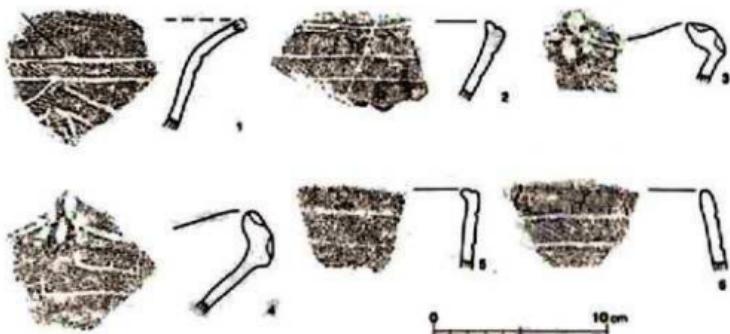
第13図 岡文土器(6) (岡谷正一氏蔵)

・岡谷氏採集土器

次の6点は岡谷氏採集の土器であり、すべて口縁部片である。2は中期の土器である。口縁内部に広い底の様な張り出しをめぐらせており、その上を2本の太い沈線を平行に施文している。外面も太い沈線を斜行させている。5は口唇部が欠落して口縁の造りが不明である。外面は左半分が繩文の地文、右は条痕が地文という変わった土器である。その上を軽く押えが行なわれ、太い沈線で施文した中期末から後期早々の土器と思われる。1・6は磨消繩文で中津式土器である。1は砂粒の多い粘土の悪い土器で、剥離がひどく繩文もかすかに残る。細い沈線で区画してある。6は内面に条痕のある波状口縁の土器である。4は表面条痕の所謂粗製土器である。内面は剥離がひどい。3は後期中頃の土器と思われる。口縁端部の大部分は欠落しているが波状口縁と思われる端部の中央に一本の沈線をめぐらし、その外側に同じ原体で刻目の様な施文があり、同じ原体で外面も沈線文が施文してある。

・郷土資料館蔵土器

次の6点は資料館蔵の土器である。すべて磨消繩文である。1・6は中津式と思われる。1は口縁直下に無文帶のある土器である。6は内面に少し条痕の残る黄褐色の明るい土器である。5も中津の仲間かも知れぬ、内部に拡張が小さく造られている。端部には細い沈線が一本めぐらしている。2は口縁端部の拡張が5よりも大きくなってきていて、端部の沈線も太くはっきりしている。3・4は同一個体かもしれない。



第14図 繩文土器(7) (豊岡郷土資料館蔵)

波状口縁の頂点には上下に一点づつと左右に一点づつの計4点の刺突を施し、左右の刺突を端部沈線文の始まりとしている。縄文文の前の時期と思われる。以上の6点はいずれも磨滅の著しい土器である。

あとがき

辻遺跡といえば縄文の遺跡であると普通いわれる。少し研究している人は、後期の遺跡と言うぐらいである。この他に豊岡市には、内町・宮井・中ノ谷・荒原・長谷・御女代の縄文遺跡があり、すべて後期に關係ある遺跡である。その中で辻遺跡が一番年代幅のある遺跡である。他とのつながりを簡単に考えて見る。まず早期から。早期を考えるにはどうしてもここから直線距離に10km前後の所にある神鍋遺跡をあげなければならない。辻遺跡は、早期・前期では神鍋遺跡の海への出入口であると考えられる。神鍋のキャンプサイト的な遺跡と思われる。次の前期の土器は一片も発見されていない。中期初頭の土器も全く空白である。中期中頃から遺跡は始まるのである。辻遺跡と性格の良く似た丹後の浜詰遺跡では般元の初頭から始まるのに對し、辻では般元は一点も見られない。つまり般元が終わる頃から遺跡が始まるのであろうか。そして中期後半になると但馬では、形式名のはっきりした土器は見られなくなる。このことは浜詰にもいえる事である。土着の土器が出回る山陰海岸・辻遺跡の65のような土器は浜詰が中心になると思うが、鳥取の海岸部まで分布している。浜坂の池ヶ平式（浜坂町史・山本）のように、一つの遺跡で使われ他へは全く出ていかないものなど謎めいたこともある。中期後半のこの地区は、文化交流が停滞したような状態になったのであろうか。次の後期に入ると近畿一円中津一色になり、この地区も例外でない。中津式が少し新しくなると、浜詰K1のような中津とは少し違った土器が出現する。辻遺跡も浜詰K1の影響を強く受けている。ところが神鍋のすぐ東の山ノ宮遺跡では浜詰の影響は全く受けっていないのである。辻と山ノ宮は山を一つ境

に近接の遺跡なのである。次の福田KⅡとの間にも何段階かありそうである。そして福田KⅡに入る所以である。辻も福田KⅡと思われる土器が一点あり桑削下4も見られる。これ以後の土器は見られない。この谷の入口にあたる宮井遺跡では桑削下4がかなり見られて、辻から宮井への移行がうかがえる。辻遺跡のすぐ北側の内町には、後期終わり頃と思われる土器片一点をふくむ晩期の土器が発見されている。宮井から内町に再移行したものと思われる。以上であるとがきというものが終るわけであるが、何しろ百姓のおやじのする事であり、時期的にも12月半ばという百姓にも民宿の用意にも多忙を極めた折で気ばかりあせり、ミス考察が多数あると思われるが指摘して御教示を願われば幸いと思う。

この報告書を書くにあたり、倉敷の間壁御夫妻に多大の御教示を頂いた。ここに記して御礼にかえたいと思う。又縄文原体の事については縄文土器大成第三の佐原真氏の記述を参考にさせて頂いた。

○参考文献

- 『桑削下遺跡発掘調査報告書』
- 『倉敷考古館研究集報』第14号
- 『縄文土器大成第三』

3. 石 器

辻遺跡では、今までに多量の遺物が採集されており、その内に多大な石製遺物・石器類を含んでいた。本節で扱う資料は、これら石器類・石製品類であり、和田長治・岡谷正一・坪井正裕氏および山口の採集品、豊岡市立郷土資料館の採集・収蔵資料である。

辻遺跡では、数地点に区分される広い範囲に遺物が分布しており、特に舌状段丘の先端付近からは押型土器片が採集されるなど、縄文時代早・後期の土器が認められている。かならずしも後期前半の单一遺跡というわけではなく、遺物自体から直接時代判定の困難である石器すべてが同一時期と認定できる状態ではない。しかし大半の石器が後期前半の土器群の濃密に分布する中心地で採集されていることから、一部の石器等を除けば、他は縄文時代後期前半の一括資料と考慮することも可能である。

辻遺跡から採集されている石器は、剥片等を含めると数千点にも及ぶが、定形的または機能の明らかなものとして、石鉈・石鎌未製品・槍先形尖頭器・石錐・楔形石器・楔形石器削片・石核・削器・打製石斧・磨製石斧・磨製石斧未製品・切目石錐・礫石錐・スリ石ないし敲石・石皿・石棒ないし石柱・石製装飾具など、計197点がある。

197点の石器の器種を用途別にみると、植物質食料の採集・調理用具としての打製石斧・スリ石ないし敲石・石皿と場合によっては磨製石斧・狩猟用具としての石錐・槍先形尖頭器・漁具としての切目石錐・礫石錐・樹木の伐採・加工用具としての磨製石斧・骨角・皮革・樹皮・

樹木の加工に関連すると思われる楔形石器・削器・石錐等がある。さらに石錐ないし石性・石製装飾具は、直接的な生産よりも精神的な分野での活動を反映するものである。

石材については、サスカイト・安山岩・泥板岩・凝灰岩・砂岩・チャート・頁岩等からなる多種の石材が利用されている。サスカイトは石錐・石錐・楔形石器等にわずかに利用されるのみであり、大半は安山岩により製作されている。打製石斧・磨製石斧等は、泥板岩ないし凝灰岩質の石材を多用している。一般的に、サスカイトを除けば遺跡周辺地での河川の砾石・露頭面から入手可能なものである。

以下、各器種ごとに検討していくこととした。

a. 遺跡採集の石器・石製品

・石錐（第15図1～26・第16図1～18・第17図1～18・第18図1～17）

石錐は、計79点採集されており、第15図22が赤色凝灰岩・第15図8・第18図11がチャート・第15図26が石英を石材とする他は、安山岩ないしサスカイトを石材としている。安山岩製のものは、剥離面の観察が困難である。

石錐の形態は多様であり、大小についてもかなりの差異が認められる。遺跡では早期の押型文土器片も採集されていることから、一部には早期に所属する石錐も含まれると考えられる。

石錐の形態は、凹基無茎式が主体であり、平基無茎式・円基無茎式が併なっている。遺跡の石錐は、根ざしきの使用を前提とした形態である無基の凹基ないし平基・円基であり、有茎式は存在していない。

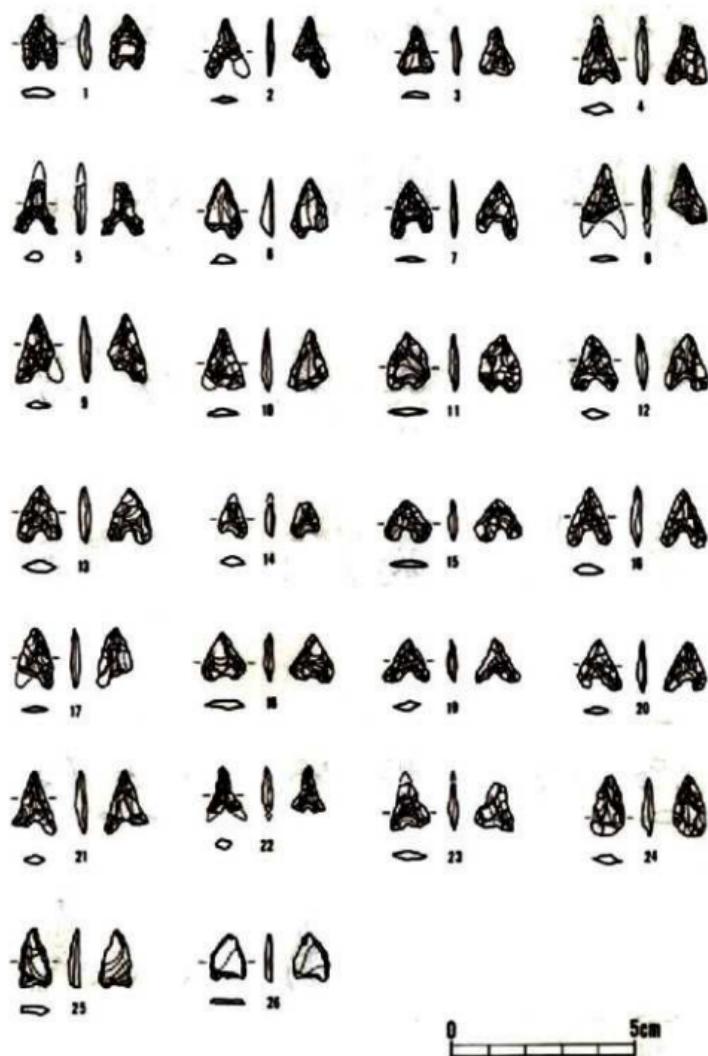
凹基のものには、第15図1～23・第16図1・2・4～8・10～18・第17図1～4・6～18・第18図1～4・6～8・13～17の計63点があり、平基のものは、第15図25・26・第16図3・第18図5・10の計5点、円基のものには、第15図24・第16図9・第17図5・第18図9・11・12の計6点があり、他の5点は欠損のため基部の形状が不明である。

一般的な傾向として、凹基のもののうち抉り部の深度が深いものはほど調整が細かく、浅いものは若干荒いものがあるように觀察される。平基のものには素材剝片の剥離面を大きく残すものが認められ、それらは周縁加工のものが多い。第17図4の凹基式石錐は、脚部の角度が大きく、その形状は異質であり、他と除外して考えるべきかもしれない。第15図11の石錐はチャート製で大きく、注意される。

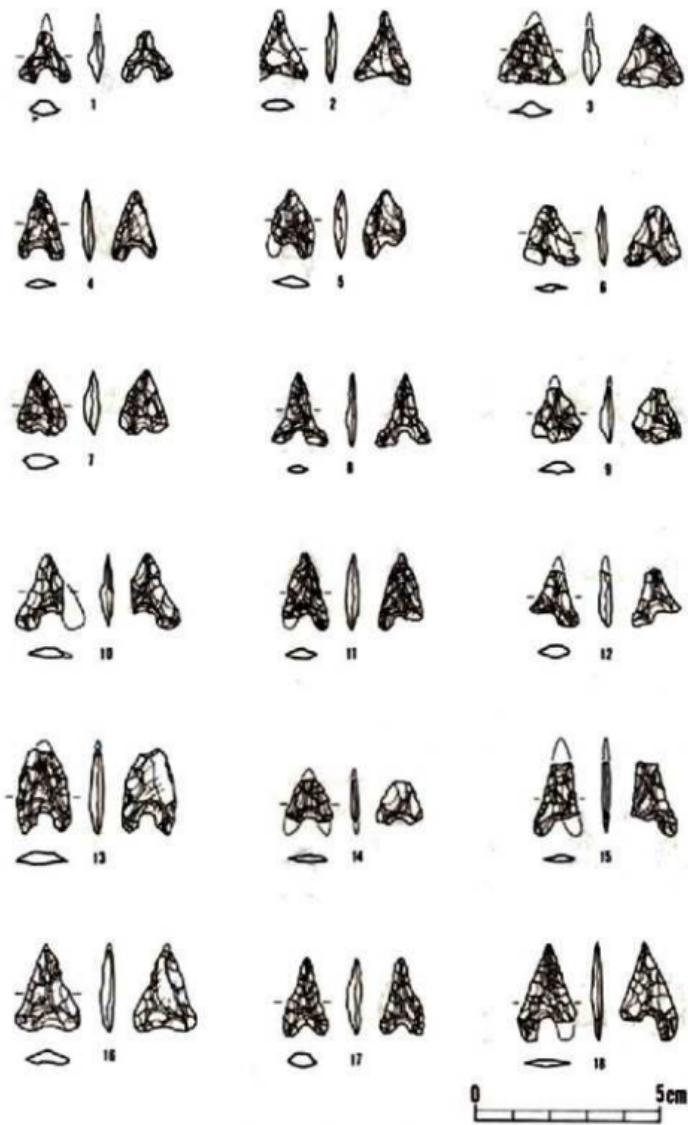
・石錐未製品（第19図1～17）

石錐未製品は、計17点採集されており、16がチャート、15が石英を石材とする他はサスカイトないし安山岩である。

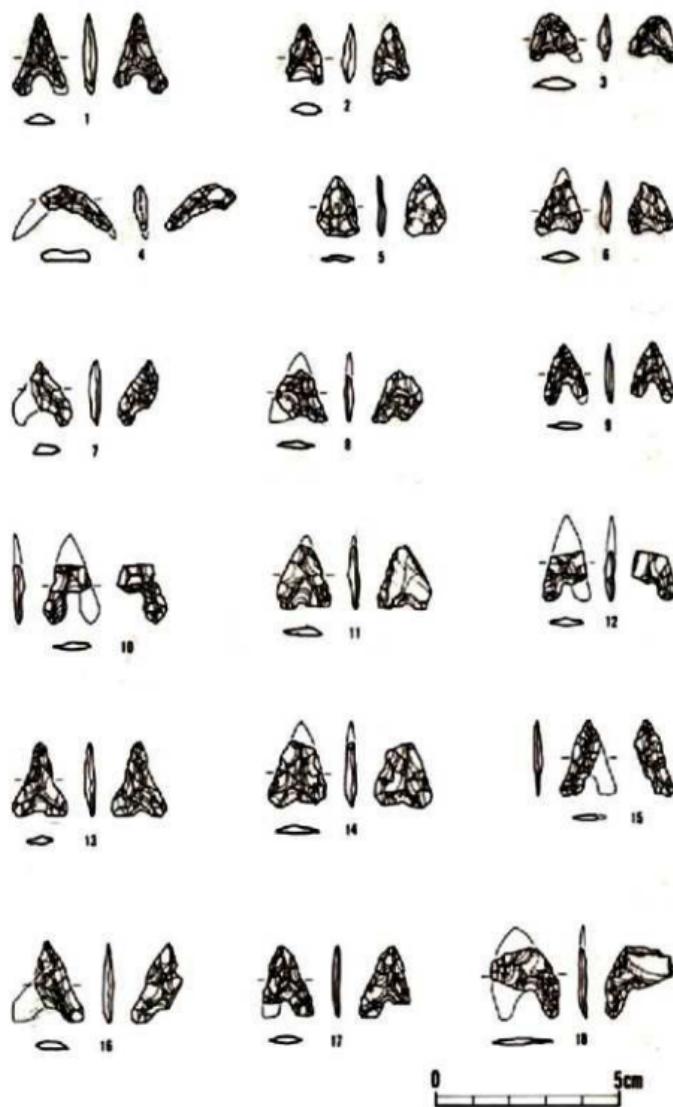
1～13は、裏面に素材剝片の剥離面を大きく残しており、表面はほぼ調整加工により覆われているが、裏面に未調整の縁辺を残すものも存在することは注意される。この種の状態のもの



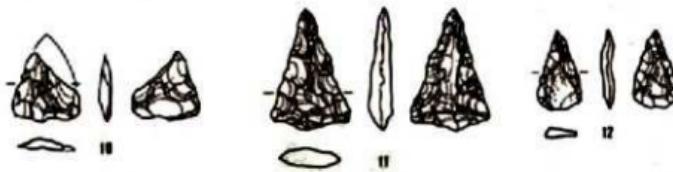
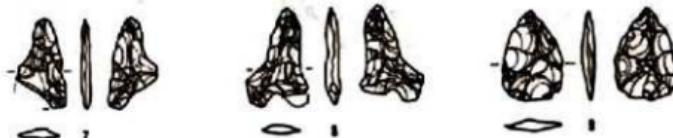
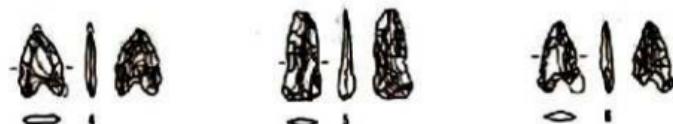
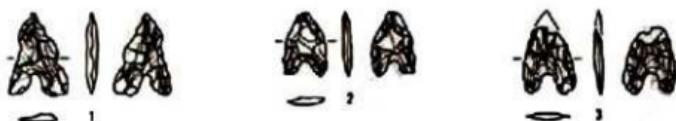
第15圖 石器實測圖(1)



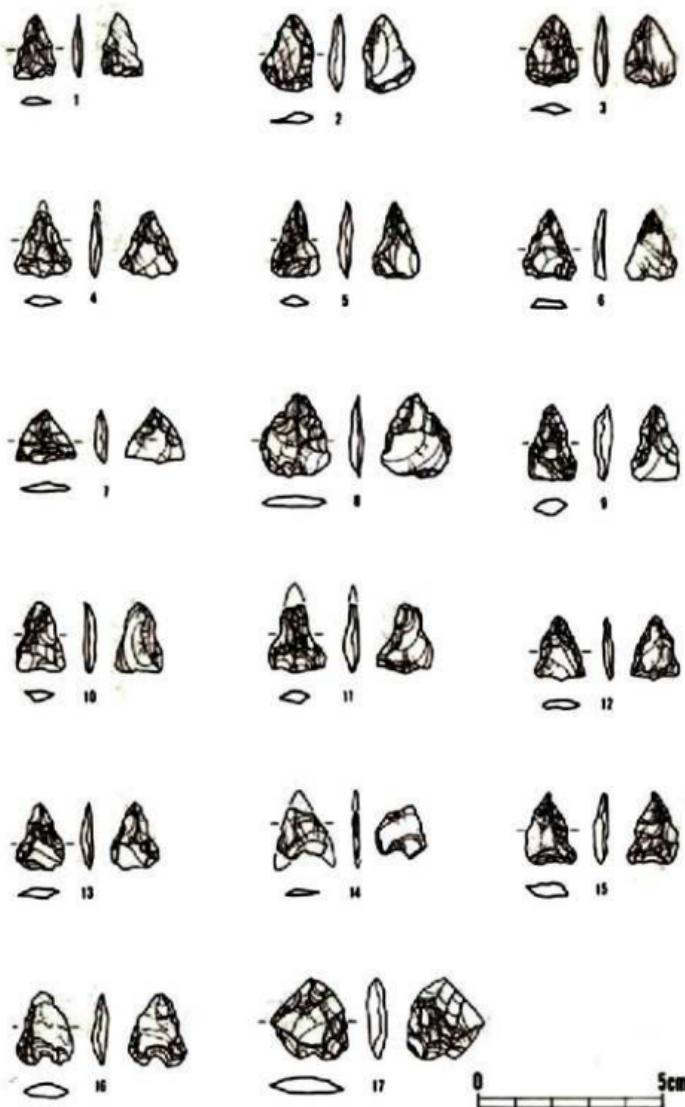
第16圖 石器実測図版



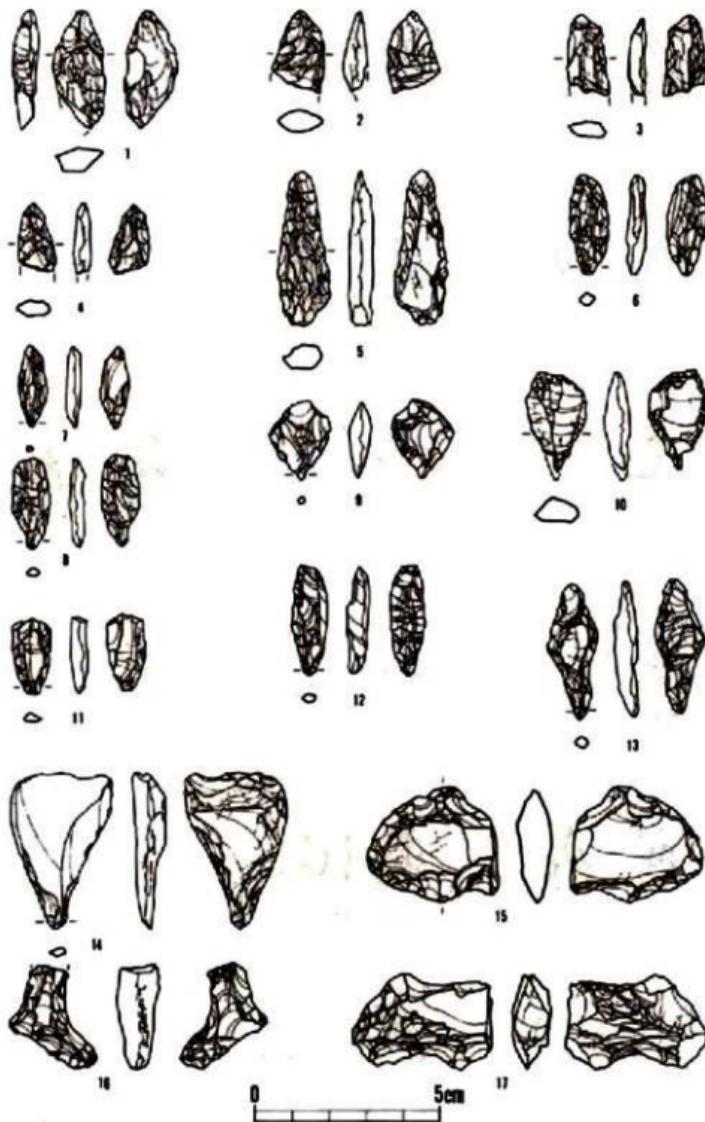
第17圖 石器実測図(3)



第18圖 石器実測図(1)



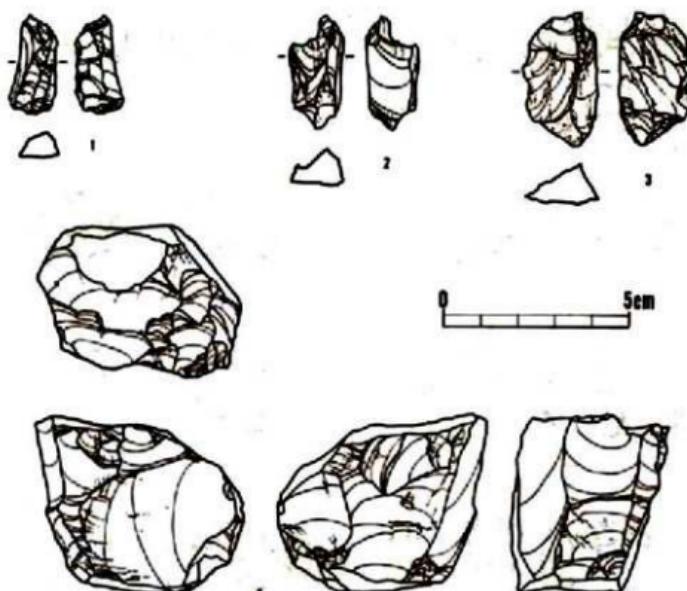
第19圖 石器實測圖(5)



第20圖 石器実測図(6)



第21図 石器実測図(7)



第22図 石器実測図(b)

を未調整部を大きく残存させていることから、石器未製品として分類したが、これも石器の一形態として理解できるかもしれない。すべて平基ないし円基に類した基部を有しており、凹基の抉り部形成と脚部の調整は行なわれたものではなく、一つの作業段階を示すのか明らかではない。

・槍先形尖頭器（第20図1～5）

槍先形尖頭器として分類したものは計5点あり、いずれもサスカイトないし安山岩製である。

いわゆる石槍として分類される縄文時代の槍先形尖頭器は、西南日本では稀であり、辻遺跡での狩猟活動の一端をうかがわせる資料である。

1は、左側縁に截断面が認められる。未製品の可能性があるものであり、截断面のある素材剥片を利していることにより、その製作技術の一をうかがわせる。

2～4は、下半部を欠損しており全体は明らかではないが、器厚により石槍とは区分される。

5は、完形の槍先形尖頭器である。右側縁には素材剥片の折断面を残存させており、1の截

断面を残すものと合せて、縄文時代石器生産技術体系が、一つの素材を複数に分割する技術に比重が掛るものであることを示しているようである。

○石錐（第20図6～14）

石錐は計9点あり、10がチャート・12が石英・14が泥岩を素材とし、他はサスカイトないし安山岩を素材とする。いずれも揉錐であり、尖錐は存在していない。

注意されるのは、截断面を残した例であり6・12が該当するが、槍先形尖頭器にある例のように製作技術の一端をうかがわせる。

6・8・12の先端には揉錐特有の損耗を認めることができる。

○楔形石器（第20図15～17・第21図1～10）

楔形石器は計13点あり、第20図16が黒曜石製である他は、いずれもサスカイトないし安山岩を素材とする。

楔形石器には、截断面を有さぬもの（第20図15・16）と有するもの（第20図17・第21図1～10）があり、比率としては截断面を有するものが多い。截断面の形成については、截断面の形成自体意識的なものか、使用の結果なのか明らかではない。截断面縁には使用痕は認められず、楔形石器の上下縁辺は一辺に損耗が著しい。

第20図16は黒曜石製であり、その形状が「長錐」状をしている。縁辺は白く剥離している。

第21図1・2・9は左右両側縁に截断面を有しており、2は右側縁に上下両方向からの剥離が認められる。

第21図6・7は、一端に截断面が存在するが反対の側縁には折断面が認められる。楔形石器にその折・截両技術が認められることは注意されよう。

○楔形石器削片（第21図11・12）

楔形石器削片は、計2点採集されており、いずれも頁岩を素材とする。

11は、断面形が截断面を底辺とする台形状を呈し、いずれの面も上下両端からの剥離痕により形成されている。

12は、上下両側縁にわずかの調整が認められる。

○石核（第22図1～4）

石核は、計4点採集されており、1～3がサスカイトないし安山岩、4が頁岩を素材としている。

1～3は、上下両方向からの剥離の行なわれたいわゆる「魯根型」石核である。基本的に先の楔形石器と同様の形状を呈している。3には右側縁に截断面を形成している。目的削片の剥離作業が楔形石器の使用に類する可能性が考慮される。

4は、1～3と比較して著しく大型の石核であり、石材が頁岩であるのも注目される。調整面で覆われており、自然面を残していないが、剥離作業面の形成は顕著でない。

遺跡において、石器・削片の量と比較して石核の類の数量が少ないが、これは削片剥離作

業の主体が小型の楔形石器に類した石核により行なわれた結果であると思われ、この種の石核はそれ自体判別困難な形状を呈する場合が多く、また一方で徹底的に剝離作業が行なわれ石核としての形状を失うものがあるためと考えられる。一般に西南日本の縄文時代遺跡で石核の検出は少ないと。

○削器（第23図1～3・第24図1～4）

削器は、計7点採集されており、第23図1が頁岩、第23図2・3・第24図4が泥板岩、第24図1～3がサクカイトないし安山岩を素材としている。

第23図1は、大型・厚手の剥片の右側縁に一部、刃こぼれ状の小剝離痕を残す。

第24図1は、石小刀状を呈する削器であり、両面を精密に調整されている。

第24図3は、むしろ楔形石器としての形状を有する削器であり、表面に自然面を残すものの、大型で整った形態である。

第24図4は、泥板岩の節理による薄片の側縁に調整を施した削器である。

○打製石斧（第25図1）

打製石斧は、1点のみ採集されており、泥板岩を素材としている。

表面には大きく磨耗痕が認められ、特に先端部の損耗は著しい。磨耗は主に表面に認められ、裏面には顯著ではない。着柄によるものと考えられる損耗も同様に表面上半部に存在している。

○磨製石斧未製品（第26図1～4）

磨製石斧未製品は、計4点採集されており、1・2が泥板岩、3・4が泥岩を素材としている。

1および2は、泥板岩片を敲打・剝離調整により短冊状に成形された段階であり、2の下端部には刃部となる部分の調整が開始されている。

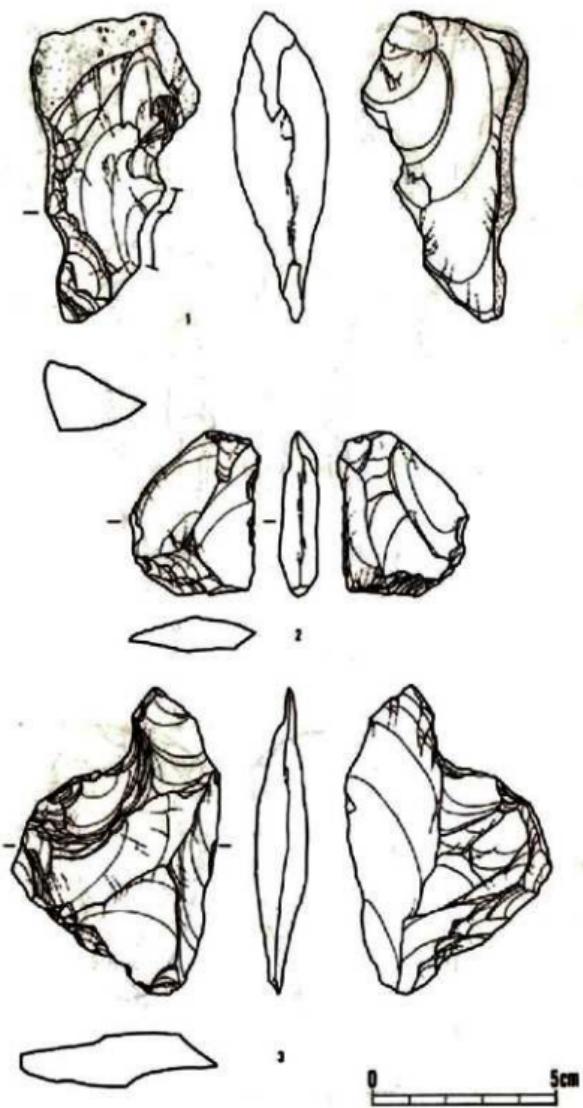
3・4は、短冊状の素材の表裏両面に研磨が開始されているが、左右側縁には敲打調整痕をそのまま残す。いわゆる定角式の石斧の製作は、表裏両面を研磨した後両側縁を研磨するものであろうか。

○磨製石斧（第27図1～7・第28図1～6・第29図1・2）

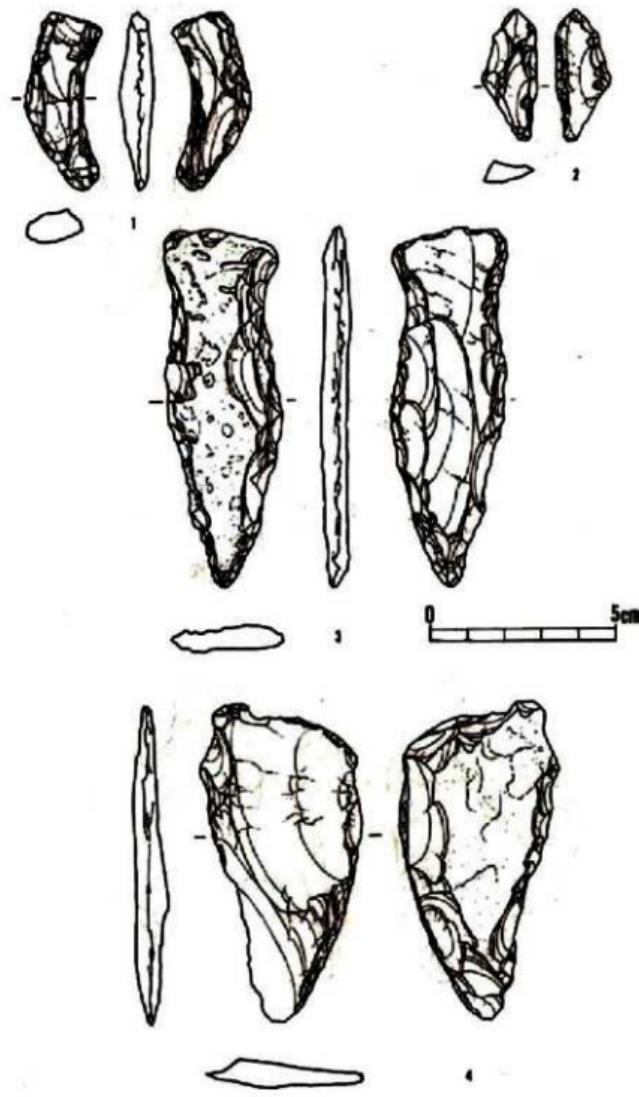
磨製石斧は計15点あり、第29図2が結晶片岩、第27図5・6・7・第29図1が砂岩、第27図3・第28図6が泥板岩、他は泥岩ないし泥砂岩を素材としている。

第29図2を除けば、他は定角式の磨製石斧であるが、定角式のものは大・中・小に3分される。大型のものに第27図4・6・7・第28図5・第29図1があり、中型のものに第28図1・2・4、小型のものに第27図3・第28図3・6などがある。

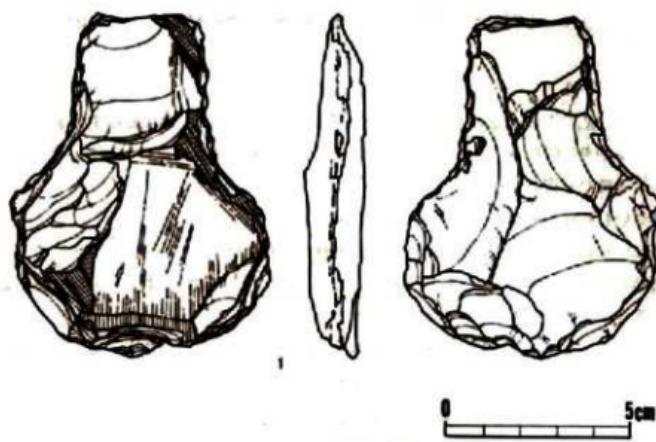
耕作により折損したものが多いが、完形品や一部のものには再加工や使用痕と思われるものが認められる。第27図7は、刃部が著しく刃こぼれ、損耗しており、刃こぼれ状小剝離は第28図1・3にも認められ、第28図5は中央より欠損しているが、欠損部には意図的に調整が開始



第23圖 石器 実測図(9)



第24圖 石器 実測 図(1)



第29図 石器実測図(2)

されている。

第29図2は、断面形が梢円形を呈し、縄文期のものではない可能性がある。上半部には着柄痕を顕著に残している。

・切目石鎌 (第30図1~19)

切目石鎌は、計19点採集されており、砂岩・泥岩・泥板岩・泥砂岩等多種類の石材を利用し、顕著な選択性は認められない。

切目石鎌は、原則的に素材円錐の長軸方向の両端に切目を有する。切目以外の加工を施さないものがほとんどであるが、一部には研磨痕らしい部分の認められるものが小型のものにある。

切目石鎌の重量は均一でなく、大きな個体差が存在している。

・縫石鎌 (第30図20~25・第31図4)

縫石鎌は、計7点採集されている。砂岩・泥岩・泥板岩・泥砂岩等切目石鎌と同様の石材が利用されている。

糸掛けは、素材円錐の長軸の両端に片面ないし両面に一・二箇を加えて作出したものである。縫石鎌は、切目石鎌よりも重量的に大きい位置を示しているようである。

第31図4については、表面中央に敲打による凹部分が認められ、敲石としても利用されている。

・敲石ないしスリ石 (第31図1~4)

敲石ないしスリ石は計4点あり、砂岩ないし凝灰岩を素材としている。

1・2・4が敲打による凹部を有しており、3はわずかに敲打痕を有するが裏面両面はなめ

らかであり、スリ石と判断される。1・2は表面両面に凹部を有する。また側面にも若干の敲打痕を有する。

・石皿（第31図1）

石皿は、1点のみ採集されており、礫灰岩を素材としている。約4分の1を残存させている。原形は中央の凹むものであったと思われ、著しい磨耗が内面に認められる。最下底には、敲打による痕跡が認められる。

・石棒ないし石柱（第32図1・第33図1・2・第34図1～4）

石棒ないし石柱は計7点あり、いずれも礫灰質泥岩を素材としている。

辻遺跡の石棒・石柱類には、無頭・有頭の両方が存在し、明顯な敲打による整形痕の認められない石柱として分類すべきものも存在する。

第32図1は、長大な無頭石棒であり、断面形は梢円形を呈する。ほとんど整形痕は認められないが、表面が落削しており、明確なことは不明である。先端部を欠損している。

第33図1・2は、有頭石棒である。いずれも頭部を陰刻により二段に整形している。1・2とも裏面に平坦な部分を有し、若干磨平である。

第34図1～3は、無頭棒の先端部と考えられるもので、断面形は1が小判形、2が一端の平坦な円形、3が正円形である。1の整形は荒く、未製品であるかもしれない。

第34図4は、石柱と思われた敲打痕等の明瞭でないものであり、断面形は五角形を呈する。上下両端は完全であり、全体を残す。

・石製装飾品（第35図1～3）

石製装飾品は、計3点採集されている。

勾玉・玉・大珠未製品がある。

辻遺跡内では、玉原石・未製品と思われるものが石器と混在して採集されており、玉類の生産が行なわれたものと考えられる。

b. 辻遺跡の石器群についての若干の問題

辻遺跡からは、計197点の石器が採集された。実標品であり、採集地点・時期も異なったものが混在している。かならずしも一括資料として扱えるものではないが、辻遺跡の現状から縄文時代後期前半の石器が主体を占めると考えられる。ここでは、辻遺跡採集の石器群が、西南日本における後期縄文社会に占める位置を明らかにすることを目的とし、若干の検討を進める。

辻遺跡から採集された石器群の数量を観察すれば、石錐・槍先形尖頭器等の狩猟用具と推定しうる比率が極めて高いという事が理解される（第1表）。狩猟用具と考えられるもの51%、石錐・楔形石器・削器等の加工用具15.5%、伐採用具である磨製石斧等10%、植物質食料に関連する打製石斧・石皿・凹石・スリ石等3%、漁具であると推定される切目石錐10%、織み物の道具と推定される砾石錐3.5%、他に石核2%、石棒・石製装飾品等5%があるが、狩猟用

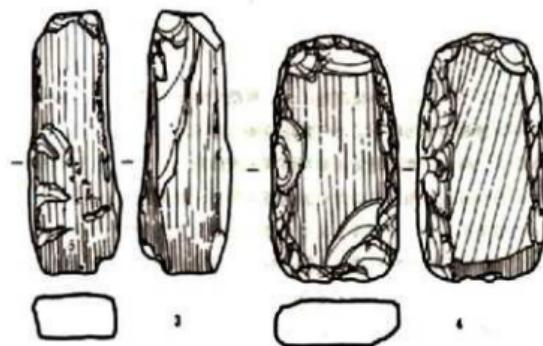
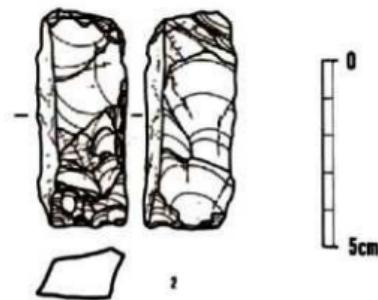
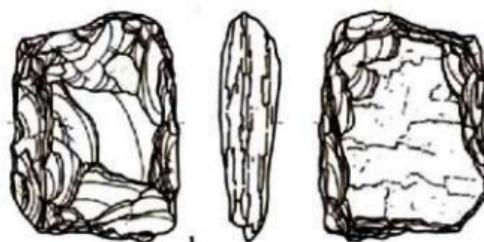
第1表 掘出石器一覽表

石鏃	79	40%		
石鏃未製品	17	8.5%		
槍先形尖頭器	5	2.5%	101	51%
石錐	9	4.5%		
楔形石器	13	5.5%		
楔形石器削片	2	1%		
削器	7	3.5%	31	15.5%
石核	4	2%	4	2%
磨製石斧	15	7.5%		
磨製石斧未製品	4	2%	19	10%
打製石斧	1	0.5%		
敲・スリ石	4	2%		
石皿	1	0.5%	6	3%
切目石錐	19	10%	19	10%
碌石錐	7	3.5%	7	3.5%
石棒・石柱	7	3.5%		
石製裝飾品	3	1.5%	10	5%
	197	96.5%	197	100%

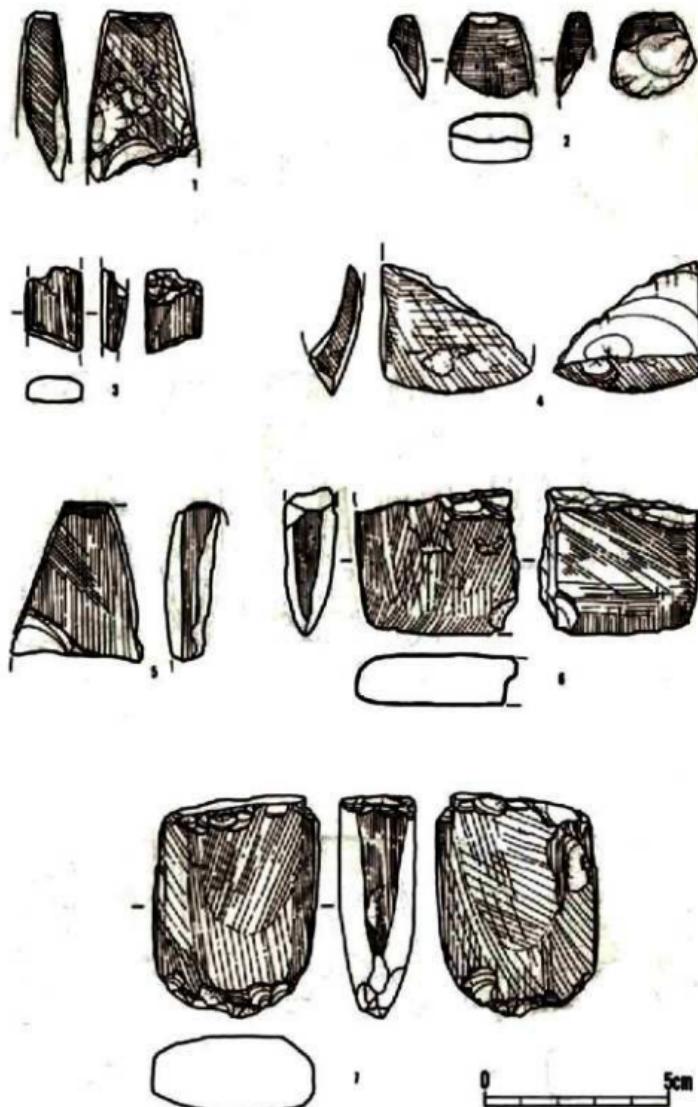
具の比率は著しく高率である。

西南日本後期文化については、中部高地において縄文時代中期に発達・成立した、アカ抜き・水さらし技術や管理栽培を指標とした半栽培段階にあるとして評価され、この半栽培段階が後期に西南日本にも伝播し、磨消繩文土器の展開・浅鉢形土器や注口土器の伝播・打製石斧の増大・石皿やスリ石や敲石の増加・釣針や漁網錐（切目・有溝石錐）の伝播・さらに埋甕風習・石棒・土偶・抜齒風習といった精神文化をも伴なって大きな影響を与えたとされている。

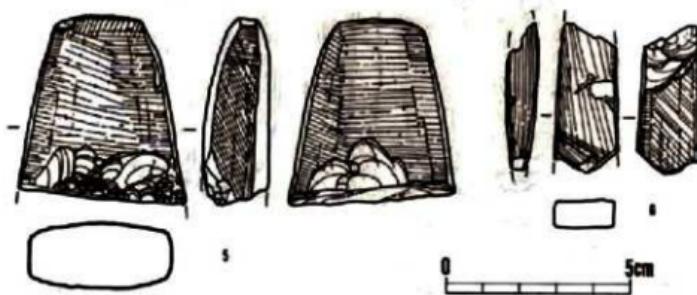
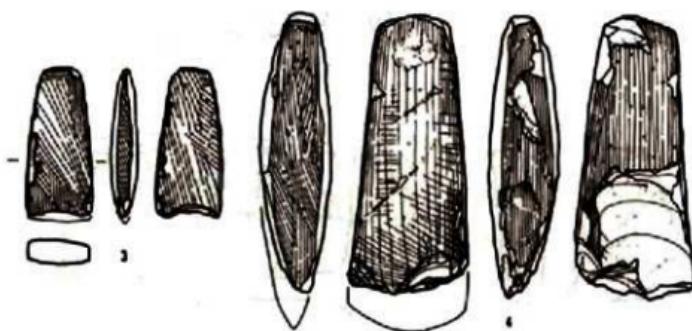
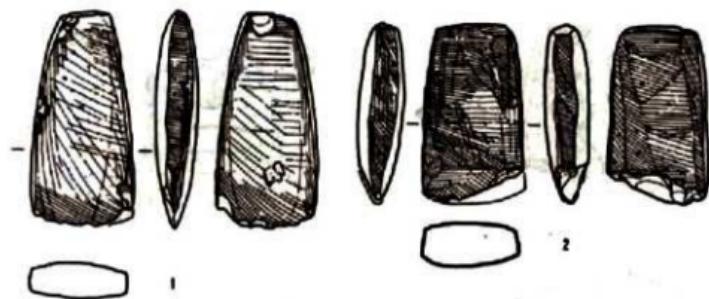
辻遺跡において、切目石錐・碌石錐・石棒・石柱・石製裝飾品等といった存在は、後期初頭における中部高地からの大きな文化的・社会的な流入現象を示すものであろう。特に大型の石棒・石柱類は本来中部地方以東の中前期集落において顕著に発達したものであり、辻遺跡の大形石棒・石柱は近畿地方に西瀬した縄文時代後期前半のものとして、現在のところ最も古い位置を占めるものである。



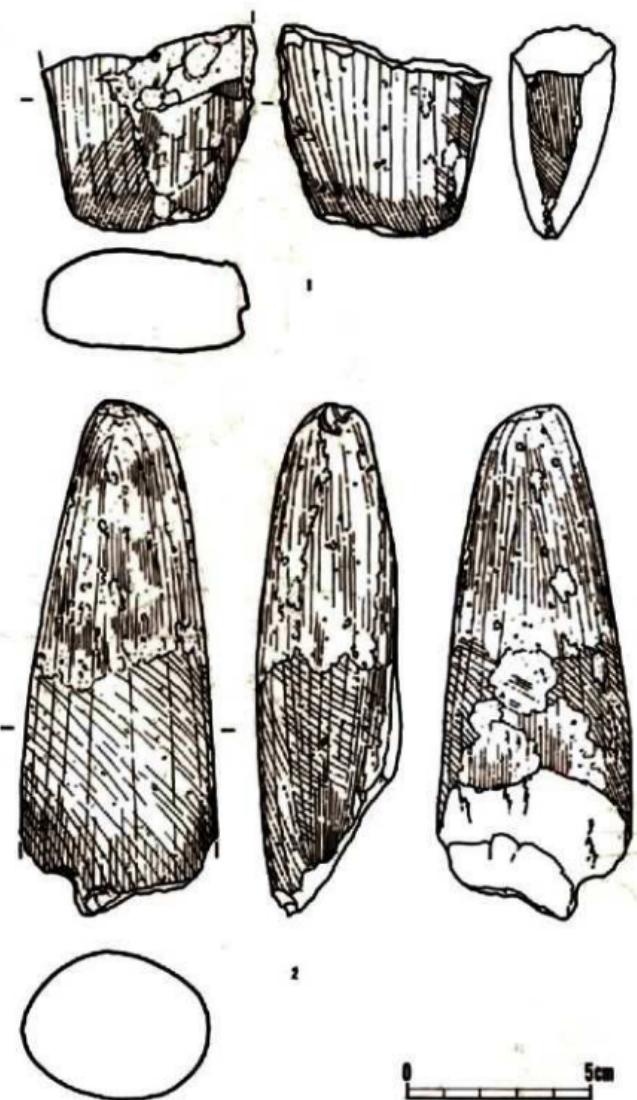
第26圖 石器実測図02



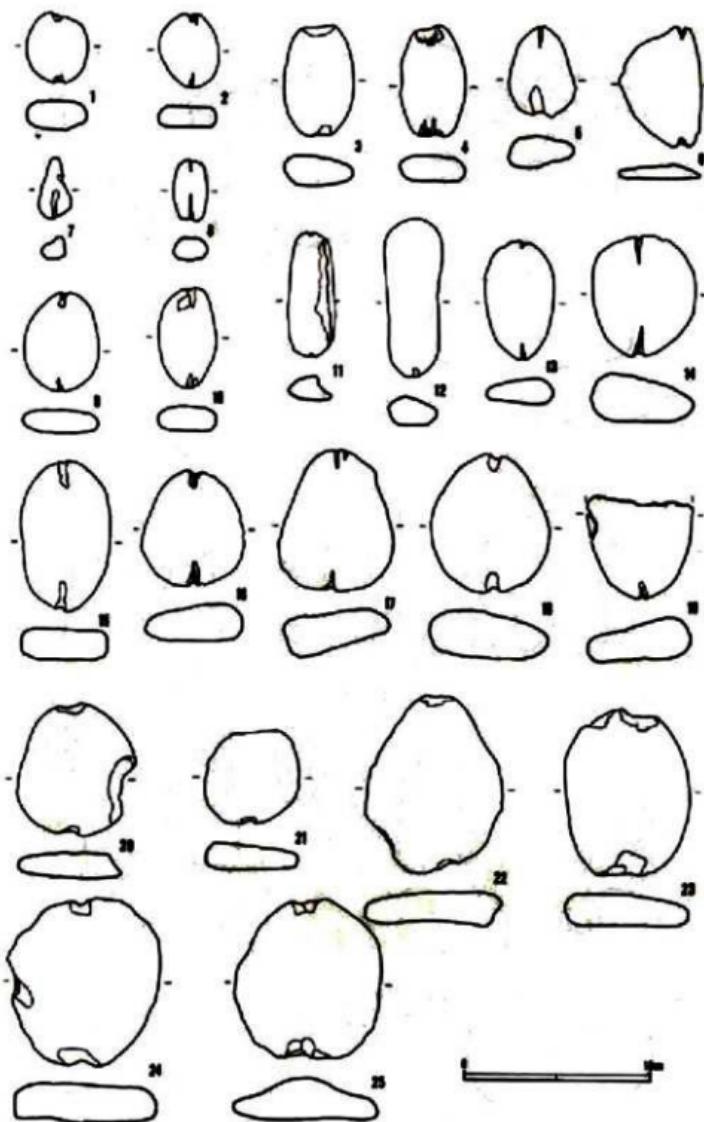
第27圖 石器 寶持 譜



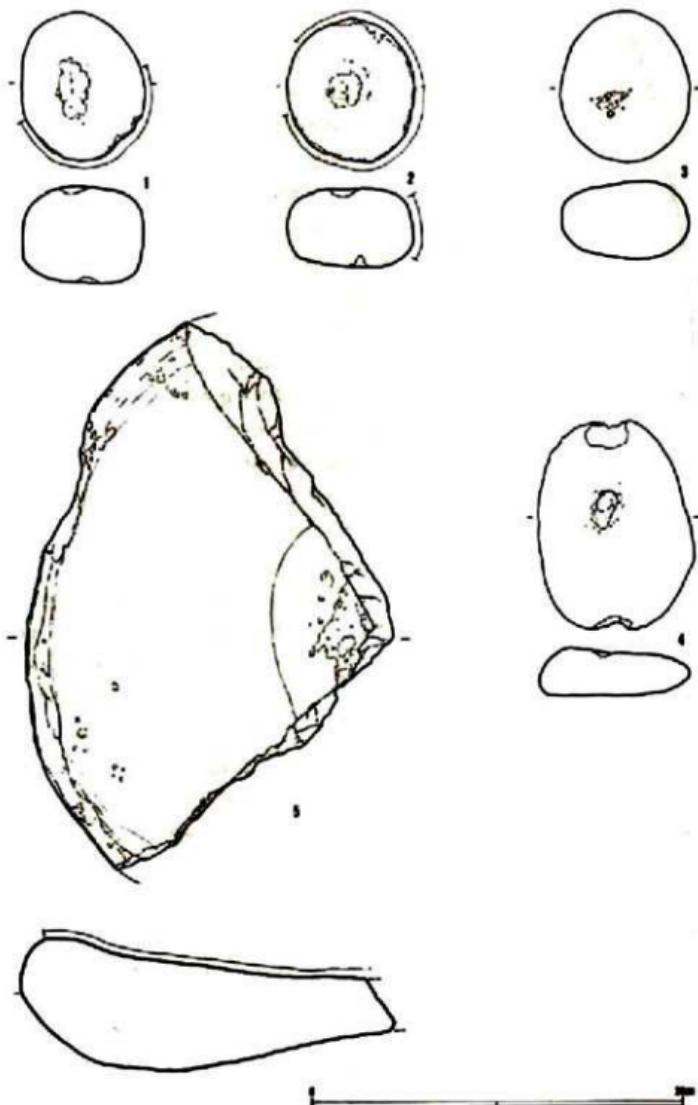
第28圖 石器 実測図 04



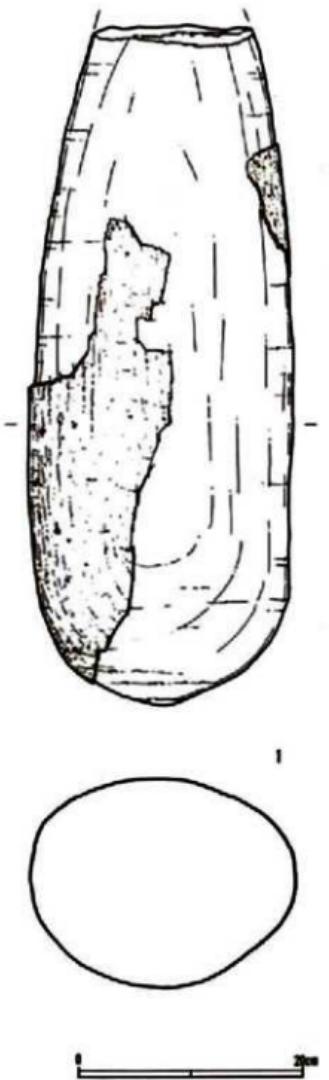
第29圖 石器 實測圖 版



第三圖 石頭實測圖



第31圖 石器實測圖



第32図 石器実測図

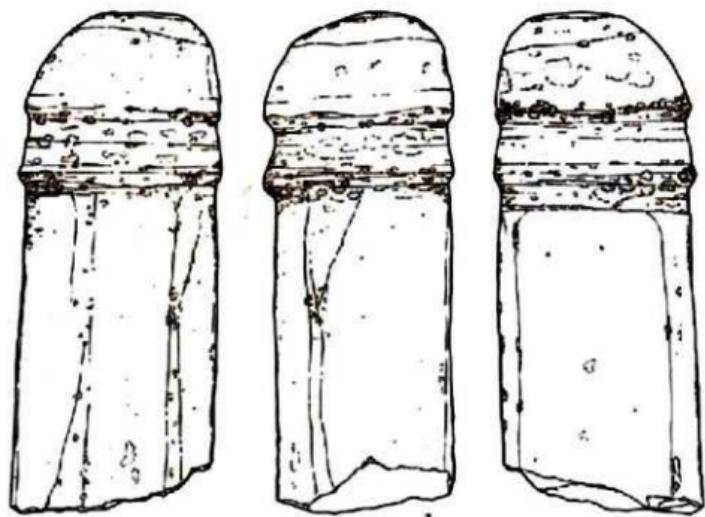
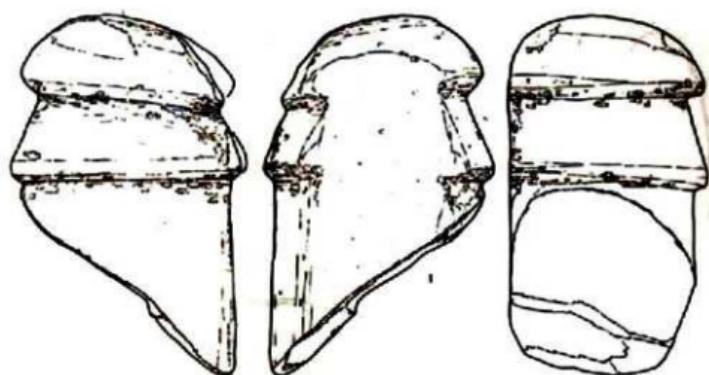
しかしその一方で、石器の量的過多・打製石斧・敲石やスリ石・石皿といった植物質食料を対照とした石器群の過少さといったアンバランスが存在している。調査時代後期中頃の京都府舞鶴市桑飼下遺跡では、打製石斧が77.4%を占める高率であり、石器はわずかに3.9%にすぎない。また後期前半の島根県鳥取市桂見遺跡では打製石斧は3%と少ないが、礫石類が59.7%と高比率を占める。石器は4.5%にすぎない。

辻遺跡における東からの文化的影響の明瞭な存在と、石器組成のはははだしいアンバランスは、文化的な影響、社会的・経済的な変革が、かならずしも一致して生じたものでないことを暗示するのだろうか。後期中葉の桑飼下遺跡では多量の打製石斧を有するが、桂見遺跡では少ないなど、ある程度の差異は存在するのであり、時期差・遺跡立地も細かく検討されねばならない。

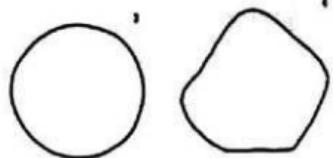
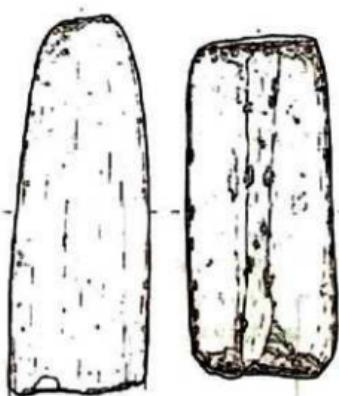
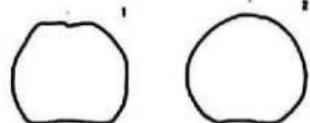
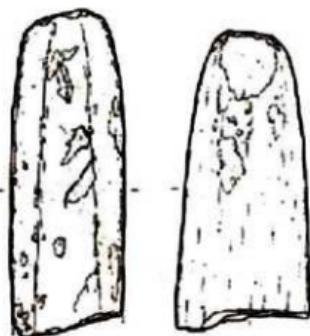
桑飼下遺跡は、由良川の自然堤防上に立地し、桂見遺跡は氾濫原中のおそらく自然砂嘴上に立地している。両遺跡とも多量のトチ・オニグルミ・ヒシ・カシ等の堅果類を含む植物質食料残滓が存在していた点などから、1. 植物質食料採集活動を主とし、2. 獣獵は弓矢・漁業は網漁を主とするし、3. 植物質食料の処理はアクリ抜き技術を習得していることを合わせて指標となる「桑飼下型類型」として、その成立経済基盤が明らかにされている。

辻遺跡の資料は、すべて表層資料であり、経済基盤を検討するのには若干の問題を残すが、少なくとも石器等狩猟用具の比重の割りかたから見るかぎり、異なった経済基盤を有するように考えられる。

辻遺跡の立地は、奈佐川の河岸段丘上であり、桑飼下・桂見両遺跡とは異なる。堅果類等植物質食料にたよる植物質食料主導型であったらうことは、一般的に間違いないと思われるが、辻遺跡特有の性



第33圖 石器實測圖09



第34圖 石器 斧頭圖 40

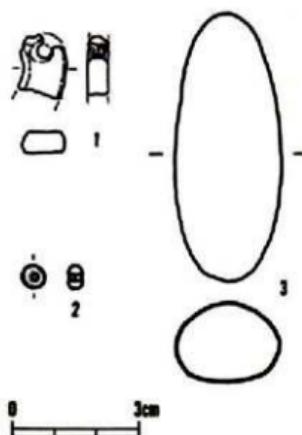
格を考慮したい。多量の石器が採集されているが合わせて未製品が採集され、磨製石斧にも未製品、石棒には調整の明確でないものが含まれている。磨製石斧の未製品は4点しか採集されていないが、遺跡内で多量の泥岩・泥板岩等の削片が発見され、磨製石斧または打製石斧の生産が行なわれたことも知られる。辻遺跡は、生活的な道具としてより、製品として石器が生産されていたと考えられないだろうか。合わせて石斧頭・石棒等も生産されている状況が看取される。辻遺跡は、奈佐谷の奥まった段丘上に立地し、地下塩類の入手しやすい自然堤防は存在しないため打製石斧が顯著でないとも思われる。

遺跡立地により石器組成等も左右される場合も考えられる。後期になって低地に立地する遺跡の増加と並行して「桑飼下型経済類型」が顯著となるが、高原に立地する後期遺跡はかならずしも同様の状況を呈しているわけではない。辻遺跡のように特殊な石器生産遺跡としての性格を有するものなど、短期的な遺跡での特殊な機能の想定も必要とすると考える。

以上、簡単に辻遺跡の位置付けを試みた。西南日本の後期縄文文化は、東からの直接・間接両方の影響を受けつつ成立したのであり、その古い段階に辻遺跡は位置付け得るものである。その受け入るは一律ではなく、各地・各遺跡で多様な状況を呈していたと考えられるが、その後の文化的・社会的・経済的な変革へ向けて大きな一步を進める契機となり得たのであろう。

○引用・参考文献

- 中山修宏他 『桂見遺跡発掘調査報告書』 1973年
- 前田豊邦 『兵庫県豊岡市辻出土の石棒』『古代学研究』54号 1969年
- 渡辺誠 『縄文時代の魚糞』 1973年
- 渡辺誠 『縄文時代の植物食』 1975年
- 渡辺誠他 『桑飼下遺跡発掘調査報告書』 1975年



第35図 石器実測図

V おわりに

辻遺跡は奈佐谷の奥深くに立地する縄文時代の遺跡である。その位置づけは整理結果の成果から和田・山口両氏の報文で明らかにされたと思う。考古学的な観点では、辻遺跡は前期の山

形押型文の時期から後期福田K式の時期まで営まれているが、中心は後期にあり土器の大半はこの時期に相当する。同時に豊岡市内では中谷・荒原などの諸遺跡が旧河岸線沿いに営まれているが、辻遺跡とは立地の面で全く異なるようである。どちらかと言えば神鍋遺跡をはじめとする標高の高い地域に広がる遺跡に近いようである。

考古学的成果は両氏の文章に譲り、ここでは行政的遺跡のあり方を見てみたい。遺跡の存在は古く地元の人々の間では知られていたようである。現在遺跡の中心と思われる神社跡周辺でしばしば土器・石器が採集されており広義な意味での遺跡ではあったが、一般に広く知られるには至っていないかった。1963年当地に道路建設の予定がなされてから行政的に遺跡は表面に出ることになる。正木明男氏が分布調査と一部試掘調査をした経緯などは「辻遺跡範囲測量調査」^(注1)にまとめられており参考にして戴くとして、それによって周知の遺跡となるとともに豊岡市の縄文時代の遺跡として中谷貝塚とともに現在でも代表的な遺跡となってきた。その間辻の地域は大きな変化もなく過ぎており、前記した岡谷・前田豊邦・和田・山口・坪多氏らの分布調査がなされている。表面採集からだけの辻遺跡の検討が行なわれてきた。近時遺跡の整備や農業基盤整備が各地で計画され、奈佐川流域もその例外ではなかった。それに伴う遺跡の増加も多々あった。宮井や内町での縄文遺跡の確認もその一つである。辻に続く晩期の土器が含まれるのは興味ある事実である。

辻遺跡もその波を避けることは出来ず、今回の調査に至ったわけである。今調査対象地は遺跡の外であったが、微妙な地形の変化があることが認められた。今後も県道竹野森本日高線や県道福田辻線の拡幅や整備工事が実施されるであろうが、その際は周辺では改めて確認調査が必要であろうと思われる。特に川の合流点まではなおさらである。

今まで大きな変化のなかった辻遺跡も県道の整備など変化期に入ろうとしている。今報告が遺跡の性格の一端でも明らかに出来れば幸いであるし、この報告から辻遺跡の新しい事実や真実の姿を引き出して戴ければ、それにこしたことではない。

最後に今報告を作成するにあたり、このような形で世に公刊出来たのは忙しい中執筆戴いた和田・山口両氏に負うところが大である。両氏によって辻遺跡がより公の知るところとなり正しい評価が下されたものと思われる。御二人の当遺跡への愛着によるものであろうと思われる。今後とも辻遺跡の新しい側面などが看取できればそれにこしたことではない。奈佐谷も徐々にではあらうが変化していくであろう。地味な調査を継続していく必要があると思われる。

(注1) 岸戸谷裕「辻遺跡範囲測量調査」「兵庫県埋蔵文化財調査集報2集」所収 1974年

(注2) 豊岡市史や前田豊邦「兵庫県豊岡市辻出土の石碑」「古代学研究54号」 1969年など



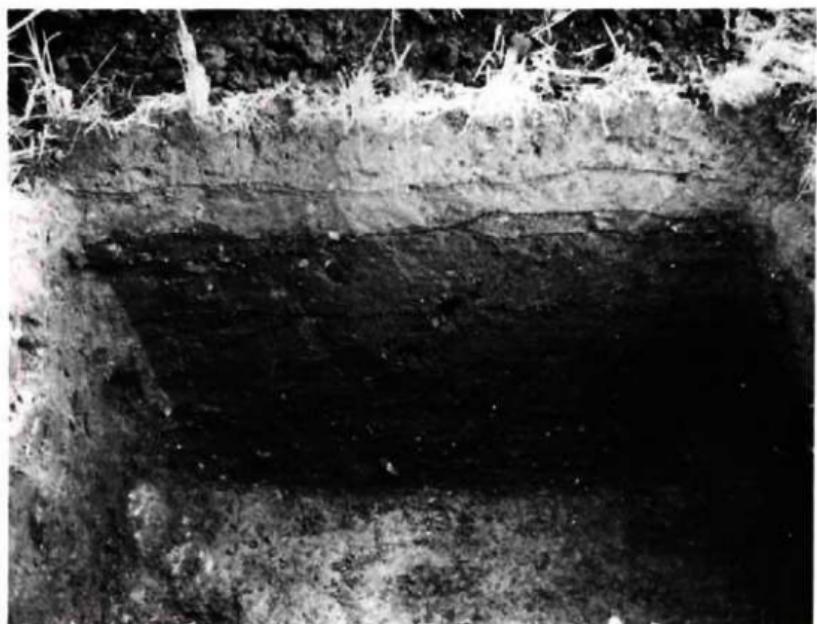
辻遺跡並びに調査地遠景



辻遺跡近景



調査地全景



7 トレンチ南壁



幾文土器



石器(1) 石頭・石錐など



石器(2) 石頭・石斧など



石器(3) 楔形石器・削器など



石器(4) 削器など



石器(5) 石斧



石器(6) 石斧



石器(7) 石錘



石器(8) 石錘



石器(9) 石棒



石器(10) 石棒



石器
石 桂



石器
石 旦

半坂峠古墳群　辻　遺　跡

兵庫県文化財調査報告 第18集

昭和56年3月31日 発行

編集発行 兵庫県教育委員会
神戸市中央区下山手通5丁目10-1
〒650 TEL 神戸(078) 341-7711

印 刷 横石川印刷出版社
神戸市兵庫区中道通3丁目3-6
〒652 TEL 神戸(078) 575-3761㈹
